

第2章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ

伊藤淳史・富井眞・鶴来航介^{*1}・西原和代^{*1}・金井いづみ^{*2}・

田鶴寿弥子^{*3}・杉山淳司^{*2}・小林和貴^{*4}・佐々木由香^{*5*7}・

村上由美子^{*6}・能城修一^{*7}・鈴木三男^{*4}

1 調査の概要

調査地点は京都市左京区岡崎成勝寺町に所在し、鴨川の東方約700mに位置する（図版1-463地点，図1）。古代末の白河街区の範囲に含まれ、六勝寺のひとつ延勝寺の跡地に比定されているとともに、下層には弥生～古墳時代を中心とする岡崎遺跡のひろがり知られてきた。ここに、京都大学岡崎国際交流会館を新設することが計画されたため、予定地全面の516㎡についてを、2018年7月23日～11月9日に発掘調査した。調査の結果、弥生～古墳時代と古代末期を中心に多様な成果が得られ、整理箱240箱に及ぶ遺物が出土した。このうち近世の調査成果については2018年度年報において詳細を報告しており〔伊藤・富井2020〕、本稿は、残る中世以前の調査成果について報告するものである。

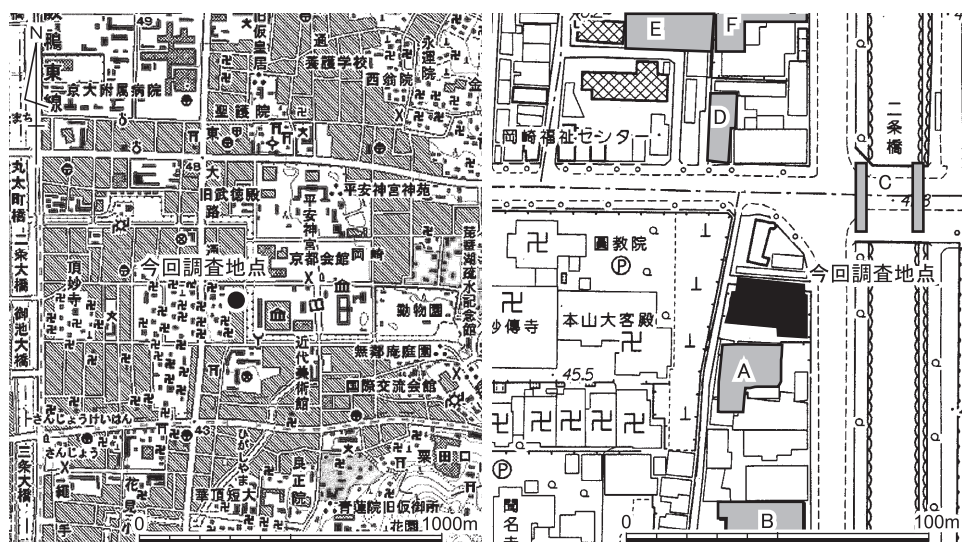


図1 調査地点の位置（左1/25000，右1/2500）

A：京都市埋蔵文化財研究所2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』 B：六勝寺研究会1973『延勝寺跡』

C：竜子正彦1999「8岡崎遺跡・延勝寺跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』

D：熊谷舞子2016「VI尊勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成27年度』

E：梶川敏夫1987「14尊勝寺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』

F：上村和直・西大條哲1994「29尊勝寺跡・岡崎遺跡1」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』

*1 文学研究科 *2 農学研究科 *3 生存圏研究所 *4 東北大学植物園 *5 東京大学総合研究博物館 *6 総合博物館 *7 明治大学黒耀石研究センター

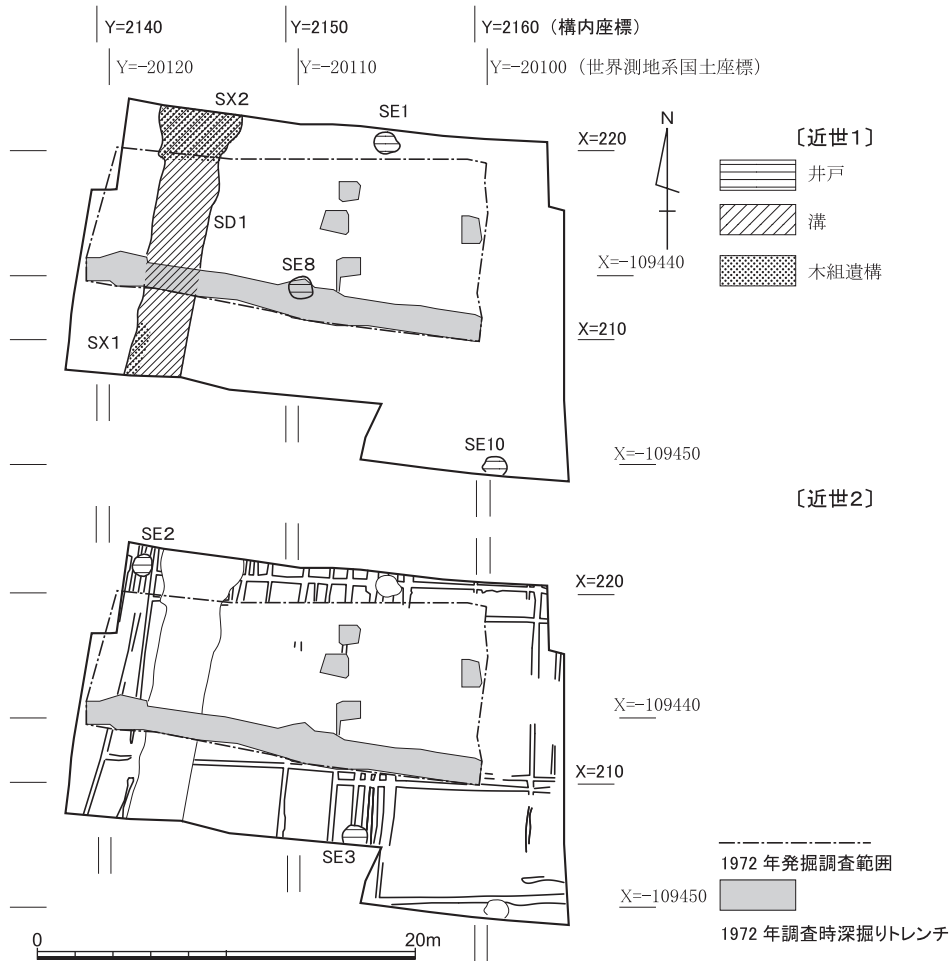


図2 遺構配置概略図(その1) 縮尺1/400

調査成果の概要(図2・3) 昨年度の報告で詳述しているように、調査地点は1972年のアパート建設に先立ち一部が発掘調査されているが(図の一点破線範囲)〔六勝寺研究会1972〕、深掘りトレンチ部分を除いて、現地表から1mあまりの深さの黒褐色土層(基本層序の第5層)以下の堆積はほぼ残されていた。またその周囲には、中・近世の遺物包含層(第2層～第4層)も良好に遺存していた。ここでは、既に報告している近世の遺跡も含め、時期ごとに成果の概略を示しておきたい。

近世の遺跡 黄灰色土(第3層)の上面の検出を近世1、茶褐色土(第4層)上面を近世2としている。近世1についてはおおむね幕末期前後、近世2はそれ以前の江戸時代

調査の概要

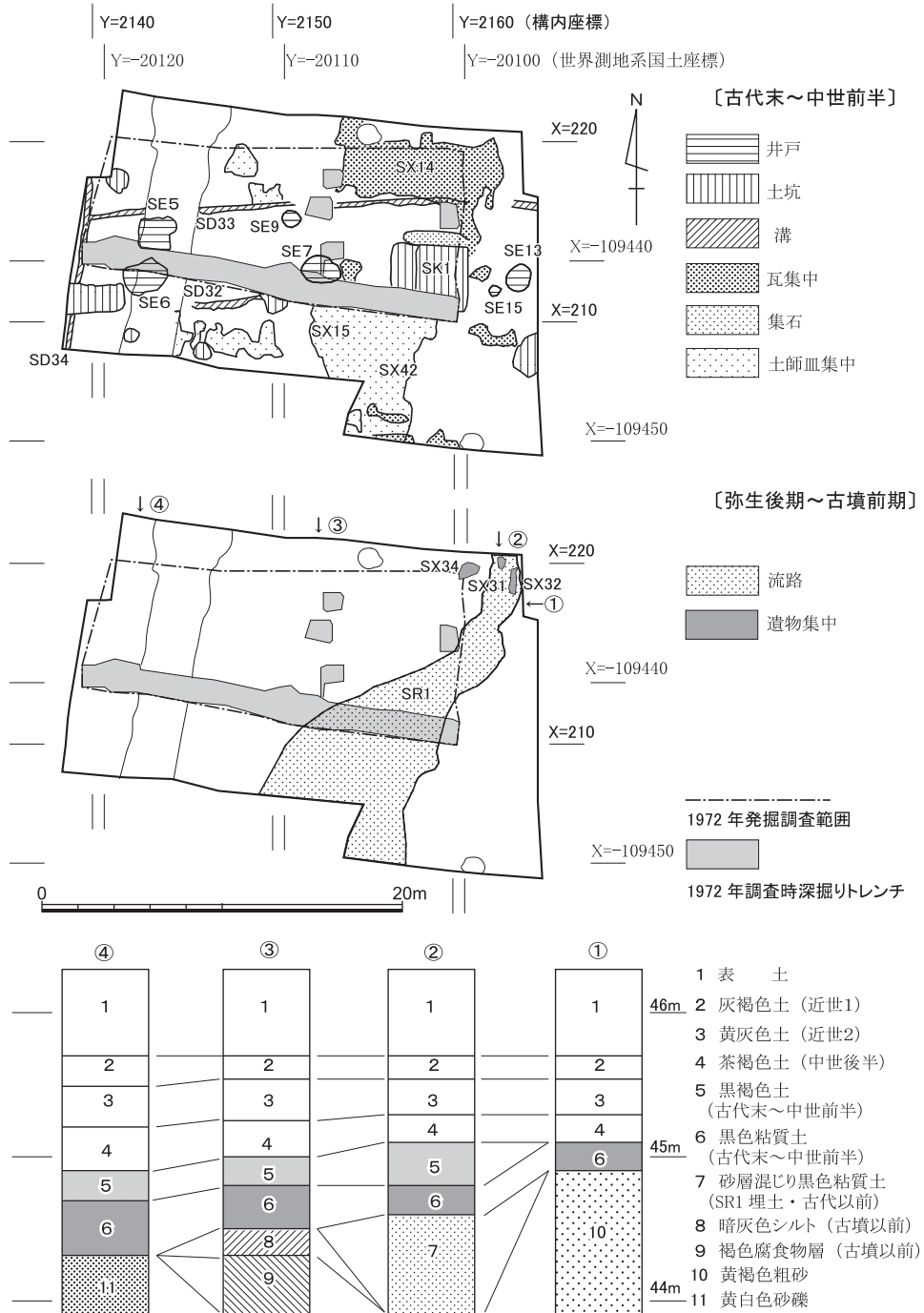


図3 遺構配置概略図 (その2) 縮尺1/400・調査区基本層序 縮尺1/50

とみられる。近世1については、上面が削平されている範囲も多く、深い掘り込みをもつ井戸3基と南北大溝の確認にとどまった。注目されるのは、幅3m深さ2m前後の大規模な南北大溝SD1で、丸太や板を組み合わせた護岸や堰ないし橋状の木組遺構SX1・SX2をとまっていた。今回の第5節でそれらの使用樹種について報告している。調査地は近世岡崎村の西端に位置するとともに、幕末期に設置された加賀藩邸敷地の西辺にも比定されることから、大溝はそれらの土地境界と関連づけられるだろう。近世2では、黄灰色土を埋土とし、わずかに東に振れる南北・東西方向の耕作にかかわる小溝群が全域で検出された。幕末に至るまでは、長らく耕地であった様子がうかがえる。

古代末～中世の遺跡 茶褐色土（第4層）には中世後半期の14～15世紀代の遺物がわずかに包含されるが、この時期の遺構は全く確認されない。黒褐色土（第5層）および黒色粘質土（第6層）中には、12世紀後葉～13世紀前葉ころに比定される段階の土師器とともに陶磁器や瓦類が多量に含まれており、全域でこれらの遺物集中部をはじめ、土坑・井戸などが多数見つかった。なかでも注目されるのは、底面に角材を井桁状に組みその内部を石敷きした方形土坑SK1であり、類例のない特異遺構として性格の検討が課題となる。また、井戸や土坑内では木製遺物が良好に遺存しており、井戸の水溜として据えられた曲物のひとつに墨書が確認されていることも特筆される。これらの使用樹種についても第5節で報告している。

弥生後期～古墳前期の遺跡 調査区の東辺では、基盤の黄褐色粗砂層（第10層）が高まっており、西へと下る斜面地が形成され、その裾部を蛇行するように砂層をまじえた粘質土を中心に埋積する流路SR1が把握された。また、その西肩一帯にはシルトや有機物の腐食層がひろがっていた。こうした埋積の上部を中心に、弥生後期末～庄内式期の土器が多数出土しており、とくに調査区東北部の斜面裾には良好に遺存する個体が集中していた（SX31・32・34）。今回調査地の東～北方の微高地となっている範囲に、岡崎遺跡にかかわる居住域や墓域などが展開している可能性を示唆する情報と言えよう。

発掘と報告の体制 今回の発掘調査と遺物整理作業は、伊藤淳史と富井眞が担当し、長尾玲が補佐した。また、磯谷敦子・高山典子・西田陽子・石田真葵・板垣優河・岩永玲・菊池望・式田洸・田中龍一の助力を得た。

以下本章は、1・3・4・8・9節を伊藤、2節を富井、5節を鶴来航介、6節を西原和代・金井いづみ・田鶴寿弥子・杉山淳司、7節を小林和貴・佐々木由香・村上由美子・能城修一・鈴木三男が執筆し、富井の助力のもとに伊藤が調整・編集した。

2 層 位

昨年度に報告した中世までの堆積について〔伊藤・富井2020〕, まず概述する (図4・5)。第1層は表土・攪乱で, 第2層 (灰褐色土) は幕末から明治にかけての堆積。第3層 (黄灰色土) は江戸時代, 第4層 (茶褐色砂質土) は中世後半までの堆積である。第5層 (黒褐色土) は, 中世前半までの堆積で, 基質は第4層と同様で色調が漸次的に変化しているが, 含有物は, 第4層よりも大きめの礫や炭化物が目立ち, 遺物量も多い。第4層の頃とは土地の利用形態が異なっていたのだろう。第6層 (黒色粘質土) は, 第5層と年代は変わらないが, 遺物量がかなり減少する。北辺では, 直上に土石流状の堆積物 (第6'層: S X30) を, 中位にレンズ状の灰白色砂を点々と, それぞれ確認できる。水の影響を時折受ける低湿地状の環境だったと思われる。以下, 古代以前の堆積について詳述する。

第7層は, 調査区東半の古墳時代頃までの河道と思われる自然流路 S R 1 やその出水にかかわる堆積物で, 砂粒の主体は基本的には花崗岩粒である。流れの強弱があったことが堆積相からわかり, 以下のように細分した。第7 a 層は, S R 1 の西肩に形成された黒色の土壌化層で, 含有砂粒は第7層よりもやや粗い。第7 b 層は, 粒径が5~7mmほどの粗砂や1mm以下の細砂と黒色シルトとの互層で, 粗砂のラミナによると, 南流する S R 1 が西へ溢流した後で形成されたと思われる。第7 c 層は, 西方に散在する粒径1~3mmの粗砂から成る小さい単位のレンズ状堆積で, 後述する第7 e 層や第7 g 層を形成した水流にともなうものかも知れない。包含していた植物種子の放射性炭素年代は, 1820 ± 20 B P である (2018年度年報の図42の年代測定試料1で, 本年報の表10の試料4)。

第7 d 層は, 暗灰色から黄灰色を呈するシルト~細砂が主体で, 木片や炭化物を多く含む。第7 e 層は, ラミナの残る粗砂。南西へ流れる河道が西へ溢流した後で形成されたと思われる。第7 f 層は, 主に細砂と腐植の互層。第7 g 層は, 分布域の東辺の上部や西辺は粒径3~5mmの粗砂だが, 東辺の下部は細砂と分解の進んだ腐植の互層となる。第7 h 層は, 粒径3~10mmの粗砂で, ここでは黒色を呈する堆積岩粒も目立つ。また, 分布域の西辺では第7 i 層と交指状になる。腐植が主体の第7 i 層は, 基質が標高44.3mより上位ではシルト~粘土だがそれ以深は粒径1mmほどの細砂となり, 上方細粒化がうかがえる。

第8層 (暗灰色シルト) は, 西北辺や東南辺では炭化物や木片などの有機物が遺存するが東北辺や西南辺では土壌化が進んでいる。北壁では, この第8層とその上位の第6・7層との境界が波打っており, 第5・6層の堆積していた頃に大規模地震があったことをう

かがわせる。直下の第9層は、水成堆積に由来すると思われるが堆積が複雑で、腐食層や有機質を多く含むシルト～粗砂までの砂層が堆積している。北壁中央付近では第8層との境界が不明瞭で、第8層出土として回収した木器（I 1264）の放射性炭素年代は 1950 ± 20 B Pである（表10の試料5）。南壁では、土壌化層の第9 b・d層と砂やシルトの第9 a・c・e層に細分した。第4節にて詳述する弥生時代末～古墳時代前期の遺物は、この第9層までの出土である。

第10層（黄褐色粗砂）は、SR1の東肩となっている無遺物層で、東北辺にわずかに分布する（図3の基本層序①）。弥生時代前期末の土石流堆積物の可能性もあるが、堆積状況を精査してはいない。第11層は、無遺物の砂礫層で堆積岩も目立つ。北壁と南壁でそれぞれ分布を確認しているものの、両者が一連の堆積によるかは不明。南壁では、第11層の下位に、ともに有機質を多く含む土壌化層（第12層）や上方細粒化する砂層（第13層）が認められるが、いずれも遺物を確認できなかった。

南壁の西辺には、第8層が土壌化した第8'層（暗灰色シルト質土）や第6層の直下に、非常に硬質のシルト質土～砂質土が堆積しており（A・B層）、その硬さからかなり古い堆積物と判断したが、その下位に土壌化層（D層）が分布していたので、断ち割りを入れて堆積層の把握に努めた（図6）。近接する調査区と同じく（図1のA地点ほか）、火山灰層を確認したが、その下位に有機質を多く含む粘土と土壌化層が堆積していたので（W～Y層）、重機で掘削可能な深さまで坪掘りを試みた（Z-0～Z-17層）。

標高43.8～43.9mに堆積しているQ層の火山灰は、里口保文氏に同定していただいた。氏によると、「試料の分析は、秤量、洗浄、篩別した後、粒径 $1/4-1/16$ mmのものを対象として、全鉱物組成比、火山ガラスの形状について、偏光顕微鏡下で200粒以上同定し量比を粒数%で算出した。火山ガラスの形状は吉川〔1976〕の区分に従い、扁平型（Ha, Hb）、中間型（Ca, Cb）、多孔質型（Ta, Tb）に区分した。火山ガラスの屈折率の測定には、古澤地質調査事務所製の温度変化型屈折率測定装置を使用した。火山灰の記載岩石学的性質を表1に示す。この火山灰は、火山ガラスを主体とし、その形状は扁平型から中間型であり、その屈折率は $1.499-1.501$ を中心とする $1.499-1.502$ である。日本の遺跡包含層の年代は、数万年前以降であること、前述の記載岩石学的性質から、近畿地方の多くの地点で記載されている始良Tn火山灰〔町田・新井1976〕に対比される。」とのことである。

土壌化層であるD層の上位では、時おり水がおよんだ（I層）後に堆積物が上方細粒化して（G層→F層→C層）安定した環境に至ったと思われるが、D層の下位でも、X層～

層 位

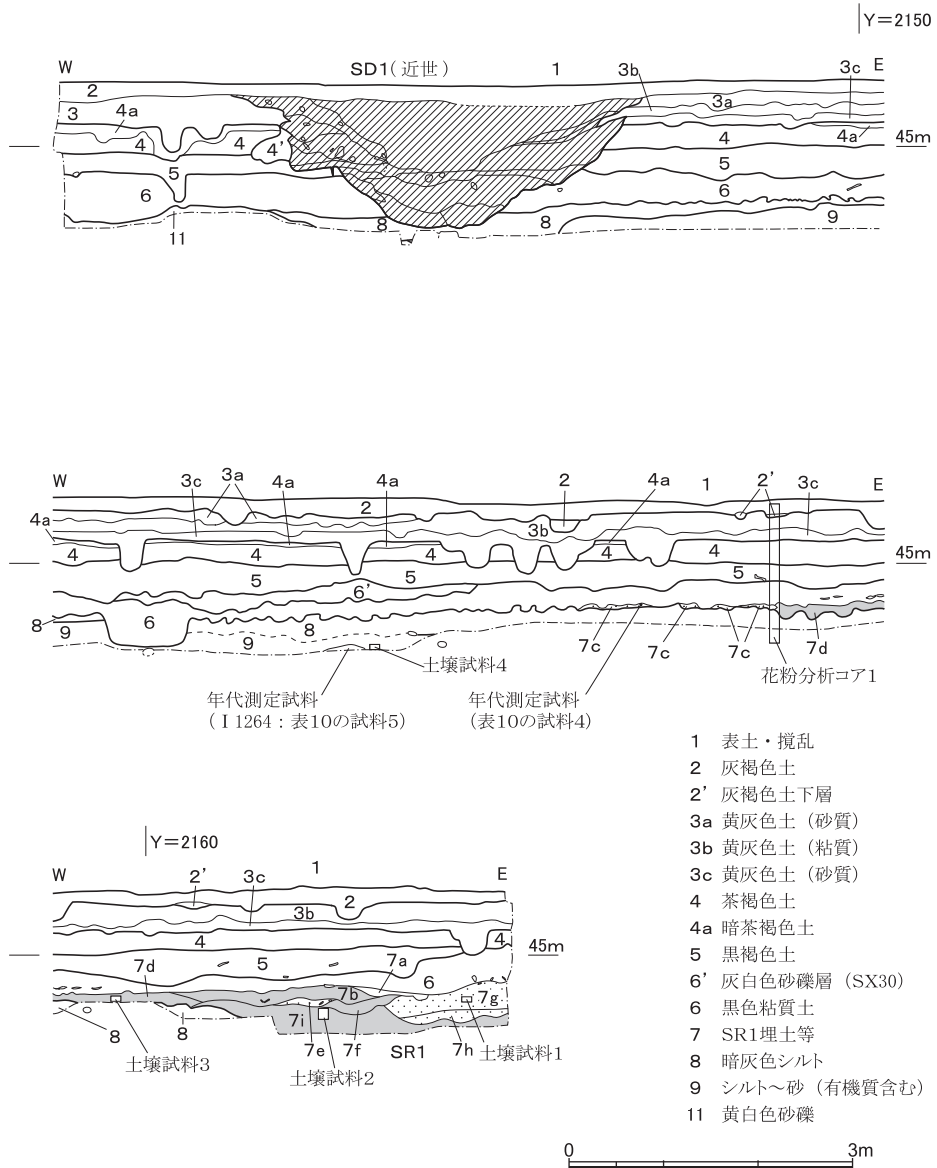


図4 北壁の層位 縮尺1/80

表1 火山灰の分析結果

全鉱物組成 (%)				火山ガラスの形状 (%)							火山ガラスの屈折率
Gl	Qz	Fel	HM	Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	Oth	
86	0	12	2	5	34	38	16	4	3	0	1.499-1.502 (1.499-1.501)

Gl:火山ガラス, Qz:石英, Fel:長石, HM:重鉱物。Ha・Hb・Ca・Cb・Ta・Tb:火山ガラスの形状区分[吉川1976]

Y層が形成された離水期の後には、V層→U層と上方粗粒化する水成堆積が見られる。西に河道があり、P層→O層→N層→M層→L層の堆積過程でU層も形成されたと思われるが、そのL層が堆積するまでの間に細粒分のT層が堆積してやや離水気味の環境になっていた頃、Q層とS層を構成する始良T_n火山灰(=AT)が降灰したのだろう。

M層→L層→K層と上方粗粒化しながら東への溢流でAT堆積層が覆われてからは、時おり出水があるものの(I層)、離水して土壌化が進む(J層・D層)。なお、発掘調査時点で、Q・S層はATと予測できたので、その下位の土壌化層(X層)を、旧石器時代の遺物を求めて2m四方あまり掘削した。しかし、上位の土壌化層(J層・D層)と同様に無遺物で、土壌化層の基質に比べて粒径が不自然なほどに大きい石なども皆無だった。

Y層の下位でも、土壌化層ないし滞水性の堆積物と水成堆積層との繰り返しが認められる。すなわち、掘削し得た標高41.9mより上位では、Z-17層→Z-16層→Z-15層と上方粗粒化して滞水域になってから、有機質の分解が進まない湿地状の堆積環境となり(Z-14層→Z-13層)、再び増水して上方粗粒化してからは(Z-12層→Z-11層→Z-10層→Z-9層)、離水して安定的な環境となり土壌化が進んだ(Z-8層→Z-7層→Z-6層)。その後、地下水位が上昇したのか、未分解の有機質を多く含む細粒分が堆積し(Z-5層→Z-4層)、水流が徐々に強くおおようになって上方粗粒化した後(Z-3層→Z-2層→Z-1層→Z-0層)、離水して土壌化が進む(Y層・X層)。

これらの深掘りで確認した土壌化層や腐植層では花粉分析用のコアを採取しているので、分析が進めば、AT降灰前後の古植生に関して理解が進むだろう。なお、調査区西南隅あたりで中世後半の第4層から出土した有茎尖頭器(I 1258)は、縄文時代早期を特徴づける石器であり、あまり摩滅していない。本調査区には、第4層の直下には古代末～中世前半の細粒堆積層(第5・6層)が安定的に厚く分布しているので、中世前半までに井戸などの掘削によって本来的には第12層ないしはA・B・D層のいずれかの離水期のものが掘り出され、それが中世後半に第5・6層から掘り出されたとも考えられる。

層 位

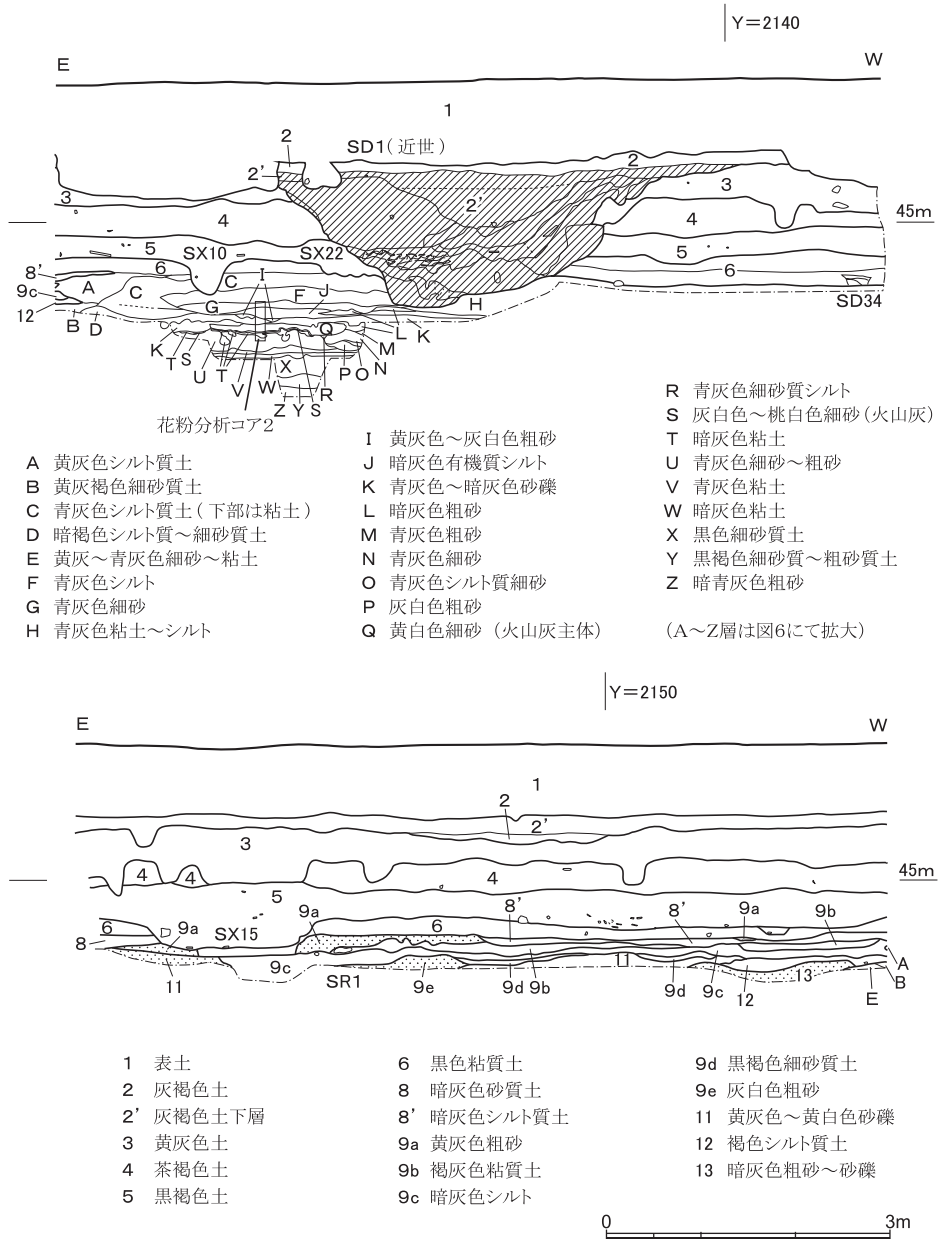


図5 南壁の層位 縮尺1/80

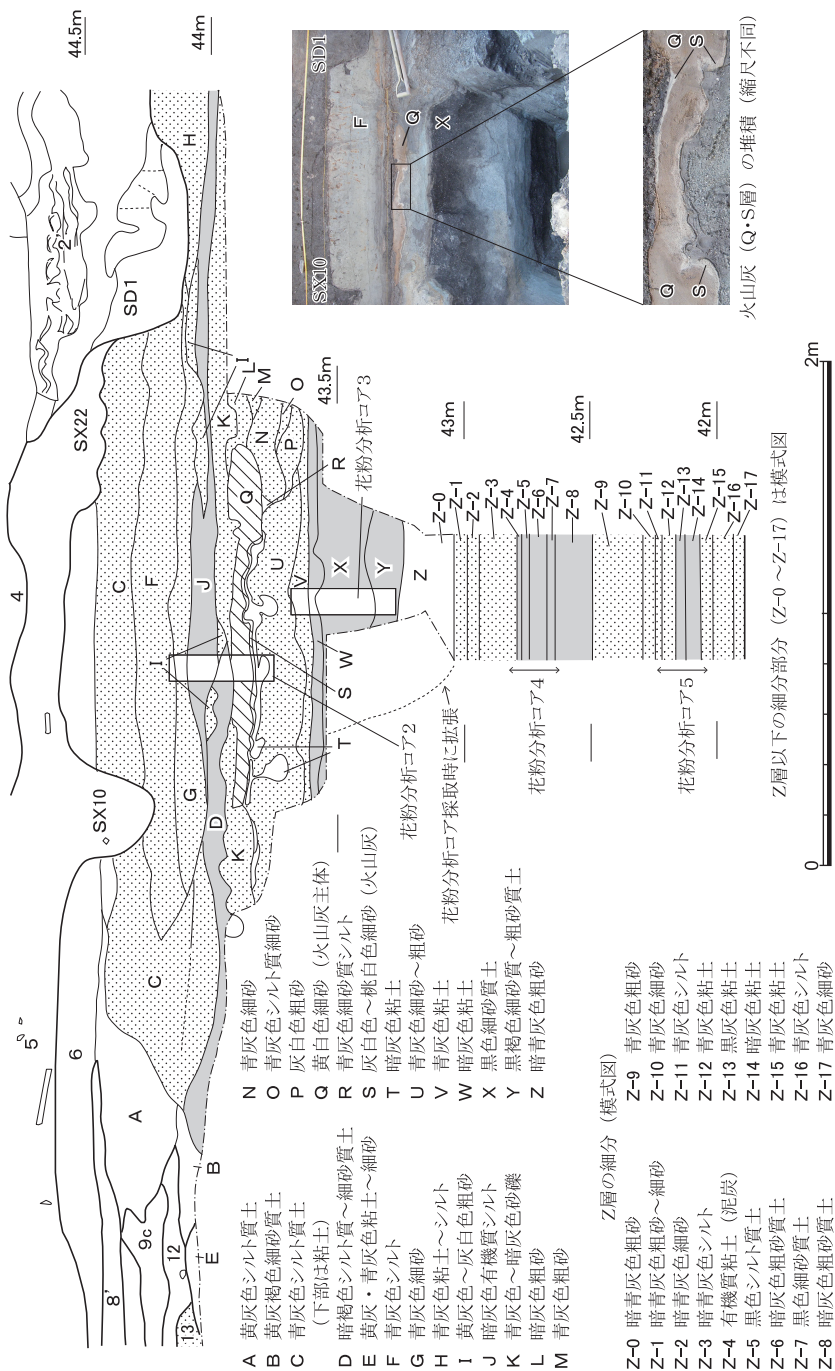


図6 南壁西辺の掘削深部の層位 縮尺1/30

3 古代末～中世の遺跡

(1) 遺 構 (図版 2～16, 図 7～14)

遺構の検出状況 基本層序 (図 3) における第 5 層黒褐色土と第 6 層黒色粘質土内には、ともに 12 世紀後葉～13 世紀前葉ごろの土器や瓦類、礫などが多量に含まれている。これら両層は、南側隣接地の調査において「整地層 1」「整地層 2」と報告される堆積に相当するとみられる〔京都市埋蔵文化財研究所 2014〕。層中で遺物密集度の高い部分を土器溜や瓦溜として記録しながら掘り下げ、黒色粘質土上面で一旦遺構検出をおこなっている (図版 2)。しかし、層の境は不明瞭な部分も多く、遺構面は便宜的なものである。また、掘り込みの輪郭は層中ではほとんど把握できず、黒色粘質土掘り下げ後の暗灰色シルト等の上面に残るもので記録されている。このように、層の上下に対応する新古の時期区分の認定は難しい状況であり、(図 7) にはすべてを古代末～中世初頭 (12 世紀後葉ごろ) の遺構としてまとめて提示している。南側隣接地においては、2 つの整地層を平安後期と平安末～鎌倉初頭に比定されたが、今回は、遺物の項で後述するように、若干の新古の傾向はうかがえつつも明瞭に時期区分できるほどの相違は認められない、と判断している。

以上の状況を踏まえつつ、遺構の重要度を考慮して、A：方形土坑 SK 1，B：SK 1 に関連する可能性のある遺構，C：その他の遺構，と大きく区分し、順に報告する。

A：方形土坑 SK 1 (図版 3～8, 図 8～12)

調査区東半中央付近に位置し、大部分が 1972 年の調査範囲に入るため上面が削平されているが、黒褐色土中から掘り込まれていることを確認した。南辺は攪乱 (1972 年深掘トレンチ) で破壊されており、当初この攪乱壁面で断面を確認することで遺構の存在を認識し、黒褐色土上面を精査することで、まず SK 1-1 となる東側部分の平面輪郭も確認した (図版 3-1)。そしてその後、内部の掘り下げを進める過程でさらに周囲の精査を進めたところ、西側にこれと接続するもうひとつの落ち込みが存在することが断面と平面で把握されるに至り、これを SK 1-2 とした (図版 5-1)。最終的に掘り終えた結果として、当初は SK 1-2 を加えた東西に長い遺構が築かれたのちに、西側のその範囲を埋め立て縮小構築されたものが SK 1-1 であると判明した (図版 7)。その変遷の詳細は後述し、まず SK 1-1，SK 1-2 それぞれの特徴を報告する。

SK 1-1 埋土掘りあげ後の全体状況は (図 8) を、細部の状態については (図版 4～6, 図 11) に示した。掘方の上面での規模は南北 3.55m 東西 2.80m をはかる。検出面

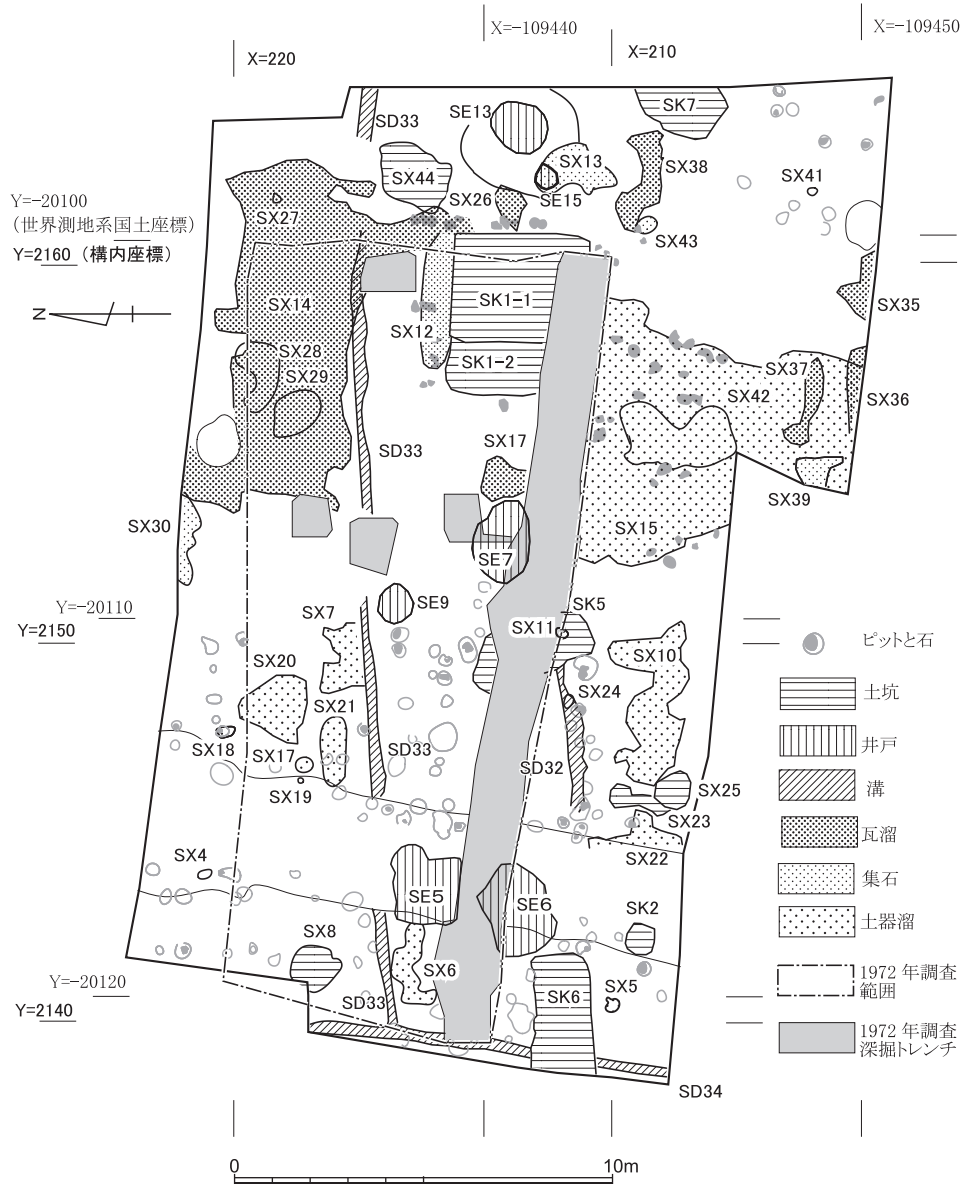


図7 古代末～中世初頭の遺構 縮尺1/200

古代末～中世の遺跡

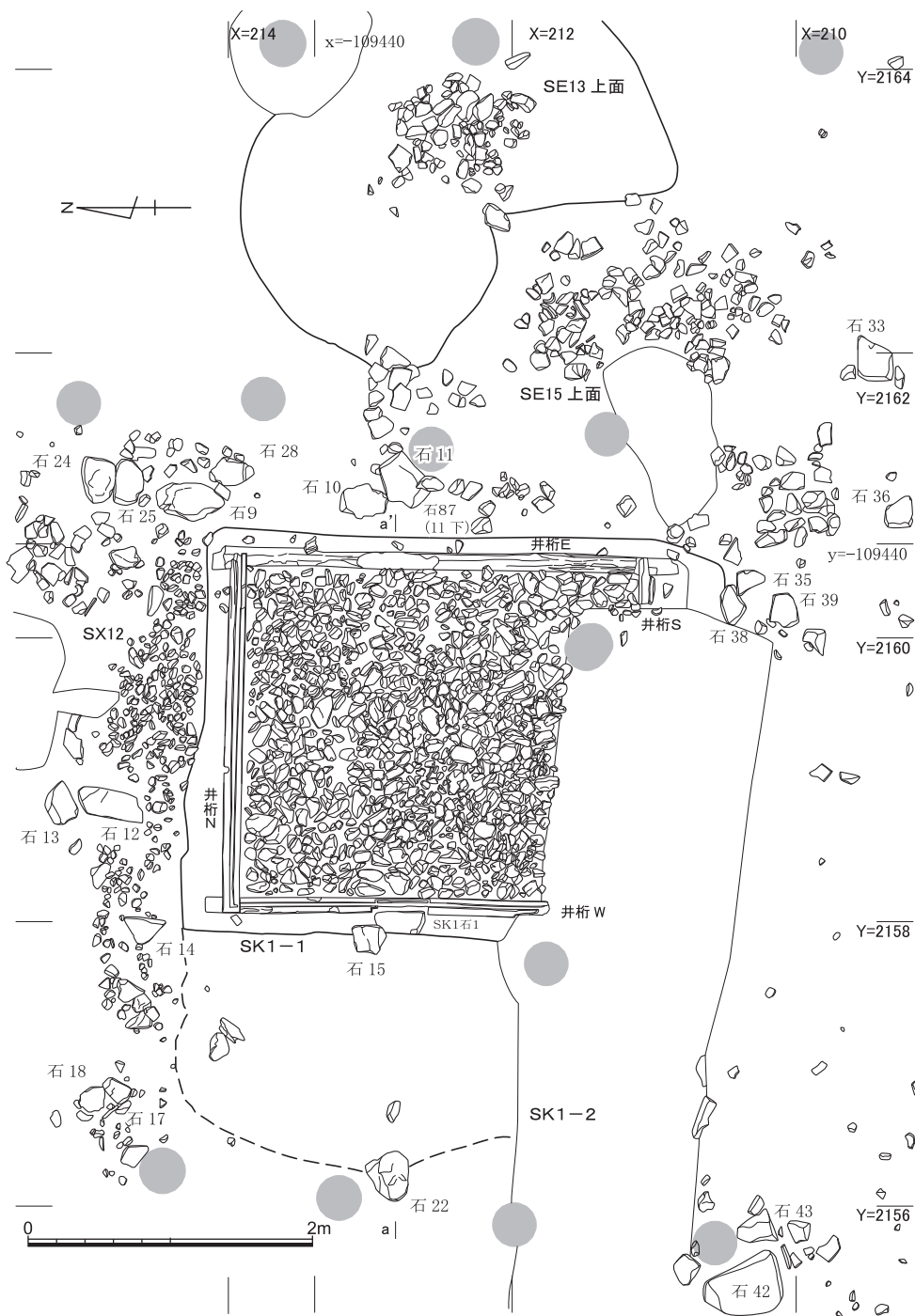


図8 SK1-1および周辺集石検出状況 縮尺1/50

から深さ約40cmの底面には礫が敷かれ、角材が四隅を囲むようにして、心心間で南北2.80m東西2.40mとなる井桁状に組まれて置かれる。西壁の上半部にはヒノキの一枚板が貼られた状態で遺存していた。この西壁添いのみに大きな石が置かれ、底面のSK1石1と上部の石15とで、階段状を呈している（図版5）。なお、土坑の四辺沿いは、井桁状の角材を埋めるように砂礫が斜めに厚く堆積し（図10-4層）、さらにその上部は瓦や巨礫をまじえた黒褐色土が埋積して平坦化している（同2層）。

井桁状の角材（井桁N・W・E・S）のうち、井桁S（南辺）は攪乱で破壊されて残存が少なく、遺存状態も不良のため細部や樹種は不明である。ほかはスギないしヒノキの針葉樹を用いており、二方桁目材で幅11cm厚さ6cm程度、上面の中央部に幅3cm深さ2cm程度の溝を穿つことを特徴とする。井桁W（西辺）と井桁N（北辺）はとくに遺存が良好であって、西北角となる部分には、相欠き接ぎと呼べるような互いの抉り部分を組みあわせる仕口がみられる。また井桁Wの中間部は、石を置く部分に合わせて33cmにわたり切り欠きを設けるとともに、その範囲には別部材があてがわれ、板材を立て固定できるような隙間と2孔の穿孔が確認される（図11-2参照）。このことから、四辺の角材上面に穿たれている溝も、板材を立てるためのものであった可能性が高いと推測される。

SK1-2 SK1-1の西側に連続して検出される掘り込みで、大量の木片や木製品を交えた黒褐色土や黒色砂質土で埋積している（図10-6・7層）。それを東端で押さえているのが、SK1-1の西壁となるヒノキの1枚板である。床面には粗砂（同8層）がひろがり、北辺には、ヒノキの角材片（平面28×14cm厚さ6cm）を西端に配した東西方向の石列があり、SK1-1の井桁Nの下部へと続いている（図版7-3）。また西辺の中央やや北寄りの位置に扁平な石（SK1石9）が置かれ、掘方の上部にはやや南へずれておおぶりの石22が置かれている。なお、この石22の下には、拳大の栗石が積まれ、スギの木杭2本（図62-I 1047・I 1048）が打ち込まれていた（図版8-3）。

SK1-2とSK1-1の変遷 以上の検出状態などから、本来これら2つは、東西が4.37m南北3.55mをはかる一連のひとつの遺構であり、西側部分を埋め立てて縮小構築したものがSK1-1であると判断される（図12）。SK1-2床面北辺で検出された角材と石列は、そのままSK1-1井桁Nの下部へと連続して続いており、本来はここに東西に長い角材が置かれていたことを示している（図版8-4）。井桁Nは、製作時の端面が残る西端に対して東端は切除された状態であることから、短く切り落として再設置されたのであろう。攪乱で破壊されほとんど遺存していないが、井桁Sも同様であった可能性

17

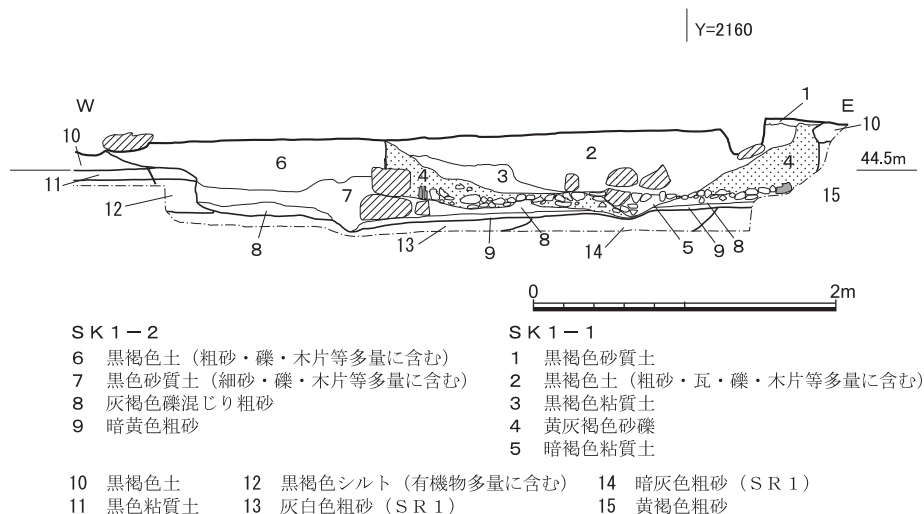


図10 SK 1 東西方向断面（図8 - aa'）の堆積状況 縮尺1/50

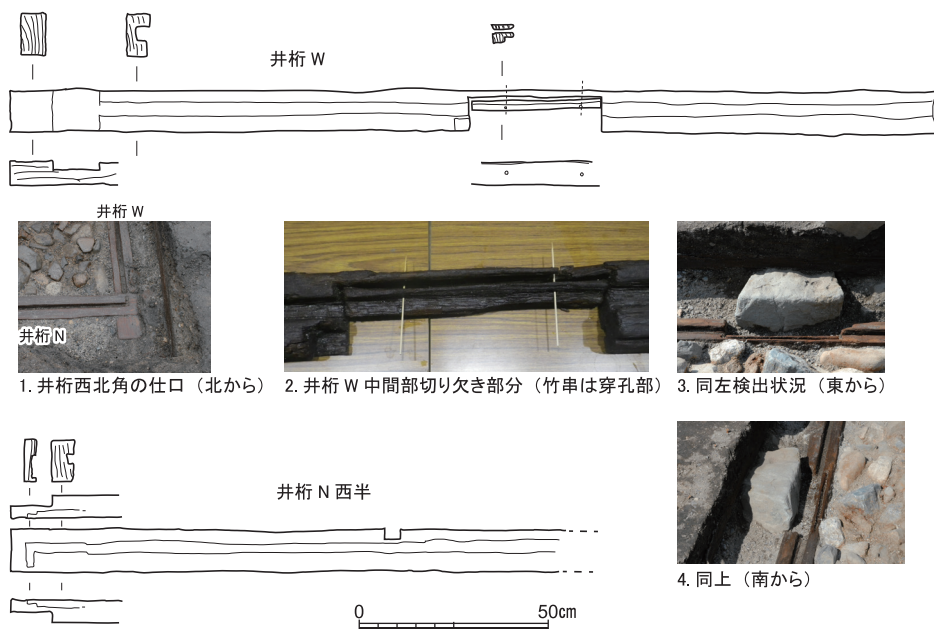


図11 SK 1 井桁状角材の略測図と細部（図の縮尺1/20）

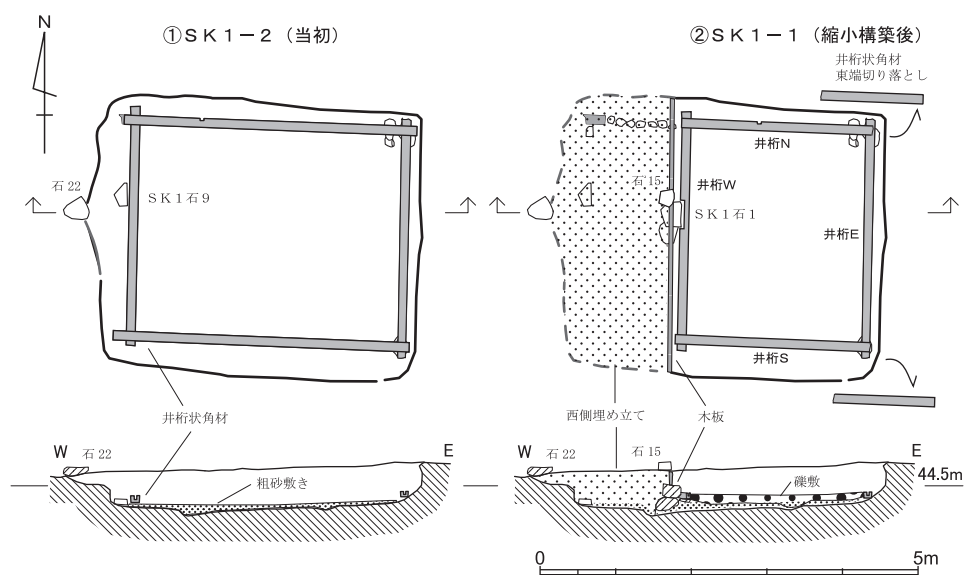


図12 SK 1 変遷想定図 縮尺1/100

①東西4.37m・南北3.60mの掘形の床面には、粗砂を10cm弱程度敷いたのち西壁際中央北寄りに30cm×20cm程度の扁平な石（SK 1 石 9）を置く。また西北隅には角材、ほかの隅には礎石を据え、それらの間に石列を配し、上部に東西3.62m・南北2.87mの規模で井桁状角材を設置。西壁の上部やや北寄りの位置に礎石（石22）が置かれる。下部には栗石が積まれ2本の杭が打ち込まれており、関連するとみられる（以上図版8参照）。

②西辺から1.5mの位置の南北中央付近に、あらたに階段状に石（SK 1 石 1）を据え、間を埋める。埋めた東端を杉の1枚板で留め、掘形が東西2.80m・南北3.60mとなる新たな方形施設の西壁とする。北辺と南辺の井桁角材は東端を切り落とし、また西辺の角材は階段状の石にあたる位置に切り欠きを入れ、東西2.40m南北2.87m規模の井桁を再設置する。井桁内側には礫を敷く。また西壁上部やや北寄りに、あらたに石（石15）が置かれる（以上図版5参照）。

があろう。また、SK 1-1の東北角や東南角には基礎となる大きな礎石が配され（SK 1 石 4～7）、北・東の井桁下の石列は堅固に置かれているのに対して、西辺の井桁Wの下部は板材や角材を噛ませたぞんざいな支えが顕著に認められる（図版6-5）ことから、縮小構築にともない応急設置された状況がうかがえる。

図12にしたがい変遷の想定を整理すると、以下ようになる。

①まず東西方向に長い土坑を築いたのち、床面に粗砂を敷き、支えとなる礎石や石列などを配して井桁状の角材を設置する。西壁際にはステップとなる扁平な石を配する。

②何らかの理由で東西方向を縮小構築することになり、東西方向の井桁N・Sは東端を切除し、井桁Wは東へ位置をずらして再設置する。その際、西壁際にあらたに設置された

階段状の石をかわすために切り欠き部分を設ける。井桁に囲まれる内部は礫敷きする。西側は廃材とともに埋め立て、東端を一枚板で押さえて、これをあらたな遺構の西壁とする。

このような遺構は類例が知られず、どのような機能を果たしていたかは定かではないが、調査成果などをもとに、あらためて第9節で言及したい。

B：SK1に関連する可能性のある遺構

集石SX12 SK1の北壁に沿って、東西方向に5cm程度大までの小礫が幅50cmあまりで密に敷かれたような状態で検出されている(図8)。石9が東端となり、中間に扁平な石12・13があり、SK1-1の西北角に位置する石14までは小礫の密集度が高く、それより西側は石17・18付近まで小礫の大きさが不揃いで密集度もやや疎となる。残存している礫でみる限りは、軸線がSK1より若干東へ振れている状態に看取されるが、SK1との切り合いは認められず、1972年の調査時に上面の削平や攪拌をうけている可能性もあることから、SK1の北に接して当初から附属していた石敷き状の施設であった可能性が高いと判断する。

配石・土器溜SX42 SK1の南側一帯に、攪乱による破壊部分を挟んで確認された南北方向の浅い窪みと複数の石が配された遺構(図版9・図9)。底面のレベルは全体として南へ向かうにつれてわずかに低くなっている。石72～石77など列状の配石を伴う部分は、幅2m深さ20cm前後で、窪み部分に粗砂が浅く埋積する。この北側や南側は幅が広がり浅い窪みとなっており、落ち込みの輪郭は不明瞭となるが、これらの範囲を中心に完形品を含む複数点の土師器皿類が、口縁側を上に向けた状態で出土した。SK1に接続する部分が不明のために決めたいが、関連する祭祀遺構であった可能性が考えられる。また、高まりを隔てて接続する西側のSX15でも、同様な配石や土師器の出土状況が認められ(図版13-4)、これらは一体の遺構であったとみることもできる。

SE13・15 SK1の東側に検出された大小2基の水溜施設。当初は集石(SE13上面)や瓦片の集中部(SE15上面)として確認され、それらを除去すると、下部より曲物を据えた水溜部があらわれた(図版9・図13)。SE13は、径2m深さ80cmあまりをすり鉢状に掘ったなかに、径70cm高さ30cm程度のヒノキの曲物を据えている。曲物は腐朽しており形を保って取り上げることはできなかった。SE15はその西南側に設けられ、径35cm程度を軒平瓦(I910)を含む平瓦類で円形に囲んだ、深さ43cm程度の遺構(図版9-6)。囲まれた内部には円形の痕跡が残っており、本来は曲物を据えてその周りを立位の軒平瓦や平瓦類で囲んだものとみられる。それぞれ別々に掘り込んでいるが相互の切り合いは認

古代末～中世の遺跡

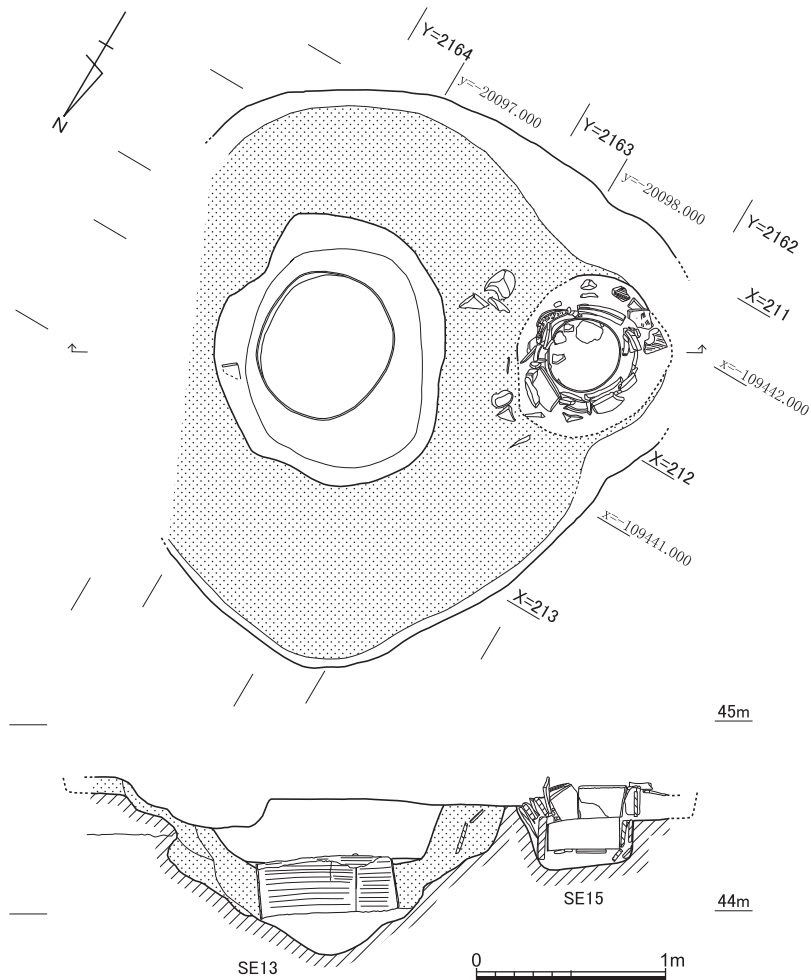


図13 SE13・SE15 縮尺1/40

められず、また、最上面では両者を囲むような掘り込みの輪郭も確認されることから、これら2基はセットとして同時に築かれたものとみられる。その場合、SE13の底面標高は43.75mと低く、SE15が44.12mであることから、SE13に湧水があったとすれば、SE15にそれを汲みとって貯めて使用するような利用法も推測される。そして、SK1の底面は44.22m前後であり、水を用いた祭祀などを想定する場合、使用する水の確保のために設けられた水溜施設として関連付けられよう。

礎石の並び SK1の周囲には、礎石として使用された可能性のある石の配置が認められるが、上屋の建物を確実に復元できるような規則的並びは把握できない。こうしたな

かで、SK1の東側には、石9～11・24・25・28など南北方向に比較のおおぶりの石が列を成している状況がうかがえる。特に石11はひときわ大きく、石29と2段に重なるように置かれており(図版9-2)、SK1の造り替えを反映するものとみることができる。また、この石11と西側の石22を結ぶ東西方向のラインは、内部の西壁際に階段状の石が置かれる位置に相当しており、東西方向の軸として構造上も重要視されていたとも推測される。これら上屋の復元にかかわる問題については、1972年調査時の石の検出状況との重ね合わせ(図89)も参照しながら、第9節で再考する。

C：その他の遺構(図版10～14、図11)

井戸や水溜状の施設、土坑、溝、土器溜や瓦溜、集石、建物に関連するとみられる柱穴や根石など各種の遺構が、黒褐色土や黒色粘質土中で多数確認された。このうち、土器溜や瓦溜、集石などは、整地により集中部が形成されたものも多いとみられる。以下、まとまった遺物の出土しているものを中心として、おおむね上記の種類順に報告する。

SE5 調査区西部の近世溝SD1底面で検出された方形の井戸(図版10・図14)。上部は近世溝でかなり削平されているが、検出面で掘方は一辺1.6m前後、そこから底部まで深さ1.5m程度が残存する。掘方の北西角部分が大きく円形に膨らんでおり、先行する円形掘方の遺構が存在した可能性もあるが、埋土での切り合いは認識できなかった。掘方の南寄りに、幅10cm前後の縦板を並べて内側を横棧で押さえた「縦板組横棧どめ」〔宇野1982〕と呼ばれる、一辺92cm程度の方井筒が設けられる。西辺～北辺の縦板は土圧で上部が大きく東へとせり出してひしゃげた平面形となっており、これにともなって、下から二段が残る横棧のうち上段の横棧も、北辺の棧木が折れて外れている。なお横棧どうしは、端部を相欠きにより方形に組んでいることが確認される(図版10-4)。縦板の井筒下には、中央に径・高さ30cmあまりの曲物(I987)が水溜として据えられていた。底面の標高は43.08m。井筒や曲物の材はすべて針葉樹であり、横棧の一部がヒノキ、ほかはすべてスギであった(第5節参照)。

遺物は、掘方と井筒の埋土双方から合わせて整理箱6箱分の土器や瓦類が出土しているほか、木製遺物も多数遺存していた。なかでも特筆されるのは、破損した横棧に密着する状態で検出された編みかごである(I1050・図版10-3・図63)。この製品については第7節で素材の分析を報告している。また、水溜の底部からは、卒堵婆状の木製品(I995)が出土し、井戸の祭祀にかかわる可能性が示唆され注目される。ただし、水溜部も含めて井筒内は、完存する平瓦も含む多数の遺物を交えた土砂で埋積しており(図版10-

古代末～中世の遺跡

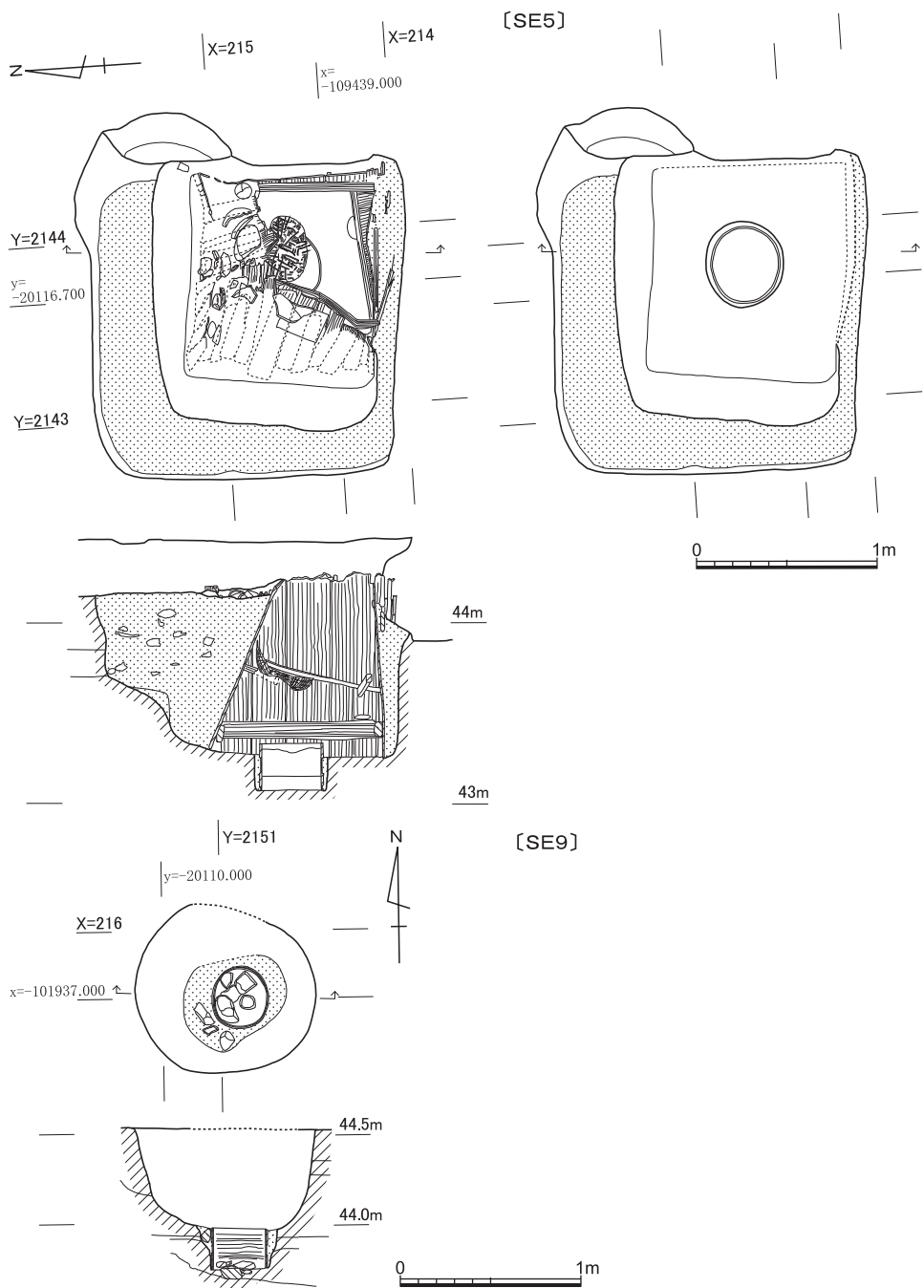


図14 SE5・SE9 縮尺1/40

6)、周辺の土器溜と接合関係にあるものも含まれていることから、一帯の整地にとまないうちに遺物とともに埋められ廃絶した状況がうかがえる。

SE 9 調査区中央付近で検出された、径1 m程度の円形の土坑。50cmほどが漏斗状に掘り下げられ、最下部に径30cmの曲物（I 988・材はツガ）を据えている（図版11、図14）。形状や規模からは、井戸と言うより小規模な水溜施設とする方がふさわしい。底面の標高は47.75m。曲物内部の底には10cm大前後の礫が複数検出され、うちひとつは、下部の黄灰色シルト層にめり込むような状態であったが、これらが意図的なものか、単に転落したものであるかは判別しがたい。埋土中からの遺物出土はごく少量の土師器と瓦片のみであった。なお、曲物には墨書「田マ□□」があり、別稿で報告した〔伊藤2019〕。

SE 6・SE 7 ともに井筒や水溜が明確には確認されなかったが、筒状に深く掘り込まれており、特徴から井戸であった可能性があると判断した。SE 6はSE 5の南に接する位置にあり、平面隅丸方形を呈する。埋土中には礫や瓦が多数遺棄されていたほか、穀類とみられる植物遺体も多量に認められた。底面の標高は43.36mで、湧水が著しい。そこから10mほど東方に位置するSE 7は、平面円形で、埋土中からの遺物出土は少ない。底面の標高は43.34mで、やはり湧水が著しい。

SX 8 調査区西壁際で検出された径1.2m前後の不整円形の土坑。上部には土師器皿類が大量に遺棄されて土器溜となっており（図版11-3）、整理箱4箱分が出土している。そのまま筒状にまっすぐに1 mあまり掘り込まれ、底面近くからは端部などをほぞ状に加工した木材など3点（いずれもスギ）が出土した（同4）。底面標高は43.26m。形状の特徴から井戸であった可能性が考えられる。

SK 2 一辺70cm程度の隅丸方形の土坑で、近世溝SD 1に上半を削平されているが、深さ50cm程度が残存している。完存するものを含む土師器皿類が、総量で整理箱1箱分までとまって出土した（図版11-5）。皿類は水平に近い状態で検出されることから、雑然と遺棄されたものではなく、土坑中に埋置されていた可能性がある。

SK 6 調査区西辺で検出された、黒色粘質土を埋土とする東西に長い長方形の土坑で、南北1.5m東西3 m以上をはかるが、深さは10cm程度と浅く、遺物はごく少量しか出土していない（図版11-6）。性格不明だが、後述する東西溝SD 32・33と同じやや西に振れる方位であり、関連が示唆される。

SK 5・SK 7 ともに径2 m以上深さ50cm以上となる不整円形の土坑。SK 5は調査区中央付近で攪乱に中央を分断されており、SK 7は東壁際で検出されなかば以上が調

査区外となるため、いずれも全容は不明である。少量だが遺存の良い土師器皿類や瓦類が出土している。

S X 23・S X 25 調査区中央の南壁際付近で連続するように検出された、深さ30～50 cm程度をはかる不定形な土坑。一帯の基盤となっている灰色シルトを掘り込んでおり、形状から土取りの遺構であった可能性も考えられる。S X 23底面からは軒平瓦（I 929）が貼りつくように出土し、S X 25からは木製品（I 1028・I 1030）が出土している。

S D 32・33・34 いずれも幅20cm深さ10～20cm程度の、断面U字形を呈する溝。東西方向のS D 33は、やや西へ振れる方位で、黒色粘質土を埋土として調査区全体を横断するように長く確認される。基盤が砂層となり段丘状に高まる東壁際でも築かれて東へと続いていくが（図版12-1）、西へは西壁際を南北にはしるS D 34に接続して終わっている。S D 32は、この5 m南方を並行してはしるが、調査区中央付近のみに確認できる。一方、南北方向のS D 34は、調査区西側をはしる道路（古川町通り）や近世溝S D 1と同じやや東に振れる方位で、黒色粘土中で砂が埋積する状態で検出される（図版12-3・図5上段参照）。これら3条の溝からは、微量の二段撫で手法の土師皿片が出土するのみであったが、他のほとんどの遺構に切られるか下面になっており、調査区の古代遺構としては最初期段階に築かれた遺構と評価できる。東西と南北で方位が異なり直交していないものの、一帯の延勝寺以前における街区の設定や土地区画を反映している溝であった可能性が考えられ、重要といえよう。

S X 6・7・10・20・22 それぞれ1 m以上のひろい範囲に土師器皿類を中心に遺物が集中する大規模な土器溜である（図版12-4～6、同13-1・2）。いずれも黒褐色土中で確認され、下部には掘り込みは確認されない。最も大規模なS X 10で整理箱6箱、S X 22で5箱分の土師器皿類や瓦類が出土している。

S X 15 浅い落ち込み内部に、配石を伴いながら完形の土師器皿類が分散して出土する（図版13-4）。東側のS X 42と類似の出土状況であり、一連の遺構となる可能性がある。埋土中にも多量の遺物が包含され、整理箱4箱分の土師器皿類と瓦が出土しているほか、下部には木製品（図58-I 992）も遺存していた

S X 4・5・11・24 数点程度の土師器皿類や瓦などが集中している小規模な土器溜（図版13-3・5・6、14-1）。これらも、下部には掘り込みは確認されない。

S X 14・S X 27～29 調査区東北辺のS K 1北側一帯に、東西10m南北5 m前後の範囲の黒褐色土中にひろく瓦類が集中しており、S X 14として取り上げた（図版14-3）。

1 回目に取り上げた後も、下部に集中範囲が残る部分があり、それらは S X 27～29 とした。総量で整理箱 38 箱分におよぶ瓦類が出土している。出土する瓦の密集度は高いが、並びに明確な規則性は観察されないので、整地にともないまとめて遺棄されたものが集中部を形成したものとみられる。

S X 35～38 調査区東辺南半の黒褐色土中に見出される瓦溜（図版 14－4）。

柱 穴 群 調査区西半に偏って、柱穴の可能性のあるピットが多数見つかっている。そのいくつかには、根石となるような偏平な石や瓦片を据えたものがみられる（図版 14－5）。並びは復元できないが、小規模な建物があったと見て良いだろう。

（2）遺 物（図版 17～37，図 15～63，表 2～4）

今回出土の古代末～中世の遺物について、A：土器陶磁器・土製品・石製品類，B：瓦磚類，C：木器木製品類，の種類別に大別して報告する。

A：土器陶磁器・土製品・石製品類（図版 17～20，図 15～40）

出土遺物の大半を占めるのは土師器皿類である。大量に出土している遺構においては、完形やそれに近い残存率の個体を中心に抽出しながら、出土点数の少ない型式については残存率の低い個体も抽出して、型式別の組成比を反映するように意識して報告している。以下、遺構・層位別に呈示する。

S K 1 出土遺物（I 1～I 70） 上層の埋土からを中心に整理箱 3 箱分程度が出土しているが、土器類で遺存の良いものは少ない。土師器皿類のうち I 1～I 42 は S K 1－1 とした東半部からの出土で、I 33 までは埋土上層からの出土である。I 34 は下部の砂層，I 35・I 36 は東側に接する石 11 下に埋置されていたもの，I 37～I 42 は底面の石敷き内の出土である。I 43 以下は西側の S K 1－2 からの出土で、I 52 までが上層，I 53～I 57 は下部の砂層からの出土である。上層下層とも、口径 15cm・10cm 前後の 2 段撫で手法 C₃ 類の皿と、口径 10cm 前後の受皿に、「て」字状口縁手法の退化した B₄ 類がわずかにともなう組成である。

I 58 以下は土師器以外で、瓦器や陶磁器・砥石などの破片がある。I 67 は白磁の動物形製品だが、容器の把手や装飾ではないかと思われる。上部の黒褐色土から出土した。

S K 2 出土遺物（I 71～I 112） 2 段撫で手法を中心とする土師器皿類がまとまって出土しており、法量は 14－15cm（I 71～I 86）と 9－10cm（I 92～I 107）の大小の 2 群を中心に、11cm 前後（I 87～I 91）が少量含まれる。受皿（I 108）は口径 9cm。近年更新された平安京・中世京都の土師器編年では〔平尾 2019〕（以下「京都市編年」と呼称），

古代末～中世の遺跡

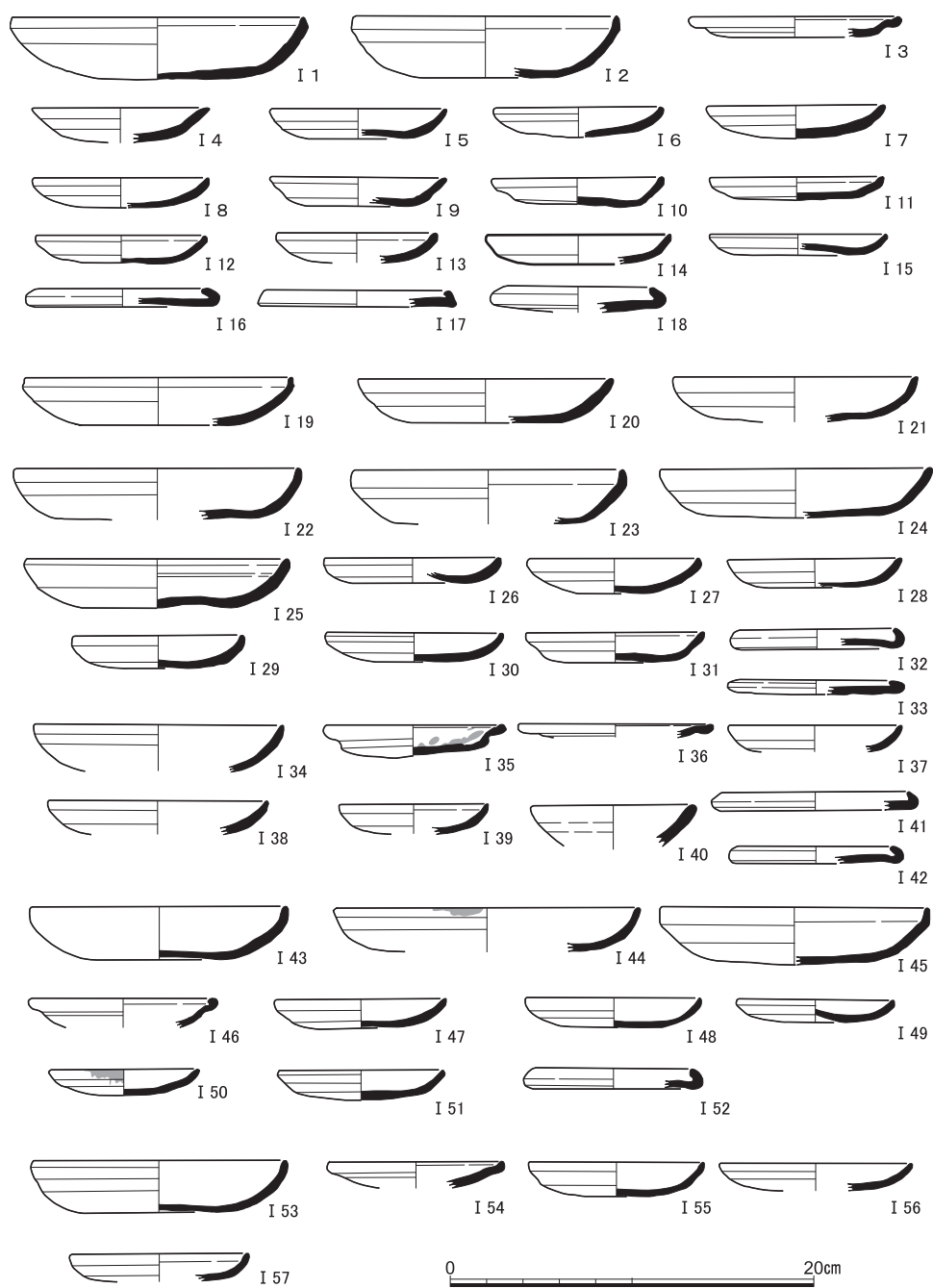


図15 SK 1出土遺物(1) (I 1～I 57土師器)

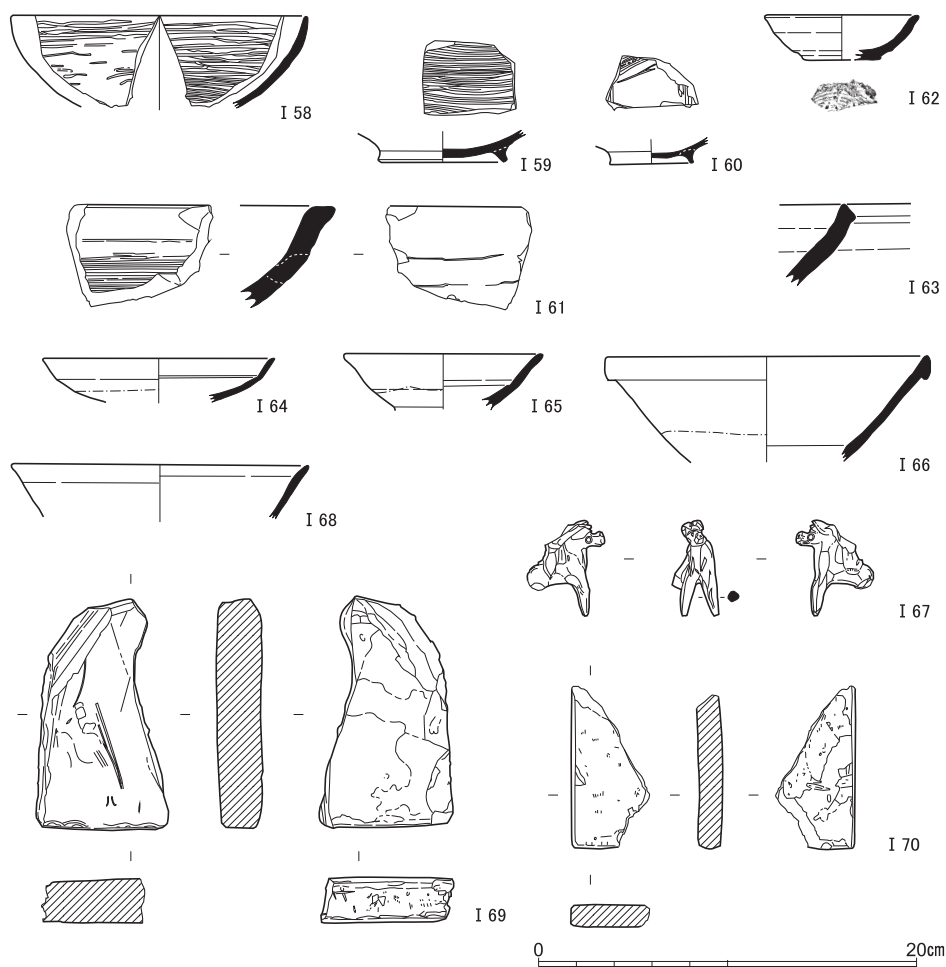


図16 SK 1出土遺物(2) (I 58～I 61瓦器, I 62・I 63須恵器, I 64～I 67白磁, I 68青磁, I 69・I 70砥石)

5 B段階の様相に比定できる。

SK 5・SK 7出土遺物 (I 113～I 120) 少量出土している土師器皿類には、I 114やI 117のように煤の付着しているものがある。須恵器すり鉢 (I 116) は、底部側から上へと撫で上げたような調整がのこる。

SE 5出土遺物 (I 121～I 150) 瓦磚類の出土は多かったが、遺存の良い土師器の出土は少ない。このうちI 122～I 125・I 138が井筒内埋土中からの出土、ほかは掘方や裏込めからの出土。皿類では2段撫で手法を中心としつつ、I 132のように1段撫で手法で9 cm未満のものも含まれる。京都市編年では5 B～6 Aの幅の土師器の様相といえよう。

古代末～中世の遺跡

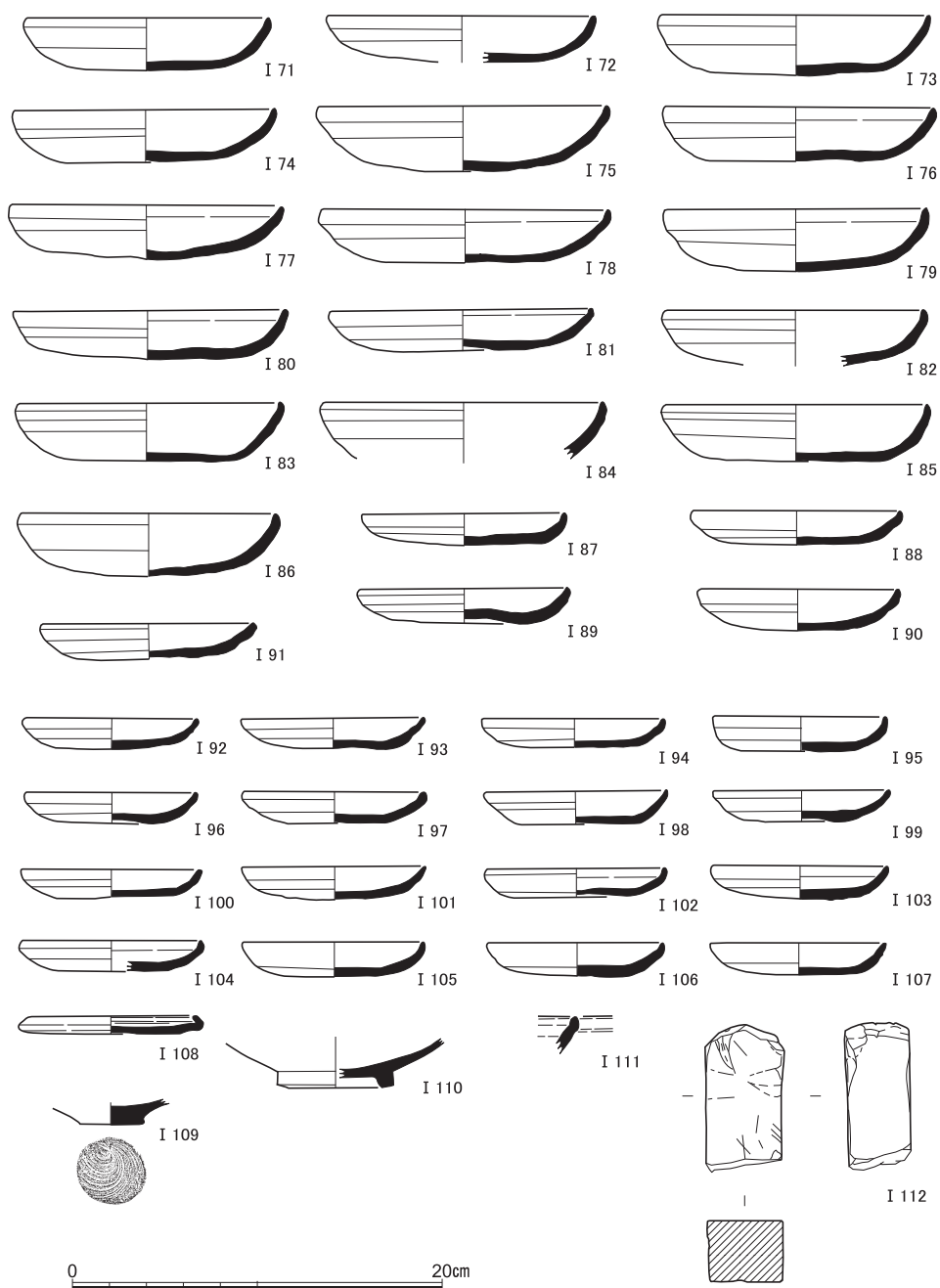


図17 SK 2出土遺物（I 71～I 109土師器，I 110・I 111陶器，I 112砥石）

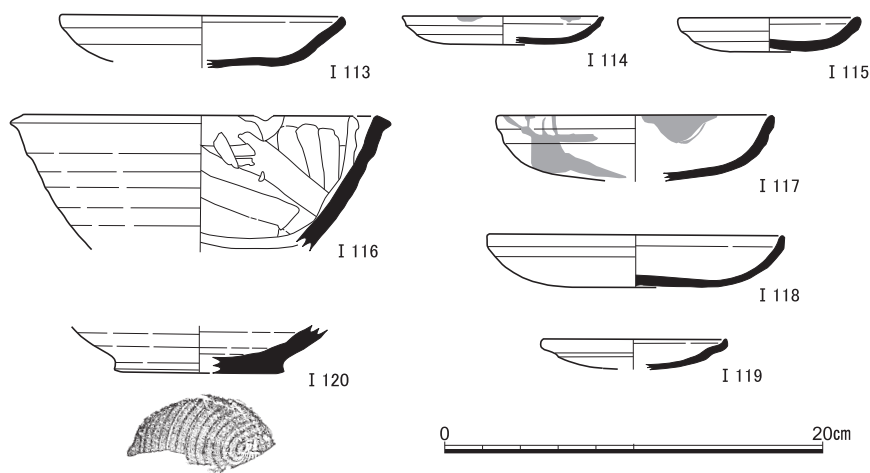


図18 S K 5 出土遺物（I 113～I 115土師器，I 116須恵器），S K 7 出土遺物（I 117～I 119土師器，I 120灰釉系陶器）

I 138は俗に「塩壺」などと呼ばれている，粘土紐痕を顕著にとどめる鉢形の土器。瓦器や灰釉系陶器では，I 141のみ井筒内の出土。I 147・I 148は掘方出土の東播系の須恵器すり鉢。口縁端部はほとんど肥厚しない。I 149・I 150は砥石で，井筒内出土のI 149の片面には擦過痕が顕著にみられる。

S E 6・7・9・13・15出土遺物（I 151～I 177） 土師器の皿類はおおむね2段撫で手法で，口径14～15cmと9～10cmにまとまる。S E 13上層出土のI 171は瓦器の受皿で，口径9.2cm，内外ともに暗文を施す。特異な資料として瓦質の硯とみられるI 176があり，S E 13掘方より出土した。8cm四方程度の「風」字状を呈する平面形で，器壁は8mm程度と厚みがある。外面は粗く篋削り調整が残されているが，内面は平滑で黒光りし，擦過痕や墨の付着が認められる。

S X 4～7出土遺物（I 178～I 218） 小規模な土器溜の出土遺物で，大半が2段撫で手法の土師器皿類。口径14～15cmと9～10cmの2群にまとまる。I 188・I 215・I 216はこれらと特徴の異なる回転台成形によるもので，いずれも白色を呈する。I 188は底部に糸切痕，内面にも同心円状の筋状の窪みがめぐる器高1.6cmの浅い皿。一方I 215も底部に糸切り痕があるが，口径9cm器高2.8cmの小椀状の器形。I 216は底部のみだが，外面には回転篋起し痕が残る。I 217は東播系の須恵器すり鉢。I 218は須恵質の焼成で，器壁は厚く外面全面を叩き成形する胴部から底部にかけての破片。壺の下半部であろうか。底面を外側から強く押さえて瘤状の突起を形成し，ごく低平な脚台を造出しているかのよう

古代末～中世の遺跡

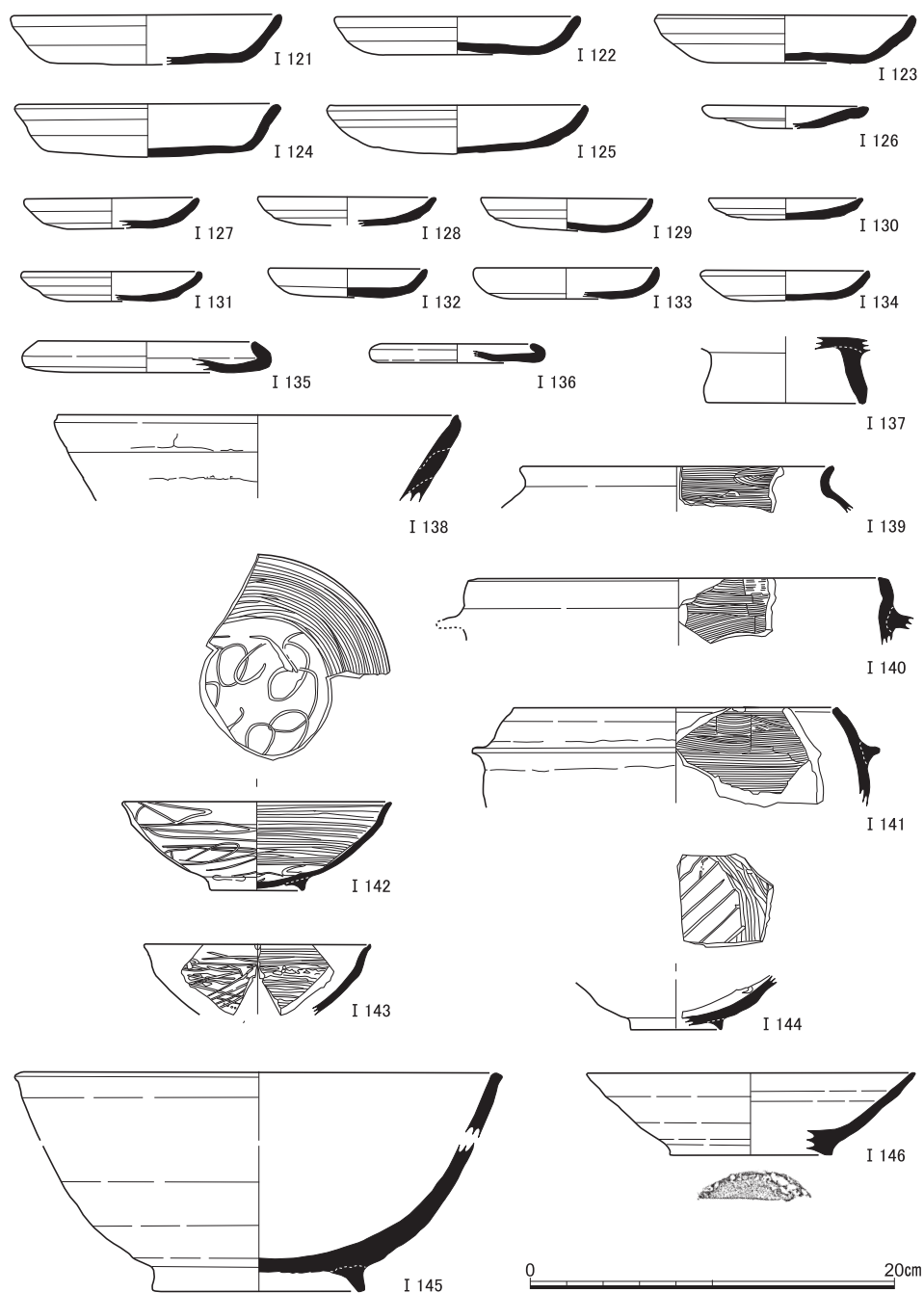


図19 SE 5 出土遺物(1) (I 121～ I 138土師器, I 139黒色土器, I 140～ I 144瓦器, I 145・ I 146 灰釉系陶器)

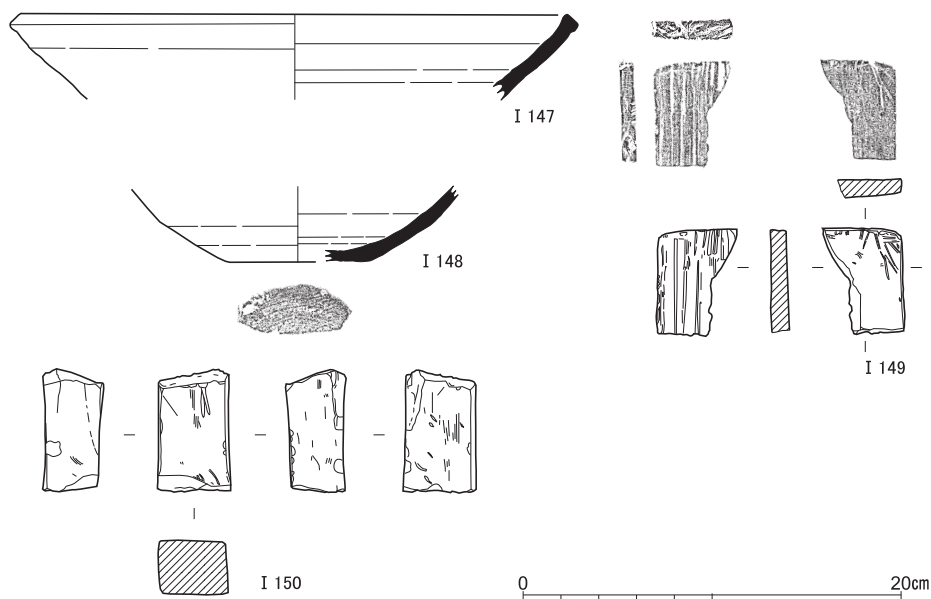


図20 SE 5 出土遺物(2) (I 147・I 148須恵器, 149・I 150砥石)

である。

S X 8 出土遺物 (I 219～I 305) 井戸状に深く掘り込まれた土坑の、上部土器溜出土が I 219～I 264・I 302・I 303, 下部の出土が I 265～I 301・I 305。2 段撫で手法の土師器皿類が大半を占め, 14～15cm と 9～10cm の 2 群にまとまり, 上下で差は見られない。I 302 の瓦器皿は, 黒色の焼成であるが器壁が厚く胎土が緻密であり, 全面を磨いていることから, 黒色土器に近い質感を呈している。I 303 は, 器壁の厚い瓦質焼成の盤の口縁部とみられる。灰色を呈して, 外面や内面の一部に篋磨きが確認できる。I 304 は東播系須恵器すり鉢, I 305 は灰釉系陶器の椀で, 高台には靱殻圧痕がつく。

S X 10 出土遺物 (I 306～I 390) 大規模な土器溜で, 大半が土師器皿類。他の遺構と同様に 2 段撫で手法の土師器皿類が大半を占め, 14～15cm と 9～10cm の 2 群にまとまる。I 376～I 383 の受皿は I 383 の 1 点のみ 6 cm と小型だが, ほかは 8～9 cm に収まる。I 378 は内面に墨痕が確認される。I 384 は白色を呈する蓋。I 385 は塩壺と呼ばれているものだろう。I 386 は頸部が「く」字状に強く外反する甕の口縁部。器壁は薄い。I 387 の瓦器碗は, 内面に漆状の付着物がみられる。I 388 は, 口縁端部が小さく玉縁状に肥厚する白磁碗。I 389 の滑石製硯は, 内面側の海の部分に墨の付着を認める。I 390 は黄白色を呈する軟質の石材で, 軽石状の凝灰岩とみられる。面を平らに整形しており, 磚のような製品であっ

古代末～中世の遺跡

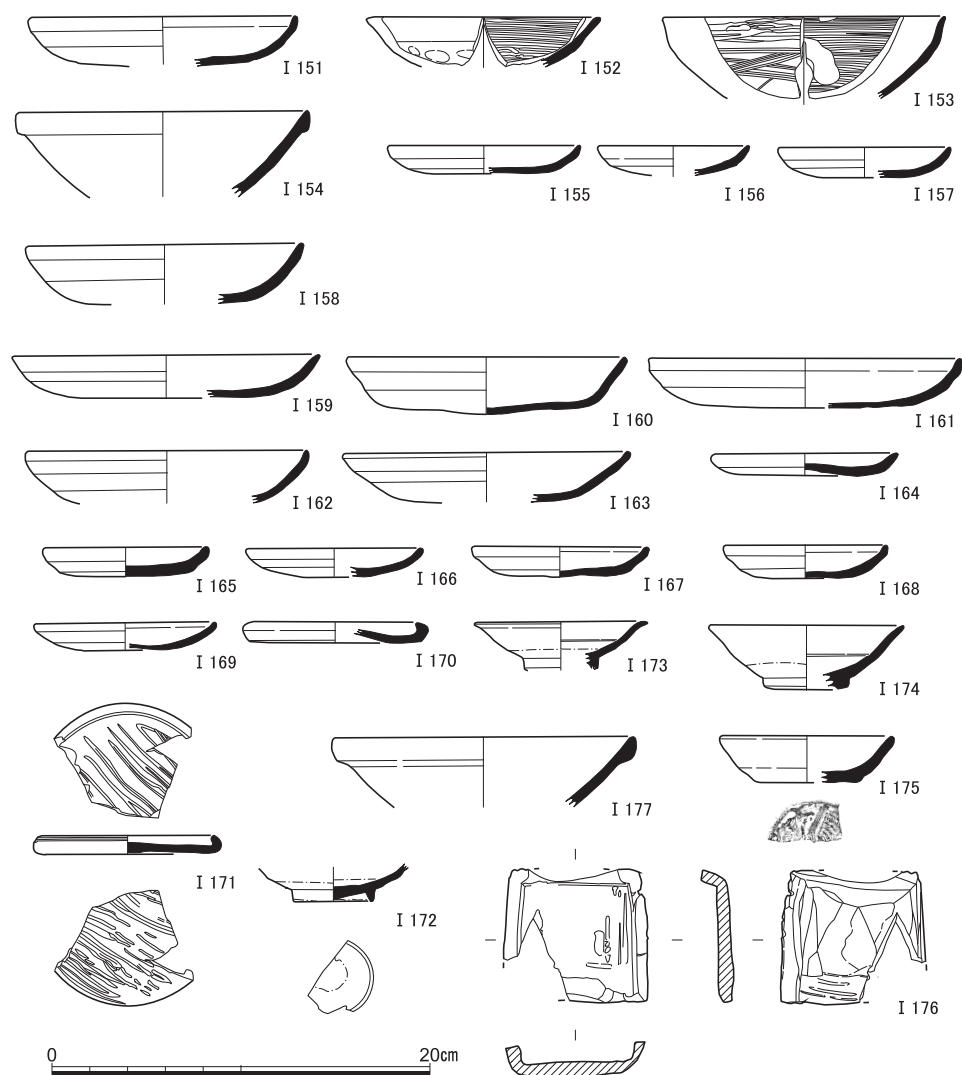


図21 S E 6 出土遺物 (I 151土師器, I 152・153瓦器, I 154白磁), S E 7 出土遺物 (I 155～I 157土師器), S E 9 出土遺物 (I 158土師器), S E 13出土遺物 (I 159～I 170土師器, I 171瓦器, I 172～I 174白磁, I 175須恵器, I 176瓦質製品), S E 15出土遺物 (I 177白磁)

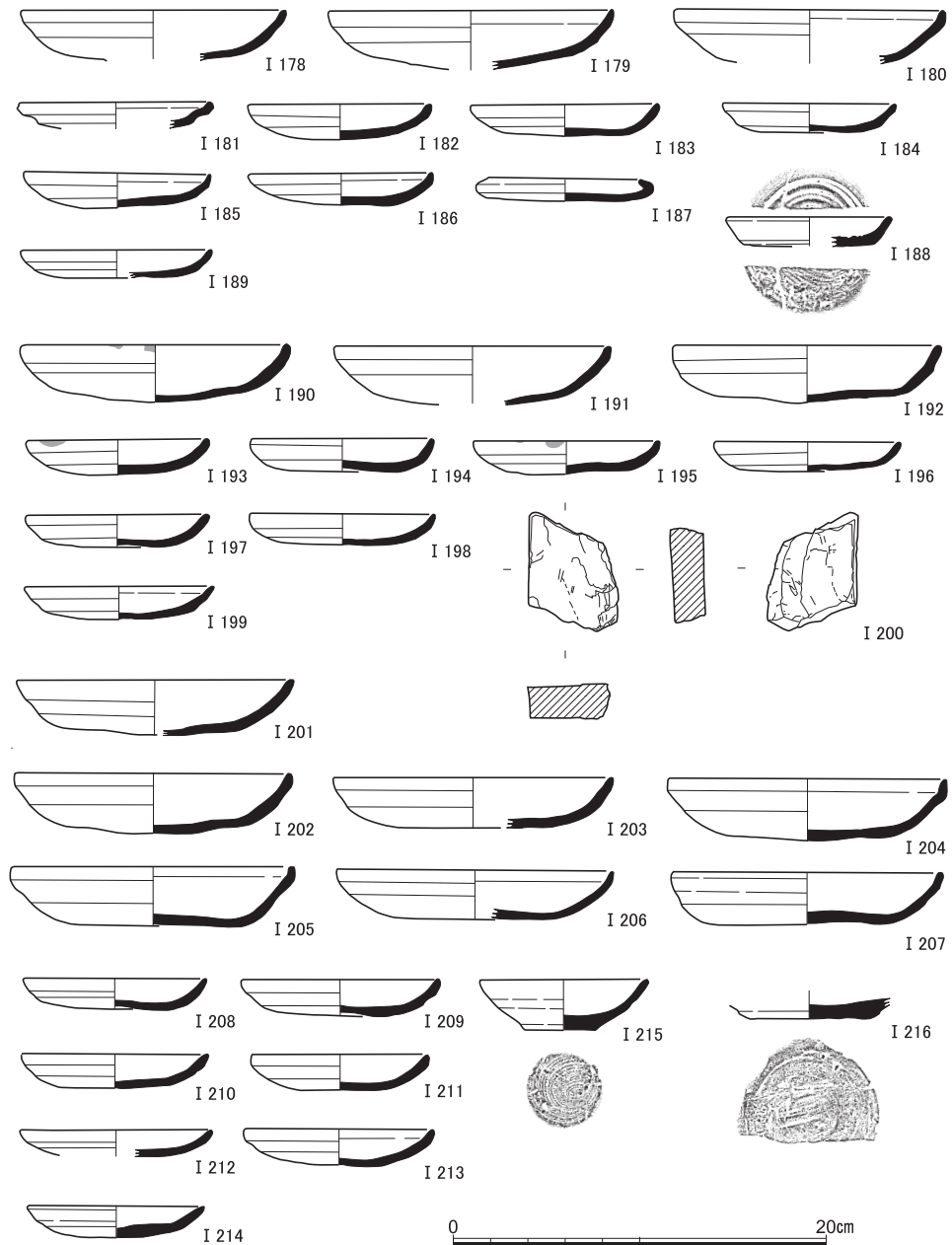


図22 S X 4 出土遺物 (I 178～I 188土師器), S X 5 出土遺物 (I 189土師器), S X 6 出土遺物 (I 190～I 199土師器, I 200砥石), S X 7 出土遺物(1) (I 201～I 216土師器)

古代末～中世の遺跡

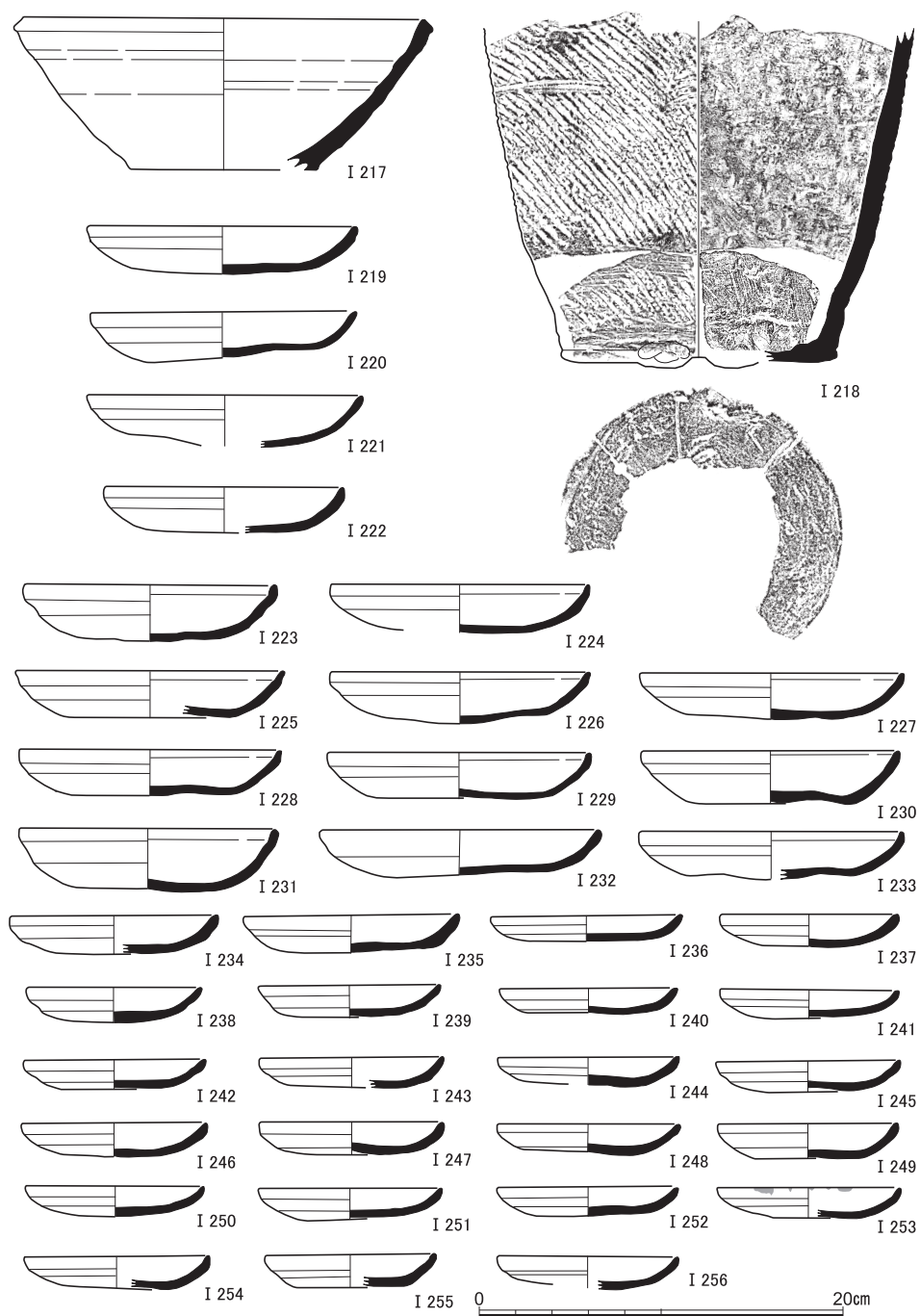


図23 S X 7 出土遺物(2) (I 217・218須恵器), S X 8 上部出土遺物(1) (I 219～I 256土師器)

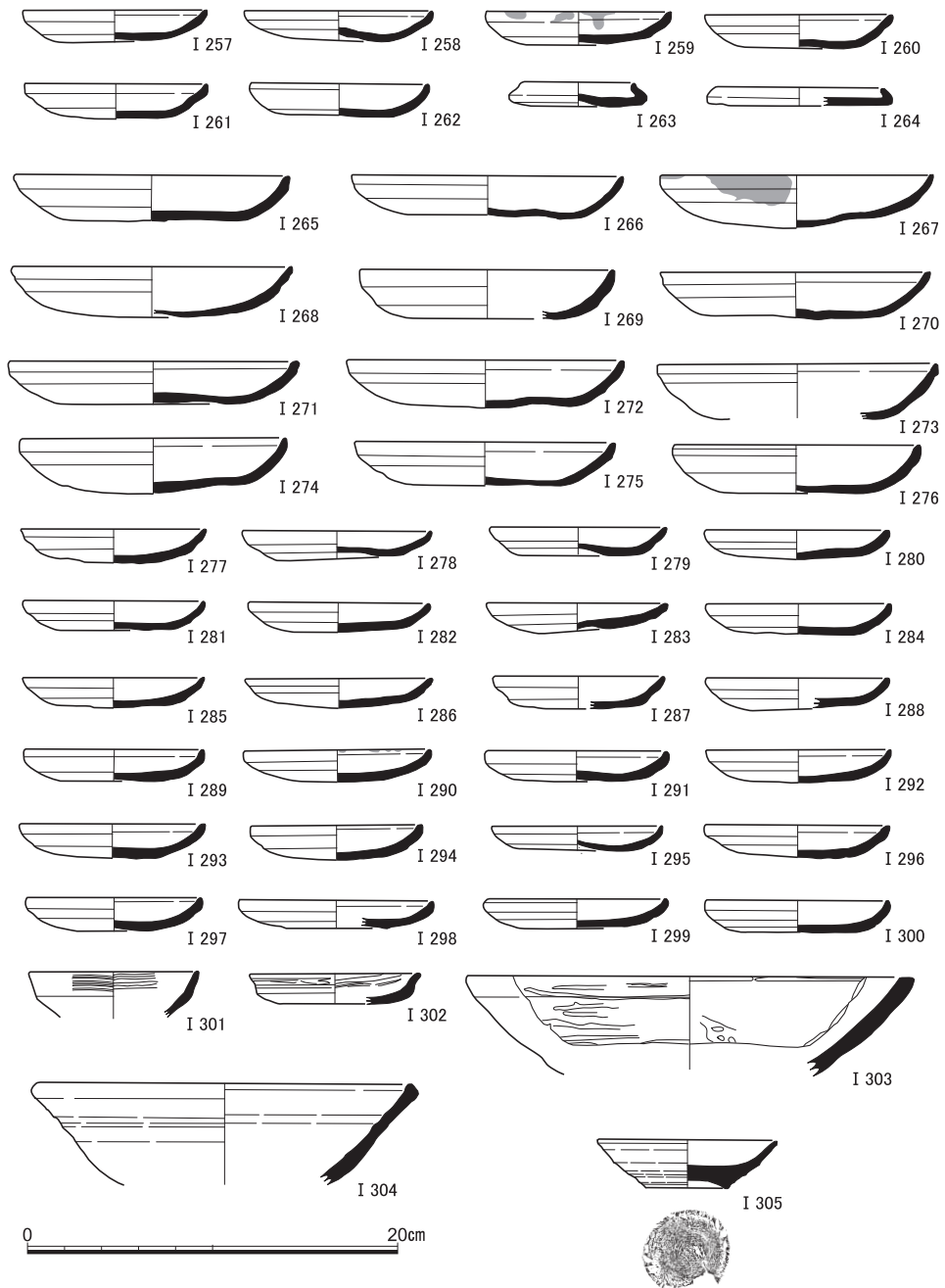


図24 S X 8 上部出土遺物(2) (I 257～I 263土師器, I 301～I 303瓦器, I 304須恵器), S X 8 下部出土遺物 (I 264～I 300土師器, I 305灰釉系陶器)

古代末～中世の遺跡

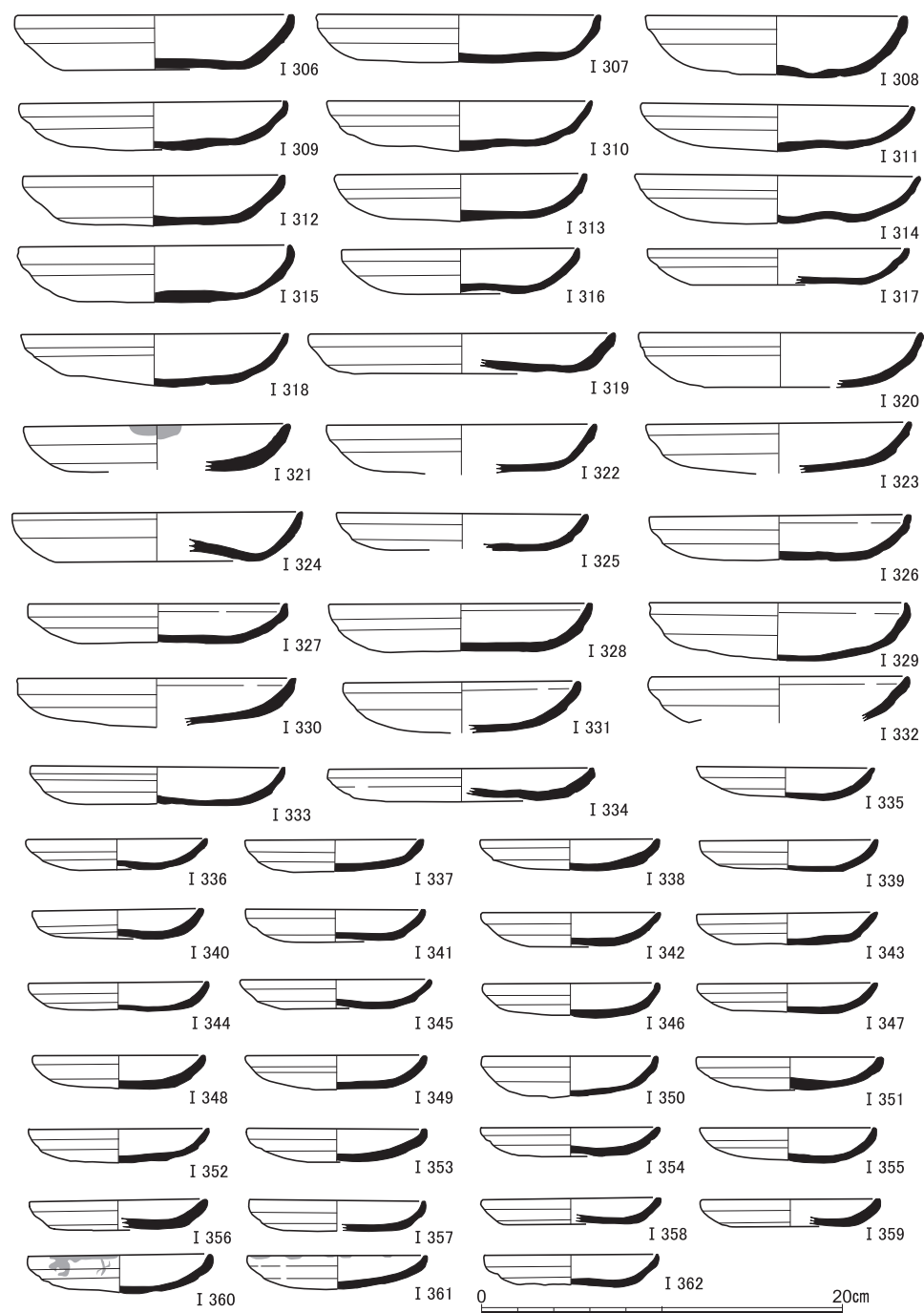


図25 SX10出土遺物(1) (I 306～I 362土師器)

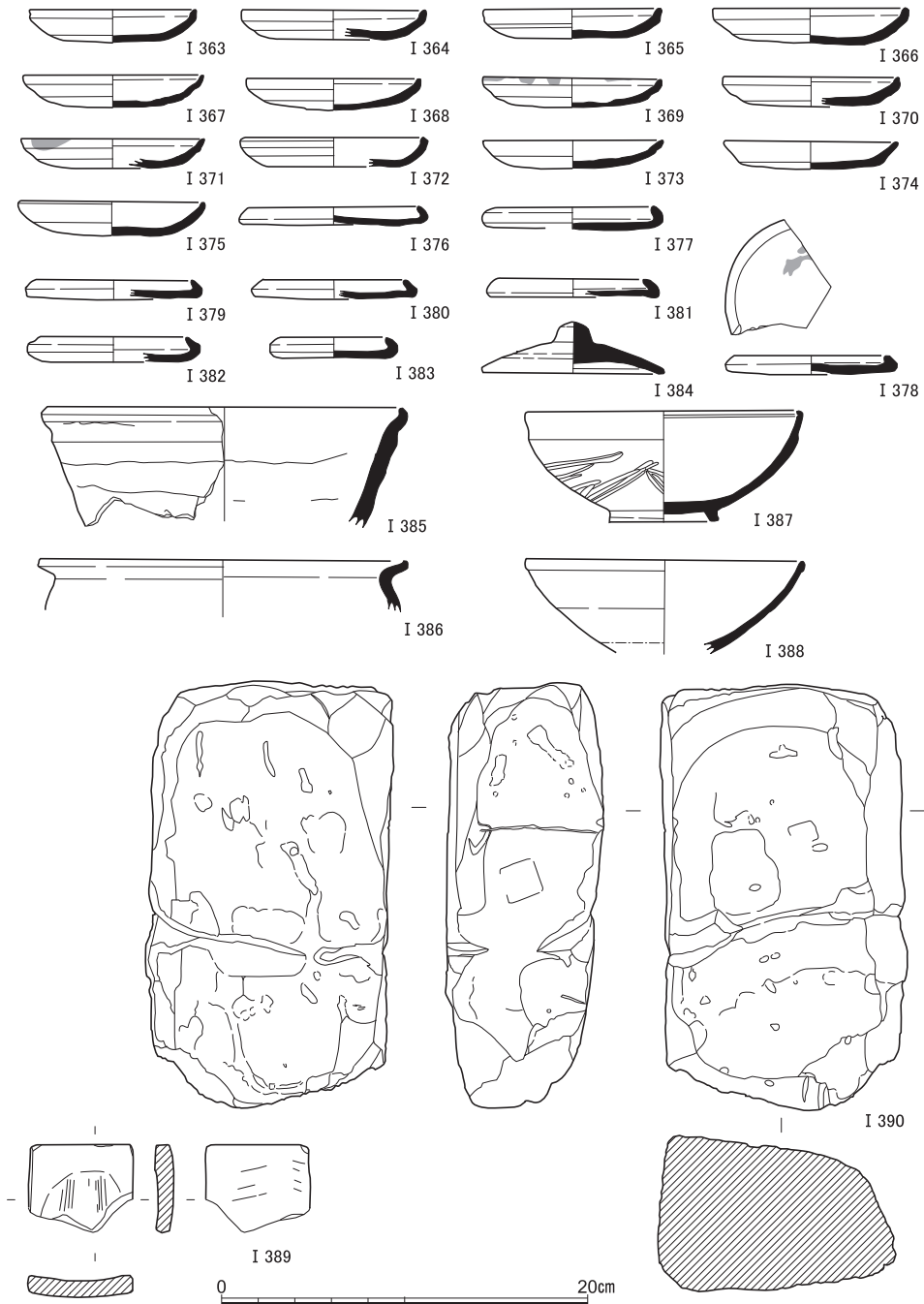


図26 S X10出土遺物(2) (I 363～I 386土師器, I 387瓦器, I 388白磁, I 389滑石製品, I 390石材
(凝灰岩))

古代末～中世の遺跡

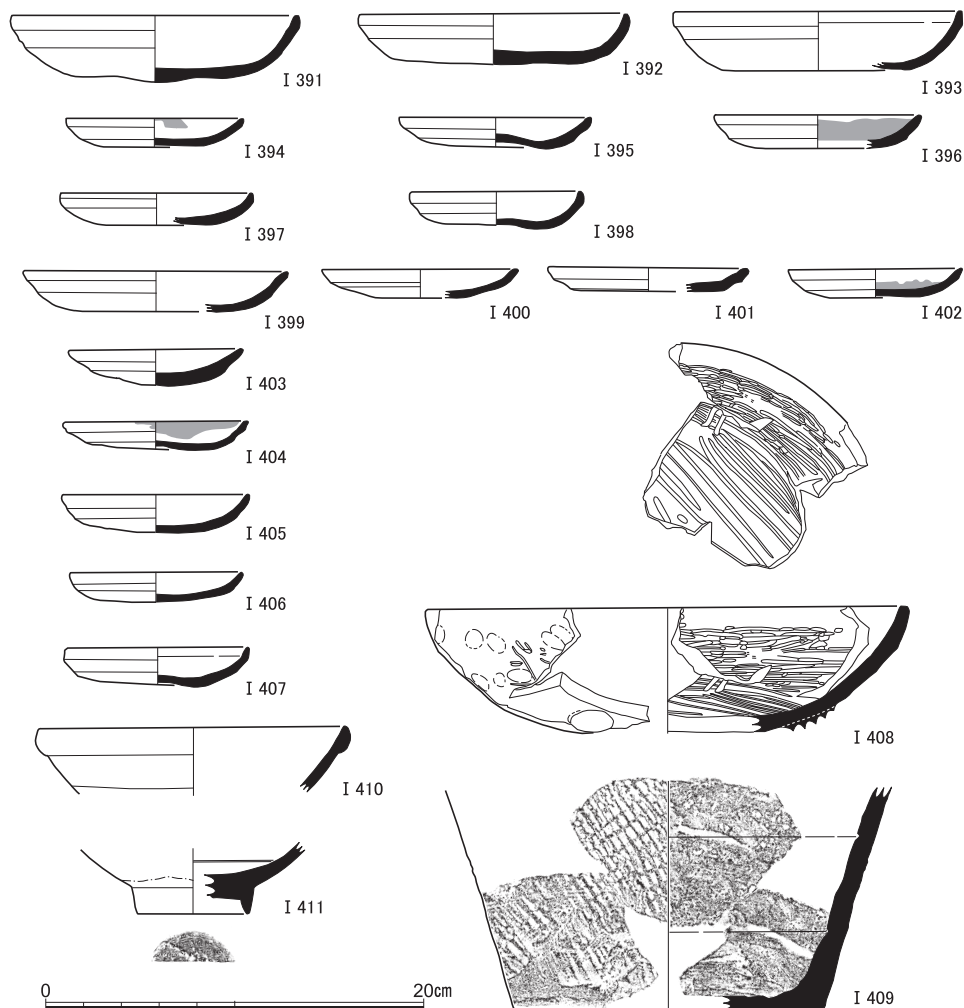


図27 S X11出土遺物（I 391～I 398土師器）、S X12出土遺物（I 399～I 402土師器）、S X14出土遺物（I 403～I 407土師器、I 408瓦器、I 409陶器、I 410・I 411白磁）

たかもしれない。今回の調査では、このように形の整っていないものも含めて同種の石材が多数出土している。

S X11・12・14出土遺物（I 391～I 411） S X11は小規模な土器溜で、2段撫で手法の土師器皿 I 391～I 398のみが出土している。S X12は、S K 1 の北側に接して検出された石敷き遺構で、礫に交じって2段撫で手法の土師器皿片が少量出土した（I 399～I 402）。S X14は大規模な瓦溜で、土器の出土は少ない。土師器皿類は口径9～10cm代の2段撫で手法の小皿のみ（I 403～I 407）。I 408は三足付の瓦器盤であったとみられるが、

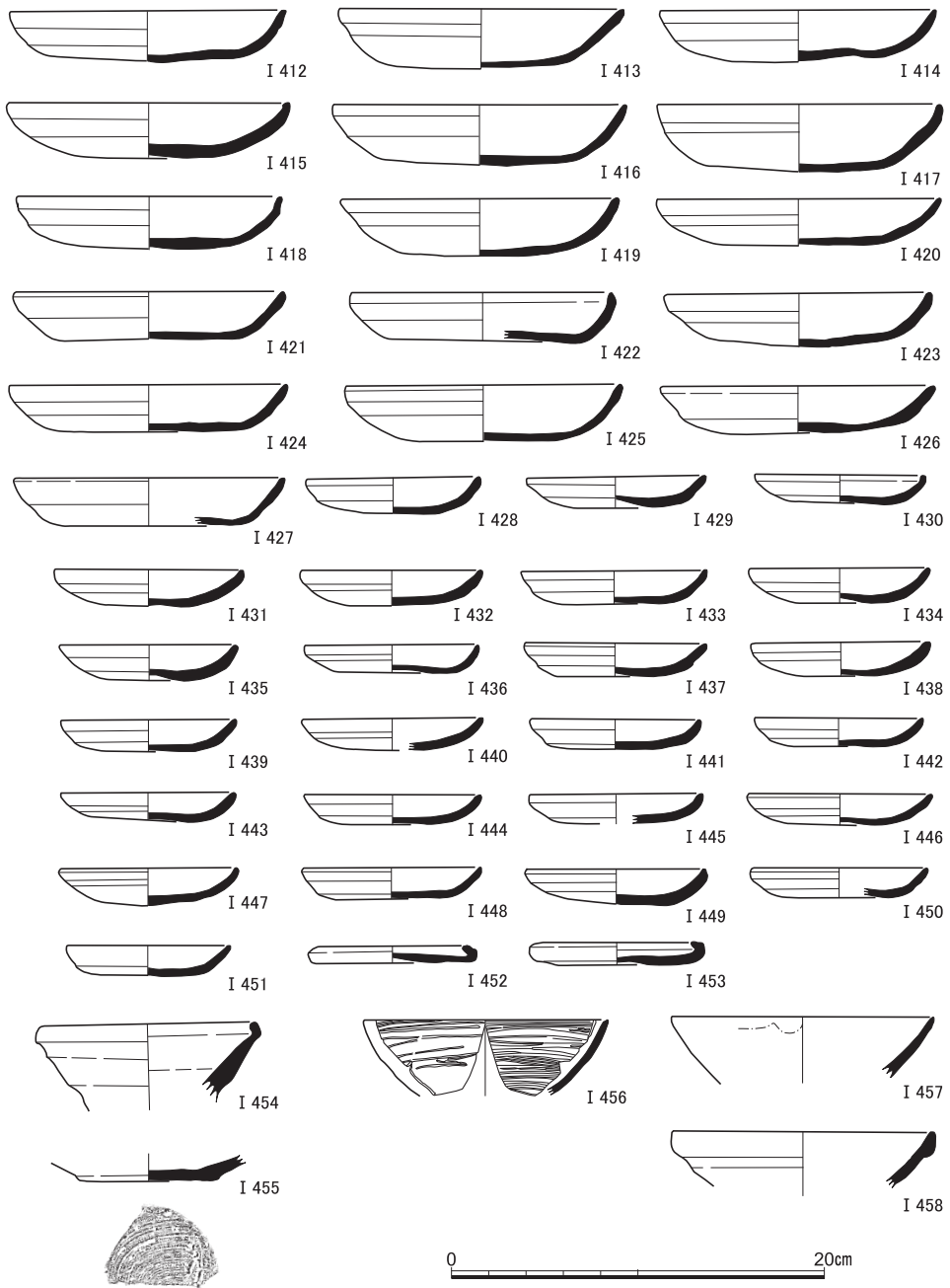


図28 S X15出土遺物（I 412～I 455土師器，I 456瓦器，I 457・I 458白磁）

古代末～中世の遺跡

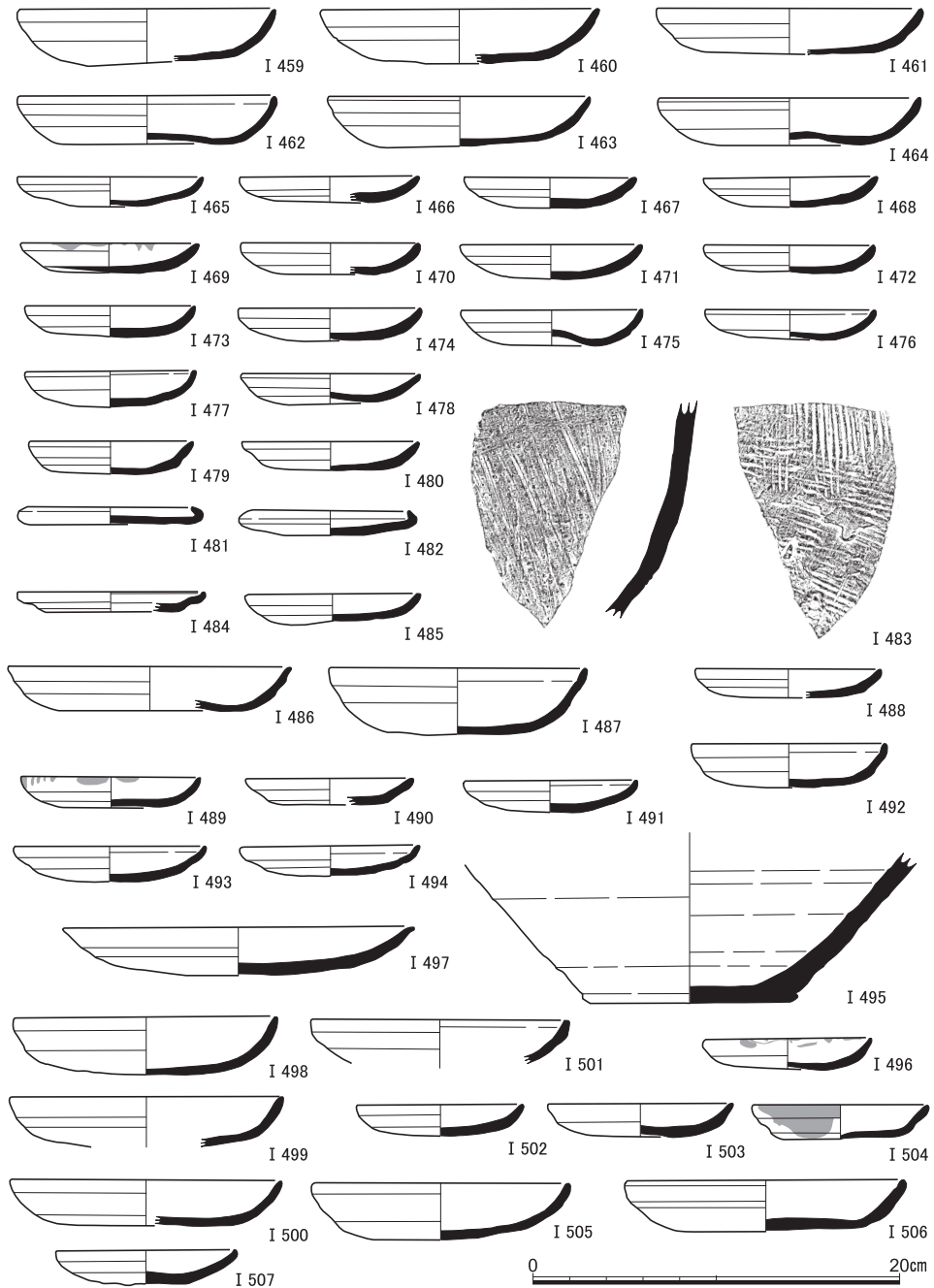


図29 S X15下層出土遺物 (I 459～I 482土師器, I 483須恵器), S X17出土遺物 (I 484・I 485土師器), S X18出土遺物 (I 486～I 494土師器), S X19出土遺物 (I 495須恵器, I 496土師器), S X20出土遺物 (I 497～I 504土師器), S X21出土遺物 (I 505～I 507土師器)

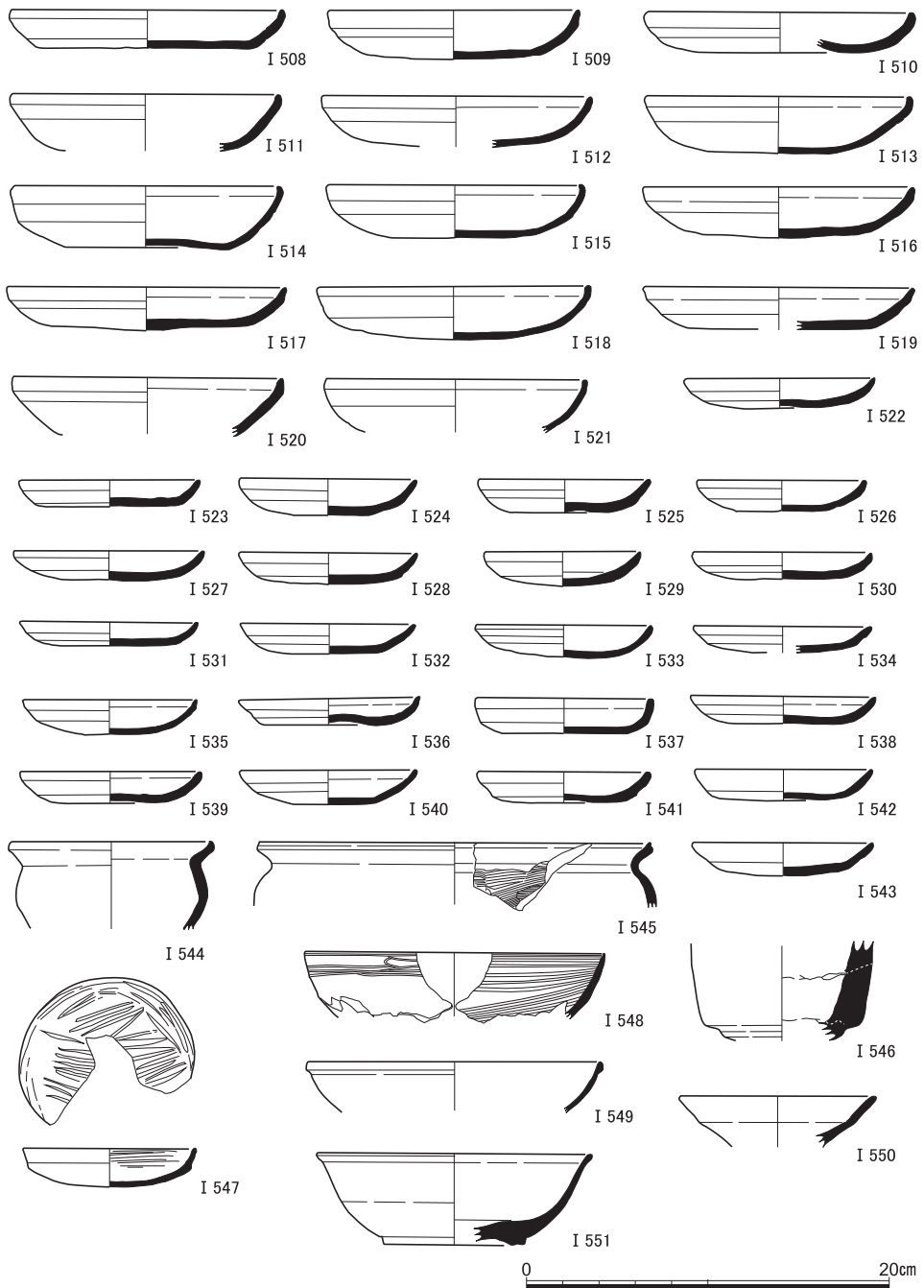


図30 S X22出土遺物（I 508～I 546土師器，I 547・I 548瓦器，I 549・I 550白磁，I 551灰釉系陶器）

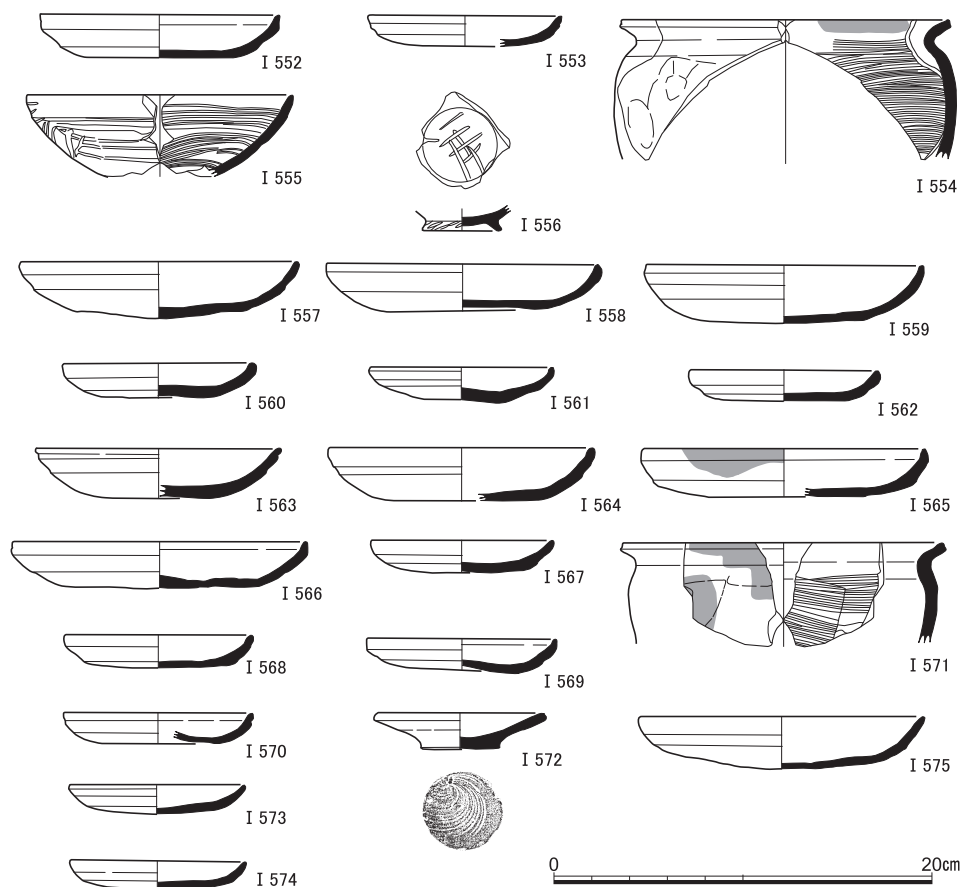


図31 S X 23出土遺物（I 552～I 554土師器，I 555・I 556瓦器），S X 24出土遺物（I 557～I 562土師器），S X 25出土遺物（I 563～I 571土師器），S X 35出土遺物（I 572土師器），S X 37出土遺物（I 573土師器），S X 38出土遺物（I 574土師器），S X 41出土遺物（I 575土師器）

脚部は剥離している。内面は丁寧な磨き調整が見られる。I 409は外面に格子目の叩きが見られる陶器の胴部～底部。I 410は口縁端部が大きな玉縁状を呈する白磁碗，I 411は白磁碗の底部で，断面三角形の丈高の高台をもつ。

S X 15出土遺物（I 412～I 483） 広く浅い落ち込みから土師器皿類を中心に多数の遺物が出土しており，I 412～I 458が埋土上層，I 459～I 483が下層の出土。どちらも他の土器溜遺構と同様に2段撫で手法の土師器皿類が大半を占め，14～15cmと9～10cmの2群にまとまり，上下で違いは見られない。I 454は塩壺と呼ばれるものの口縁部とみられるが，復元される口径は小さく，検討の余地がある。I 455は糸切痕が残る回転台土師器の底面。I 483は外面に叩き，内面に粗い刷毛調整痕が残る須恵器片で，大型の甕の胴部

とみられる。

S X17～21出土遺物 (I 484～I 507) S X17は瓦溜であり、土師器片はB₄類の皿 I 484とC₃類の皿 I 485の2点のみ出土している。S X18～21は、調査区西半でS X7とともに狭い範囲でまとまっていた小規模な土器溜で、大半を占める土師器皿類の口径が14～15cmと9～10cmの2群にまとまる点は他の遺構と同様である。S X19出土のI 495は東播系須恵器すり鉢。S X20出土のI 497は特異な口径19cmの大皿で、口縁部は2段に撫で端部が短く外反する。

S X22出土遺物 (I 508～I 551) 大規模な土器溜からの出土で、主体は他の遺構と法量規格を同じくする2段撫で手法の土師器皿類。これらのうち大皿には、I 508のように器高2cm弱の低平なものと、I 513・I 514のように3cmを越える深いものとが認められるが、全体が明瞭に高低2群に区別はできず、相違は漸移的と言える。土師器の皿類以外では、大小の甕I 544・I 545や、塩壺底部とみられるI 546がある。I 547は瓦器皿で、見込みには比較的密な暗文が施される。I 548の瓦器碗は口唇部内面にごく細い沈線がめぐる。I 549は口縁端部が小さな玉縁状となる白磁碗、I 550は白磁の皿。I 551は灰釉系陶器の碗で、低平な高台が付される。

S X23～25・35・37・38・41出土遺物 (I 552～I 575) S X23～25は調査区西辺南部にある小規模な土器溜や土坑で、2段撫で手法の土師器皿類に混じって、甕I 554・I 571や瓦器I 555・I 556がみられる。このうちI 556の底部は、内面に格子状の暗文をもつ碗と見られるが、高台側面にも刻み目を施している。S X35～41は調査区東辺南半の小規模な土器溜や瓦溜で、土師器皿類の出土は少ない。S X35出土のI 572は糸切底をもつ皿回転台土師器の皿で、灰白色を呈する。

S X42出土遺物 (I 576～I 646) S K1南側の配石をとまなう落ち込み内から遺存の良好な土師器皿類がまとまって出土している。このうちI 576～I 586は配石群検出までの上層出土、I 587以下が落ち込み埋土内からの出土である。組成は他の遺構と同じ2段撫で手法で14～15cmと9～10cmの2群にまとまるが、法量は同じで1段撫で手法D類も微量みられる(I 639～I 641)。I 644は糸切痕をもつ底部。壺形の器形となるものであろうか。

S X44出土遺物 (I 647～I 652) S K1の北東側で検出された落ち込みからの出土遺物であるが、多くが下層の弥生～古墳時代の遺物であり、本来はその時期に帰属する遺構があった場所が古代以降に攪拌された可能性が高い。古代末ころの土師器のほか、内容

古代末～中世の遺跡

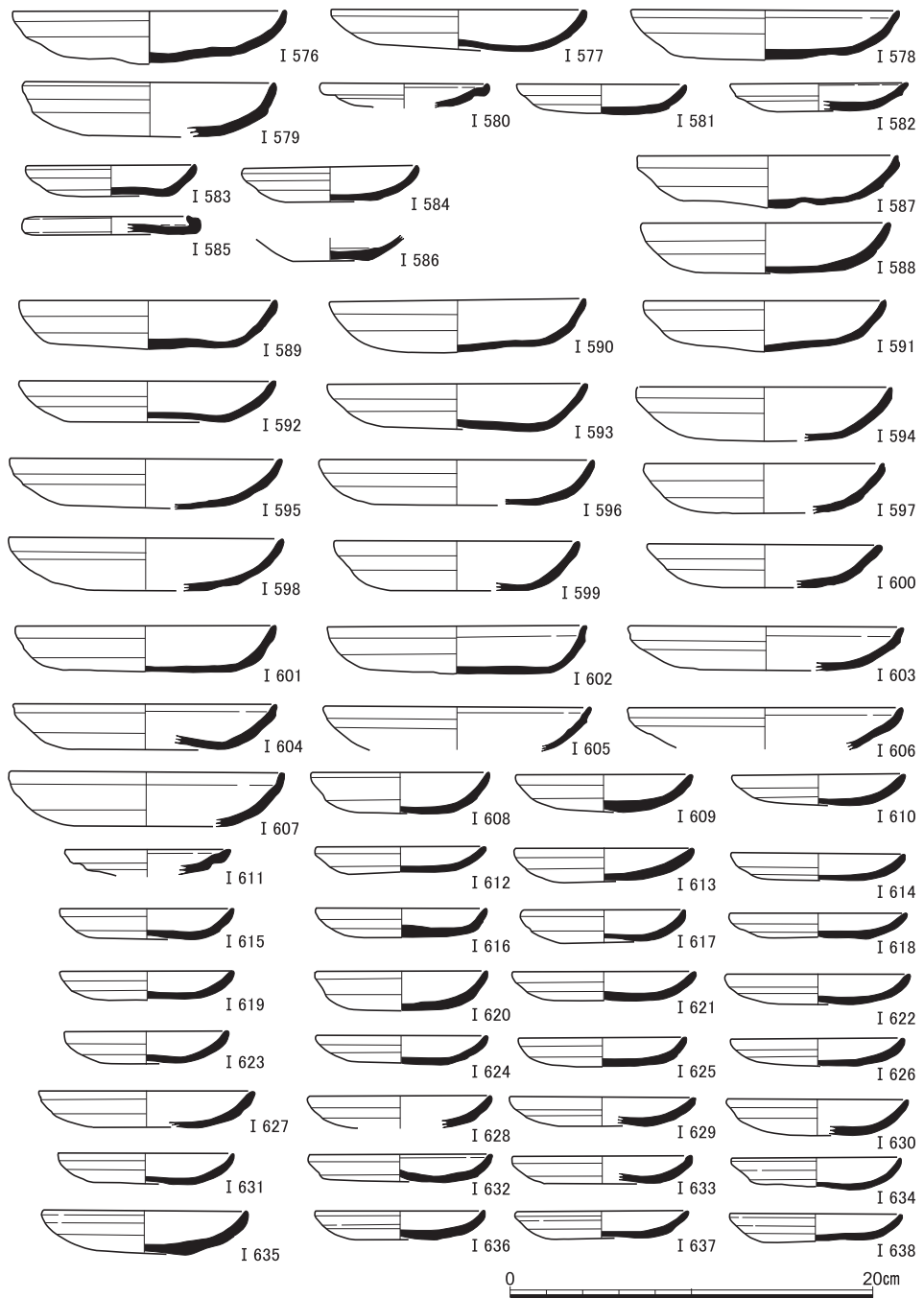


図32 S X42出土遺物(1) (I 577～I 585・I 587～I 638土師器, I 586白磁)

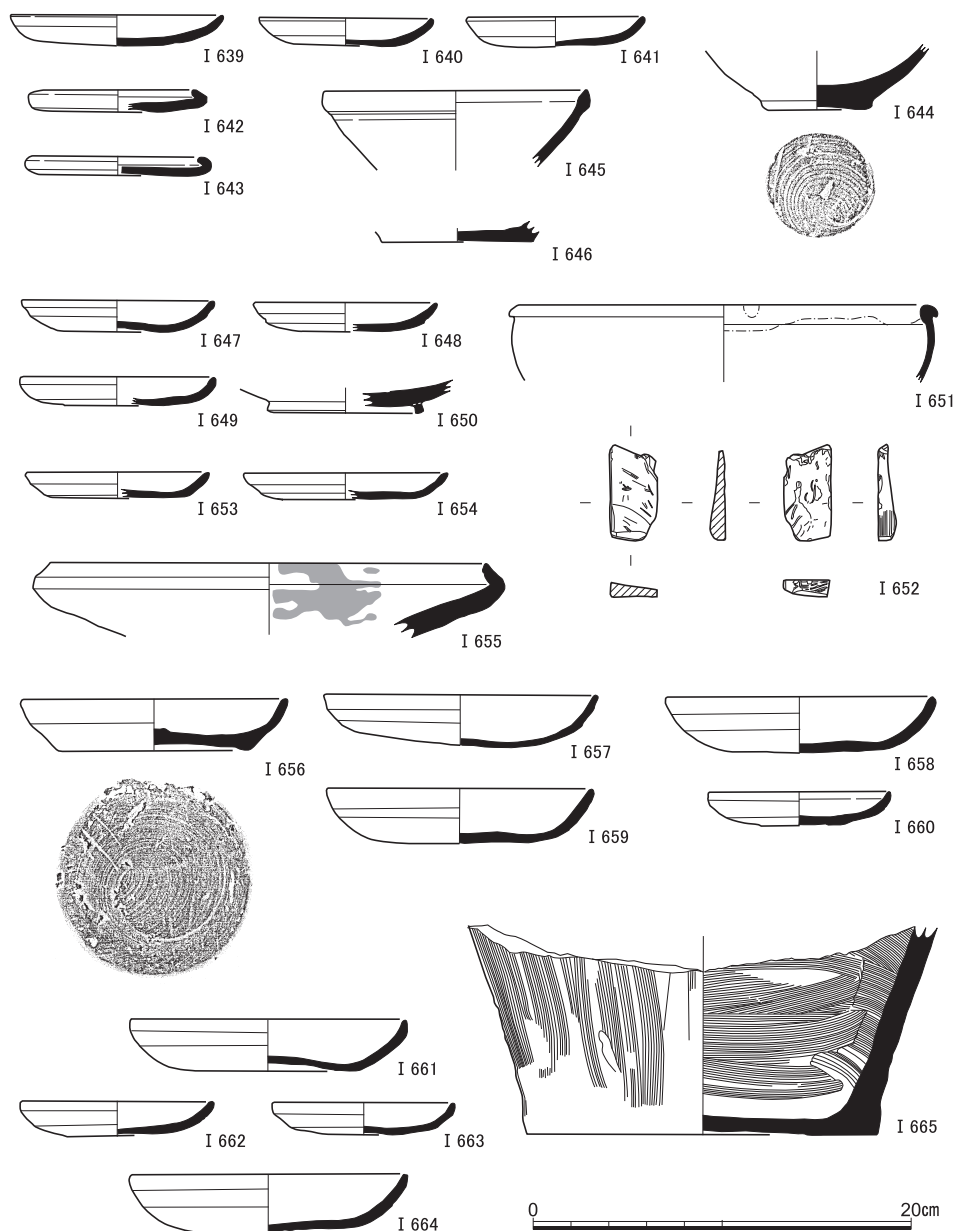


図33 S X42出土遺物(2) (I 639～I 644土師器, I 645・I 646白磁), S X44出土遺物 (I 647～I 649土師器, I 650白磁, I 651黄釉陶器, I 652砥石), S D33出土遺物 (I 653・I 654土師器), S P 2出土遺物 (I 655土師器), S P 13出土遺物 (I 656土師器), S P 26出土遺物 (I 657～I 659土師器), S P 57出土遺物 (I 660土師器), S P 61出土遺物 (I 661土師器), S P 114出土遺物 (I 662土師器), S P 122出土遺物 (I 663土師器), S P 172出土遺物 (I 664土師器), S P 29出土遺物 (I 665陶器)

古代末～中世の遺跡

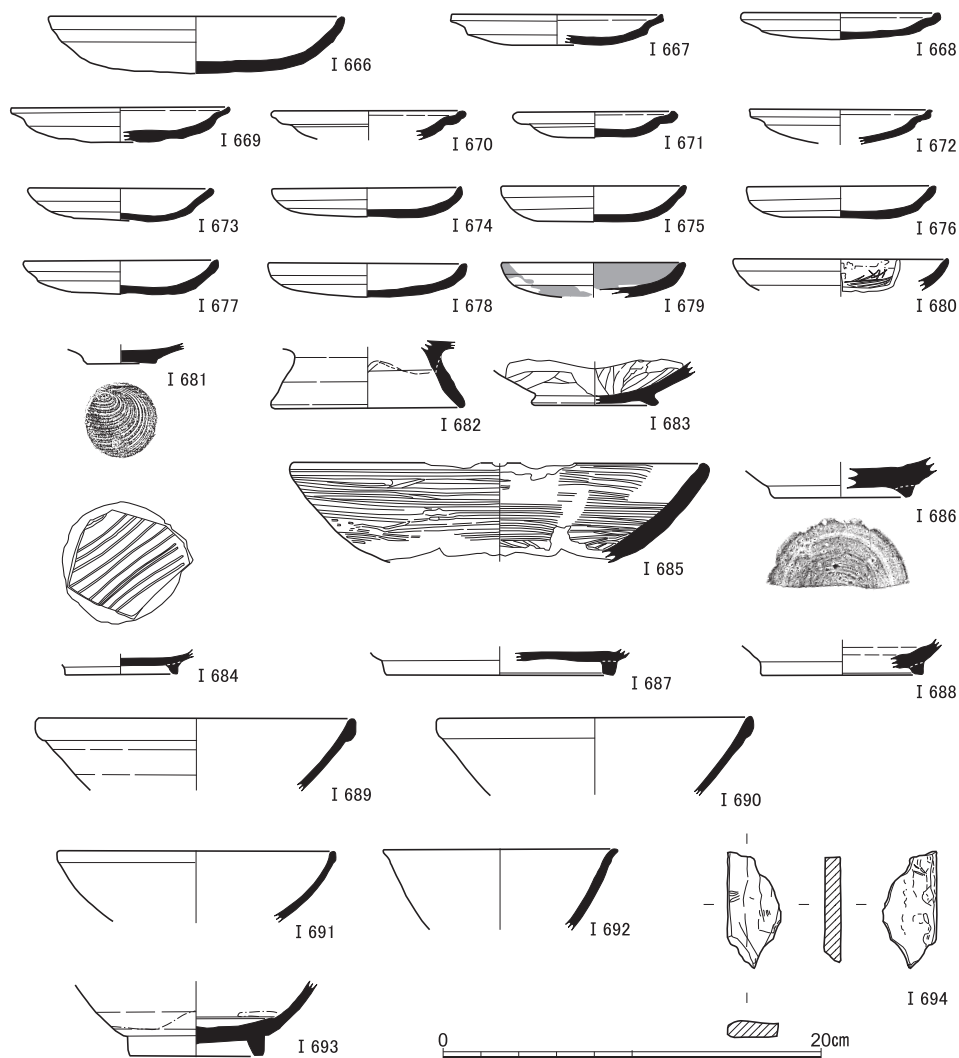


図34 黒色粘質土出土遺物（I 666～I 683土師器，I 684・I 685瓦器，I 686灰釉系陶器，I 687・I 688須恵器，I 689～I 693白磁，I 694砥石）

にはまとまりがない。I 650は貼り付け高台をもつ緑釉陶器底部で、平安中期に遡る製品だろう。I 651は黄釉陶器の盤。口唇は外側に短く折り曲げる形状である。

S D33出土遺物（I 653・I 654） 調査区の古代遺構としては最初期段階に築かれた可能性がある東西溝から出土しているわずかな遺物で、図示可能なものである。ともに2段撫で手法の小型の土師皿で、口径はそれぞれ9.6cmと10.6cmをはかる。

ピット群出土遺物（I 655～I 665） 調査区西半と東南域付近でまとまって検出され

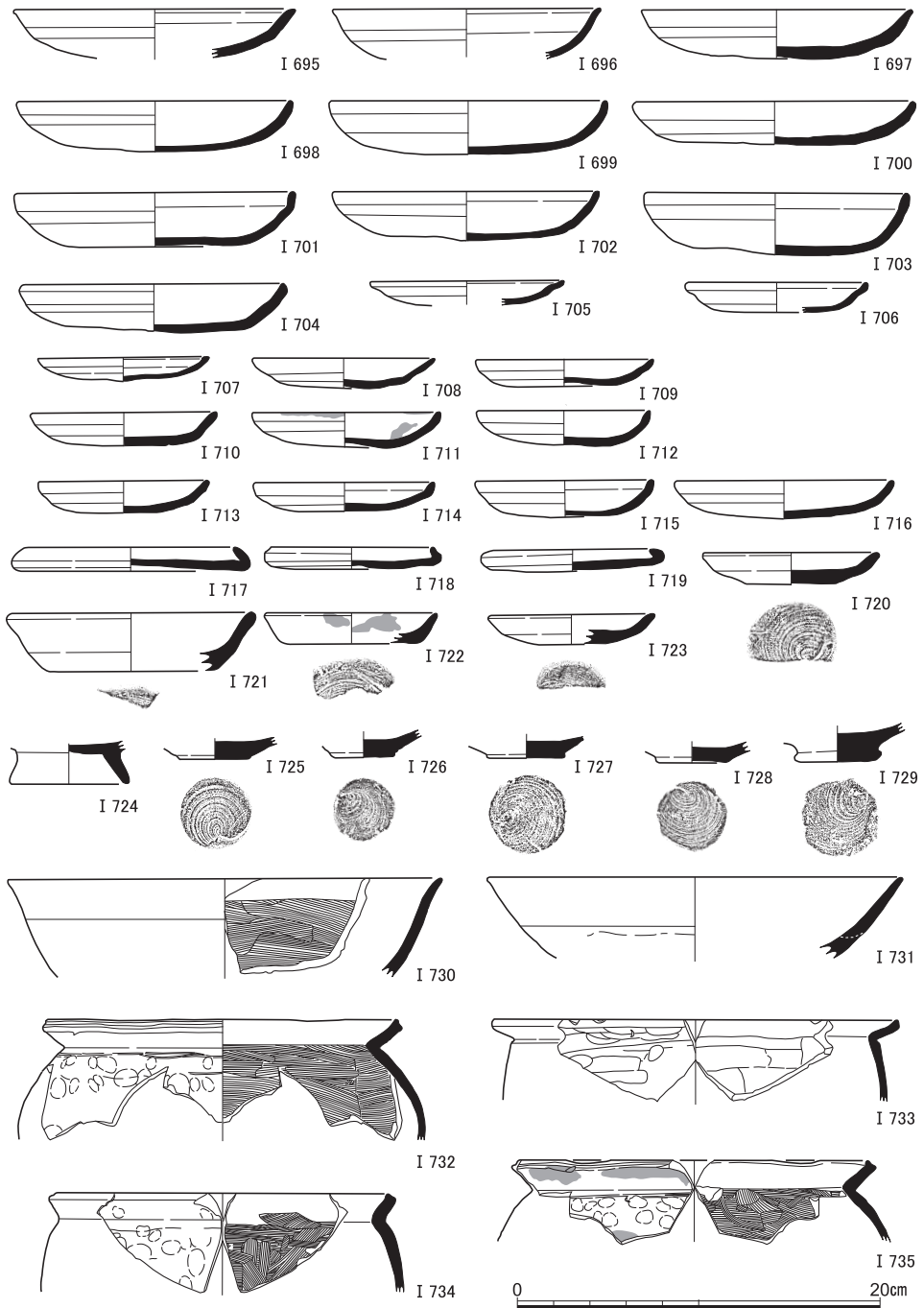


図35 黒褐色土出土遺物(1) (I 695～I 735土師器)

古代末～中世の遺跡

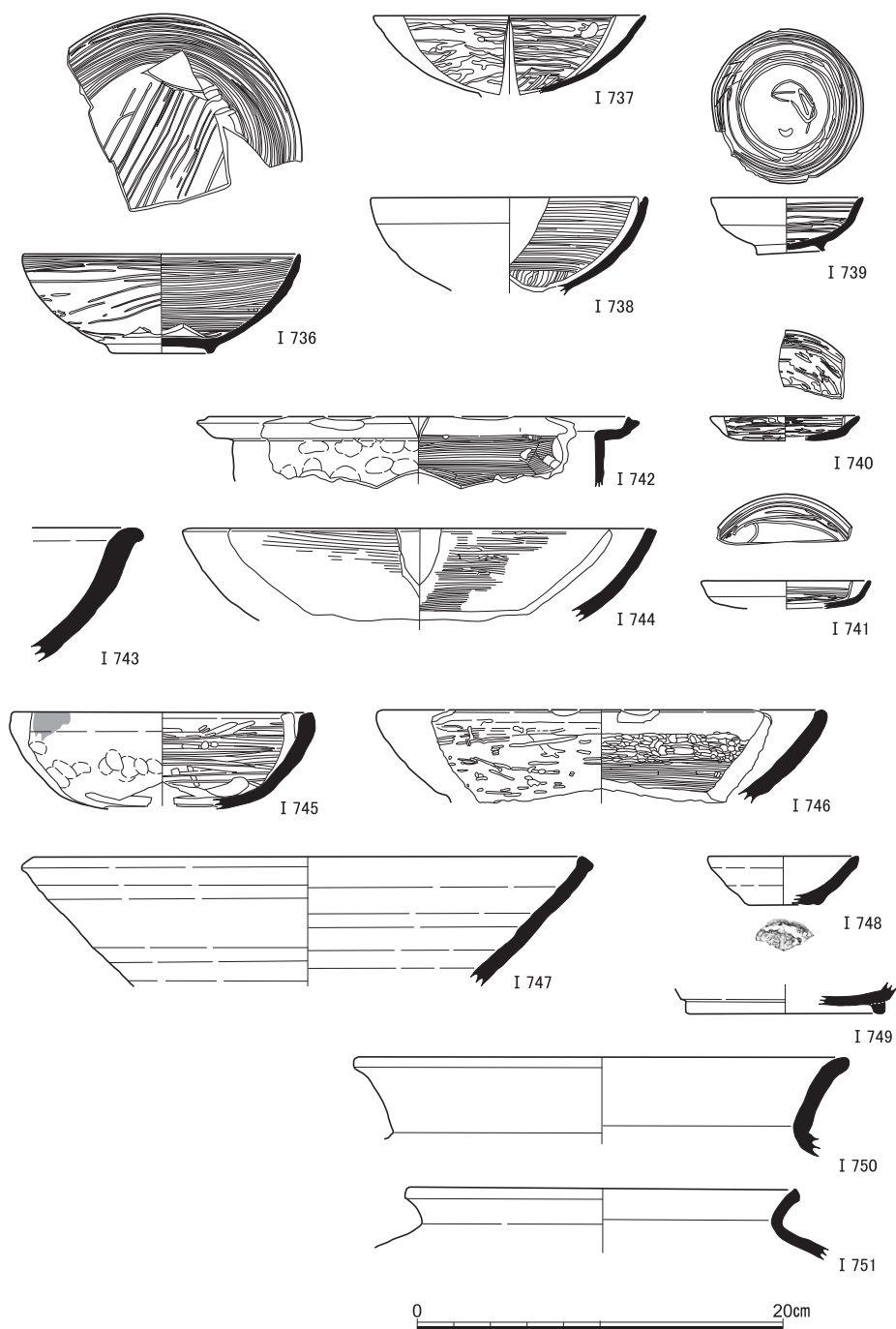


図36 黒褐色土出土遺物(2) (I 736～I 746瓦器, I 747～I 749須恵器, I 750・I 751陶器)

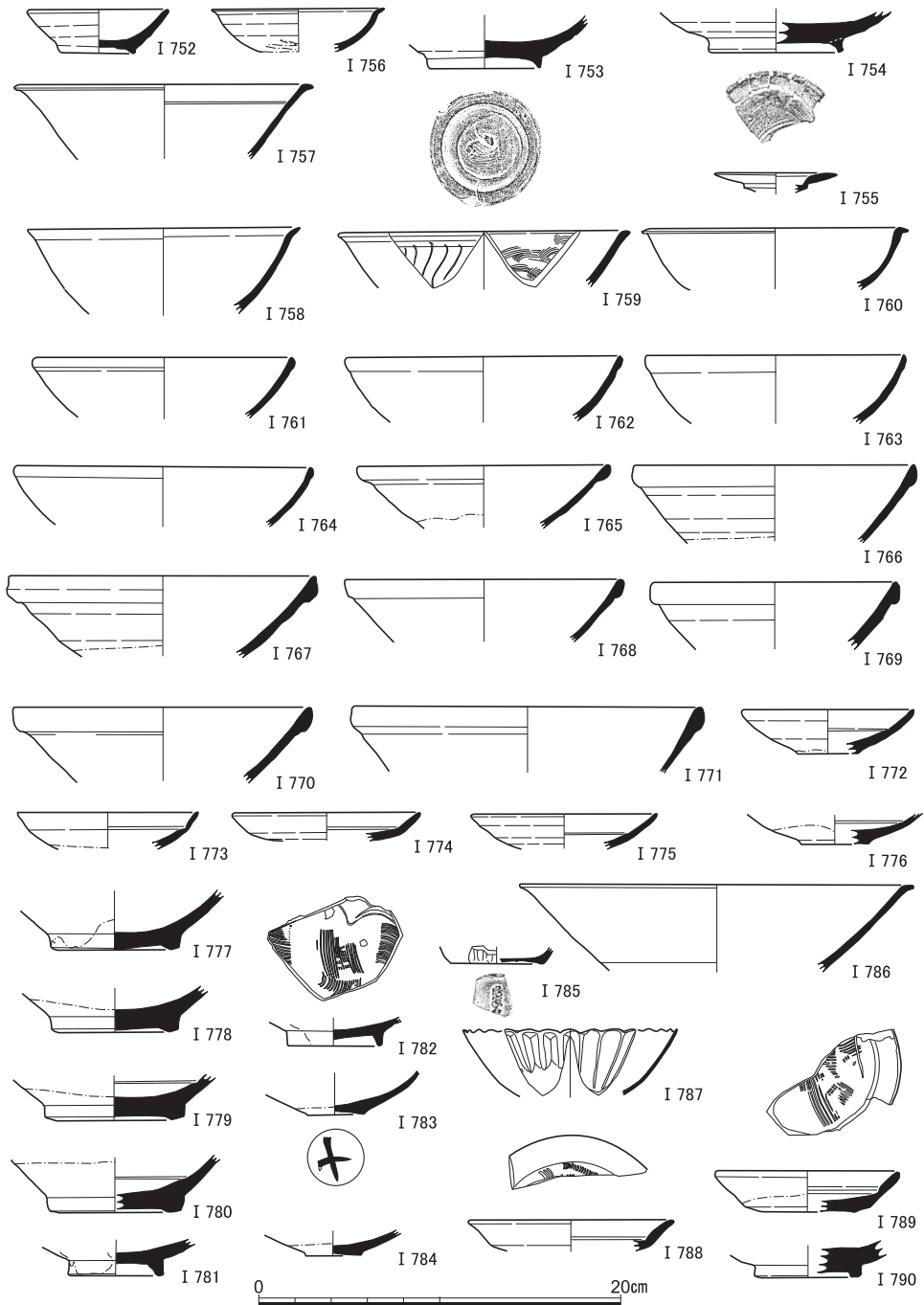


図37 黒褐色土出土遺物(3) (I 752～I 754灰釉陶器, I 755～I 785白磁, I 786～I 790青磁)

古代末～中世の遺跡

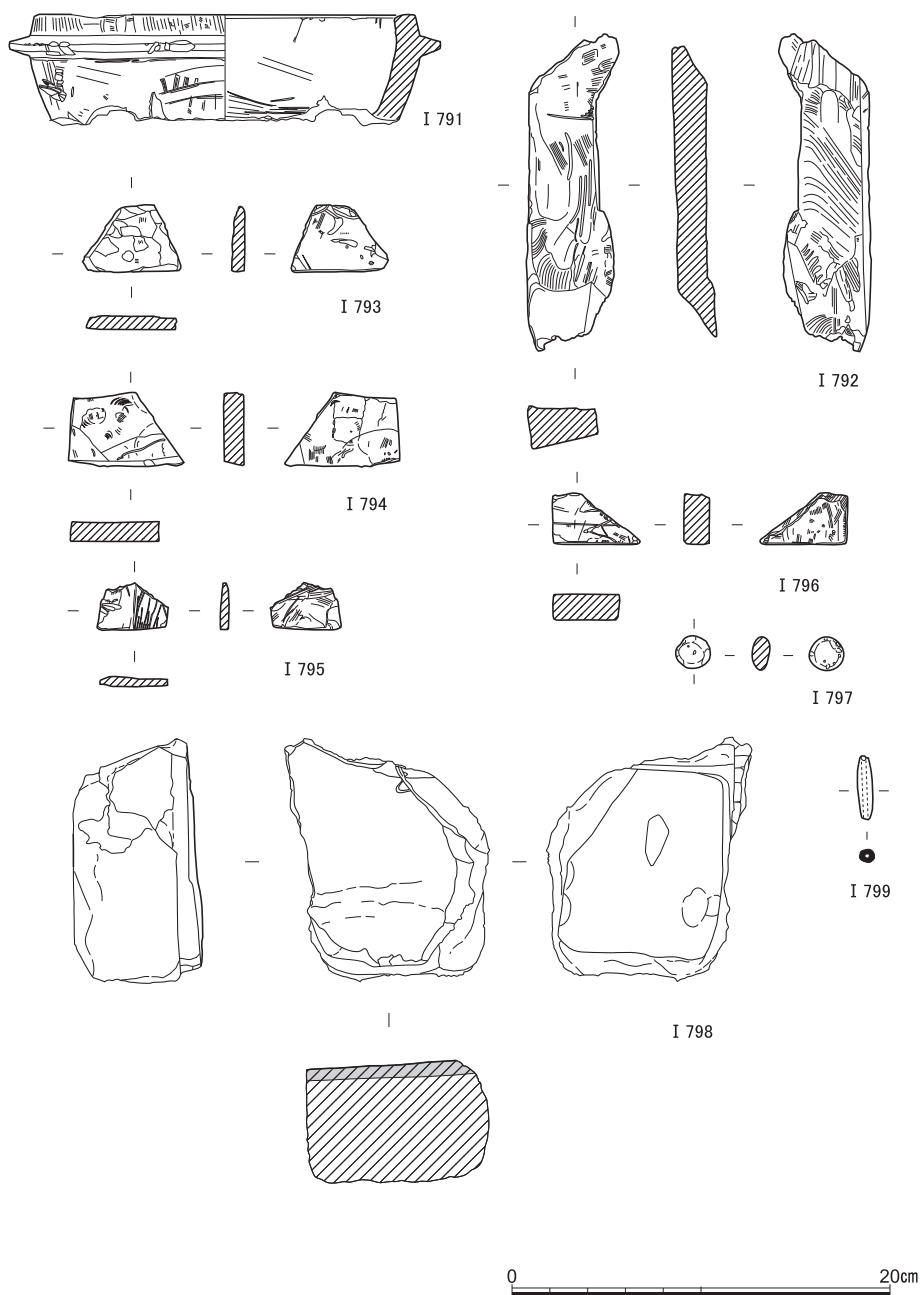


図38 黒褐色土出土遺物(4) (I 791～I 797石製品, I 798・I 799土製品)

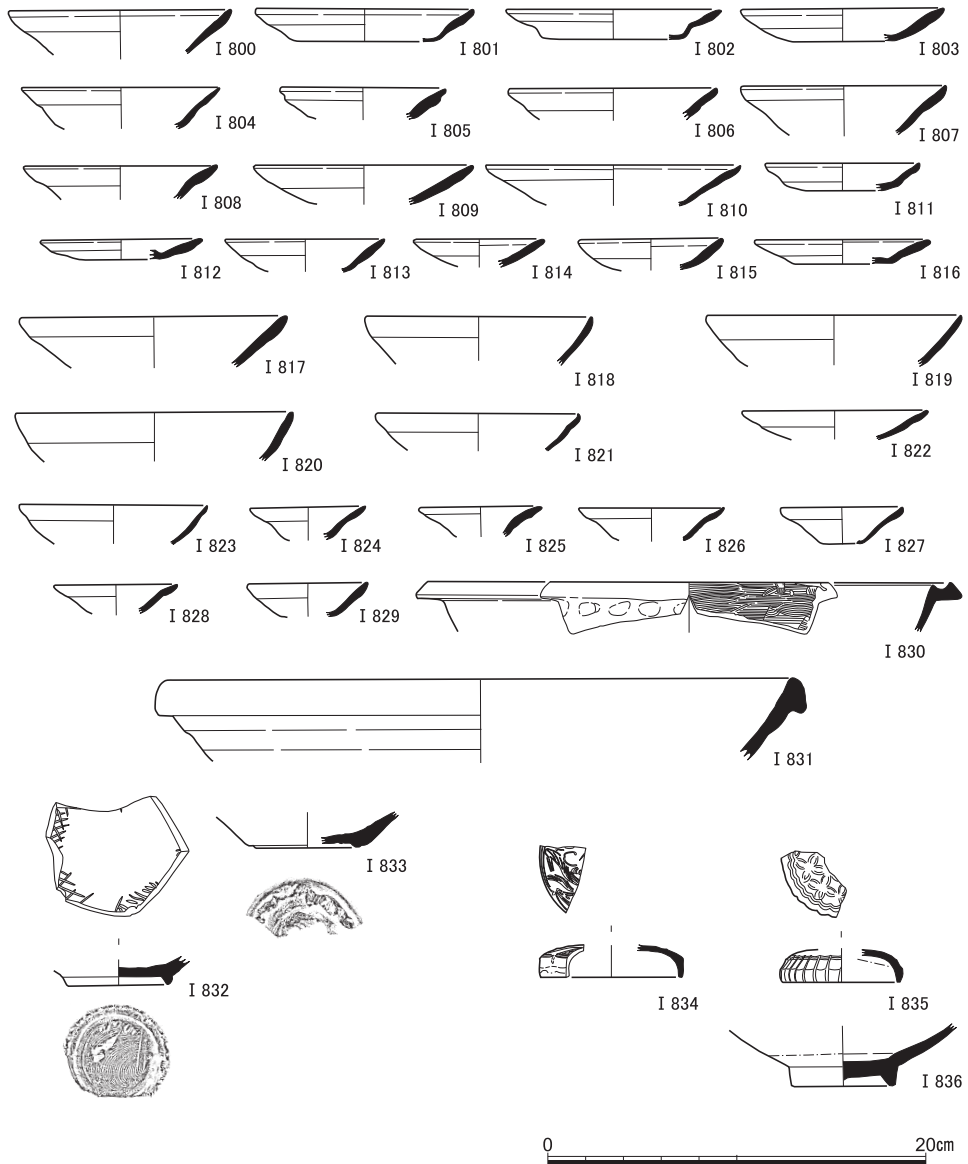


図39 茶褐色土出土遺物（I 800～I 829土師器，I 830瓦器，I 831須恵器，I 832・I 833灰釉陶器，I 834・I 835白磁，I 836青磁）

ている柱穴などのピット群からの出土遺物である。I 664の土師器皿のみ東南域、ほかは西半である。I 655は、厚手の器壁をもち、口縁端部を内側に折り曲げる特異な形状の大型皿形土器。内面にはすすの付着を認める。I 656は底部に糸切痕を残す回転台土師器の皿で、器高2.7cmとやや深手である。I 665は陶器の底部で、内面に横位外面に縦位の密な刷毛目が残される。

黒色粘質土出土遺物（I 666～I 694） 2層ある包含層のうち下位にあたるものからの出土である。土師器皿類は、「て」字状口縁の系譜を引くB₄類の小皿が上部の黒褐色土にくらべてわずかだが増える傾向が見て取れる（I 667～I 672）。I 681～I 683は、糸切痕をもったり高台が付される土師器の底部。I 685は瓦器の盤で、内外とも横位の磨きが著しい。I 689～I 693は白磁碗で、口唇部は玉縁状に肥厚するものと短く外反するものの双方がある。

黒褐色土出土遺物（I 695～I 799） 包含層の上部出土品を抽出した。土師器皿類はB₄類も含まれるが、2段撫で手法C類が主体である。I 716は口径11.8cmの中型品で、内外面全面が被熱して黒色となっている。底部に糸切痕をもつ回転台土師器も複数確認され、I 720～I 723は皿形の器形が把握できる。I 725～I 729は底部のみ。I 724は丈高の高台が付されるもので、糸切痕はないが、強い横撫でで仕上げられており、回転台成形と推測される。I 730・I 731は大きく開く口縁部で、塩壺と呼ばれる器形の口縁部分だろう。I 732～I 735は土師器甕で、「く」字状に頸部が屈曲し、薄い器壁の胴部となる。I 736～I 746は瓦器。碗や皿は見込みを中心に密な暗文がほどこされている。I 744～I 746は瓦器の盤。いずれも小ぶりの製品で、内面は密に磨いている。I 747～I 751は須恵器。I 747は東播系のすり鉢、ほかは産地未詳である。磁器は、白磁の比率が高い。I 783は底部外面に「十」字形の墨書がある。I 785は突線になる刻印らしきものがみられるが、判読できない。I 791～I 797は石製品で、I 791は滑石製の石鍋、I 792～I 796は砥石。I 797は赤色の石材による玉状の製品で、装飾品であろうか。I 798は軟質の凝灰岩を用いた磚とみられるが、高温によるものか全体が暗灰色の軽石状となり、片側表面が5mmほどガラス質に硬化している。I 799は土錘。

茶褐色土出土遺物（I 800～I 836） 黒褐色土より上層の耕作土である茶褐色土中には、細片となった中世後半期の遺物がみられる。土師器は1段撫で手法E類（I 800～I 808）やF類（I 809～I 816）の皿、白色の大小の碗類（I 817～I 829）がある。14世紀代以降には調査区が荒廃していったことを反映する遺存状況といえよう。

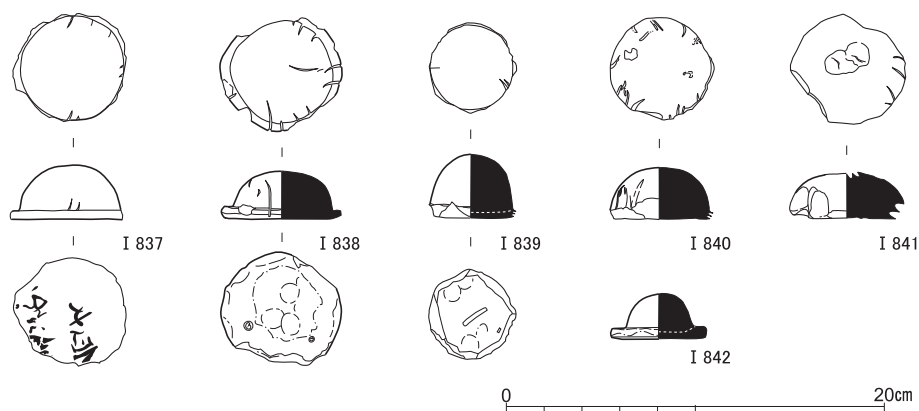


図40 緑釉土製円塔（I 837～I 839・I 842：黒褐色土，I 840：黒色粘質土，I 841：S E 5 出土）

緑釉土製円塔（I 837～I 842） 白河街区一帯で特徴的な鍔をもつ饅頭形の土製品で、ここでも6点が出土している。いずれも白色の胎土で底面を除いて施釉されている。また、やや小型のI 842以外は、側面に装飾として縦位の細線が複数刻まれている。I 837は底面に墨書が認められる。またI 838は、底面の周縁添いにも施釉が及んでおり、焼成時の目痕かともみられるような小さな粒状の突起が付着している。

B：瓦磚類（図版21～33，図41～56，表2～4）

今回の調査においては、S X14など大規模な瓦溜をはじめ、他の小規模な瓦溜や土器溜、黒褐色土や黒色粘質土などからも大量に瓦が出土している。しかしそれらは、整地のために廃棄されたと見なされるものであって、出土状況そのものはあまり意味を成さないと判断される。ここでは、S K 1 出土瓦を除いて全体を一括し、軒丸瓦と軒平瓦について瓦当文様で分類して呈示する。なお、それぞれの型式や遺構・層位別の出土点数を表2～4に示した。また、文献の一部は『尊』〔奈良国立文化財研究所1961〕、『平古』〔平安博物館編1977〕、『提要』〔上村1994〕の略号で示す。

軒丸瓦（図41～47） M1～M43に区分した。M1（I 843・I 844）は、『提要』では12世紀前葉の丹波産とされる瓦当径の大きな複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、今回最も多く出土している。灰色や黒色、燈色などさまざまな色調のものがみられる。かつて尊勝寺跡においても多数が出土し、『尊』において1型式とされ、軒平瓦の150A型式（今回の軒平瓦H1に相当する）と組み合うものと想定されている。

M2～M6（I 845～I 855）は、12世紀前葉ころの播磨産とされる複弁蓮華文軒丸瓦。M1に次いで多く出土している。いずれも灰色の堅緻な焼成で、M2は最外縁の圏線の有

無でA（I 845・I 846）・B（I 847）に細分した。『尊』において52A型式とされ、242C型式（今回のH15に相当か）と組み合わせるものと想定されている。M3（I 848・I 849）は複弁蓮華文を突線のみで表現する軒丸瓦。図示した2点のように同文でありながら范の深さが異なるものが存在する。『尊』では54型式とされる。M4（I 850・I 851）は花卉を突出させる表現の複弁八葉蓮華文軒丸瓦。明石林崎三本松瓦窯に同文品をみることができ〔春成2014 図版2-31等〕、上原真人は、京都市最勝寺や法金剛院で出土が目立つことから12世紀第二四半期～中葉の実年代に比定している〔上原2014 p.83〕。M5（I 852）は突線で小さな花卉を多数めぐる蓮華文で、『尊』で22型式とされる。同じく明石林崎三本松瓦窯に同文品を認める〔春成前掲 図版3-54〕。M6は突線で区画するなかに複弁を配するモチーフで、周囲の珠文帯や圏線の異同でA～Dに細分した。M6B（I 854）は『尊』で39型式とされるもの、M6C（I 855）は法勝寺塔跡調査報告での瓦21〔柏田2011 図80〕に同文とみられる。

M7（I 857）は、花卉を突出で表す単弁八葉蓮華文で、周囲に細かな珠文がめぐる。比較的軟質の焼成であり、播磨産ではなく丹波産かと想定するが、同文品を追跡できていない。

M8～M15（I 858～I 865）は、すべてを確定しきれていないが、多くは播磨産とみられるもので、1～2点程度しか出土していない。M8（I 858）は、おおぶりの瓦当に複弁八葉蓮華文を2重に表現するもので、やや軟質の焼成である。『尊』での9型式、明石林崎三本松瓦窯〔春成前掲 図版1-1〕と同文品。上原真人は京都市法金剛院での同文品存在から、その造営の1130年代以降の播磨産瓦屋にともなうものと評価している〔上原前掲 pp.78-9〕。M9（I 859）は、花卉を縦突線で区切る八葉蓮華文で、『尊』での12型式、内裏内郭回廊跡出土の『平古』210、明石市魚住窯出土品に同文を認める〔春成前掲 図版10-194〕。M10は、こぶりの瓦当中房内に多数の珠文が配される。焼成がやや軟質であり、播磨産以外の可能性もある。M11～M15はいずれも小片であるが、M13は『尊』の42型式、M14は同83型式と同文かとみられる。M15は、硬質の焼成で質感や瓦当の深さが全く異なるものの、M8と同文となる可能性もある。

M16（I 866）は、突線で花卉の輪郭をあらわすもので、瓦当から筒部の外面全面を縄叩き調整しており、丹波産系であろう。『尊』の92A型式と同文とみられる。M17（I 867）も突線で花卉を表すが、太く間延びした四葉の蓮華文の周囲に大粒の珠文帯がめぐる。瓦当の外周や裏面に縄叩きがみられることから、丹波産であろうか。

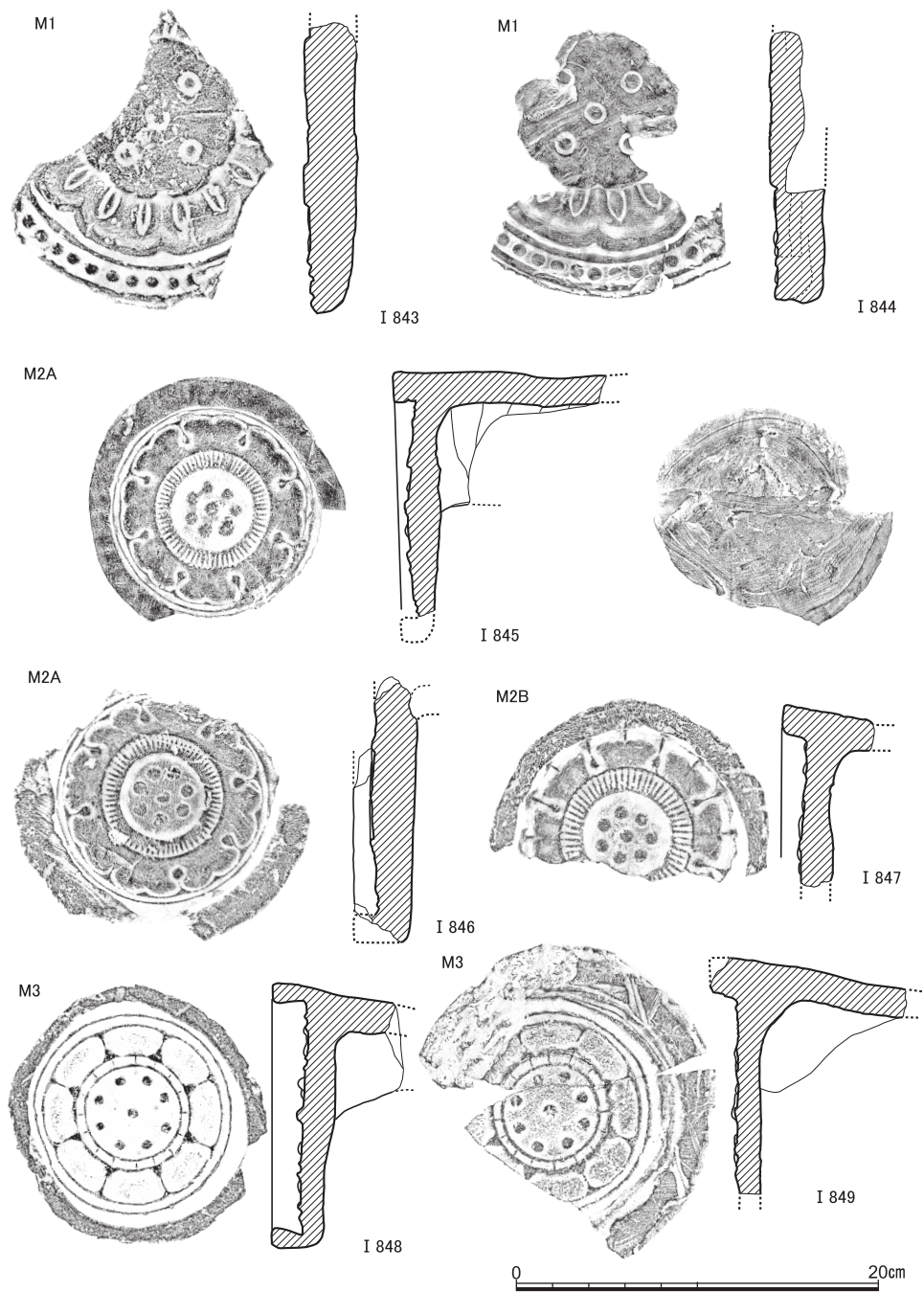


図41 軒丸瓦(1) (I 843: 黒色粘質土, I 844・I 845: S X14, I 846: S E15上面, I 847: S X10, I 848: 黒褐色土, I 849: S X13出土)

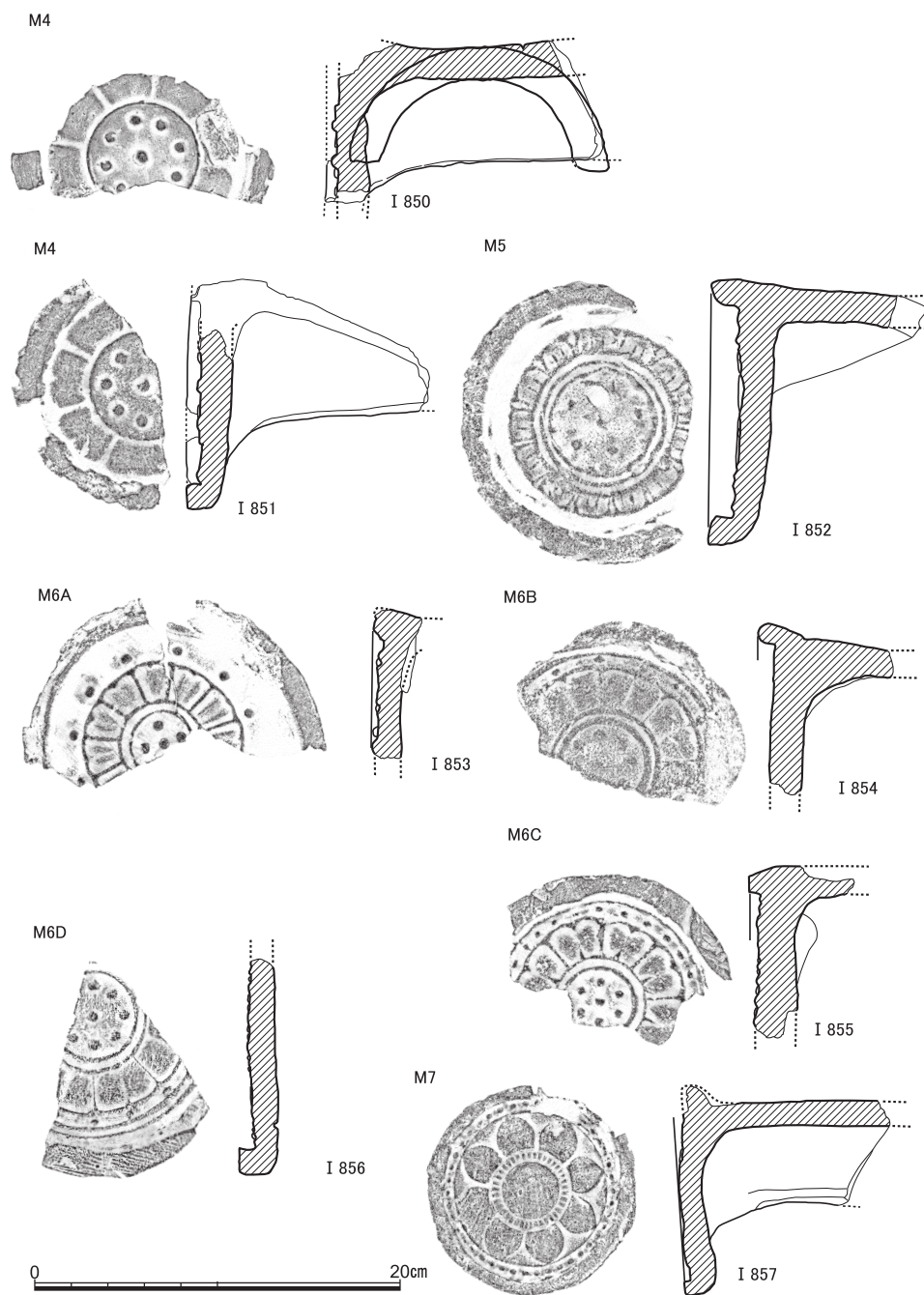


図42 軒丸瓦(2) (I 850 : S E10, I 851 : S X37, I 852 : S X 5, I 853・I 855 : 黒色粘質土, I 854 : S X13, I 856 : 黒褐色土, I 857 : S X10出土)

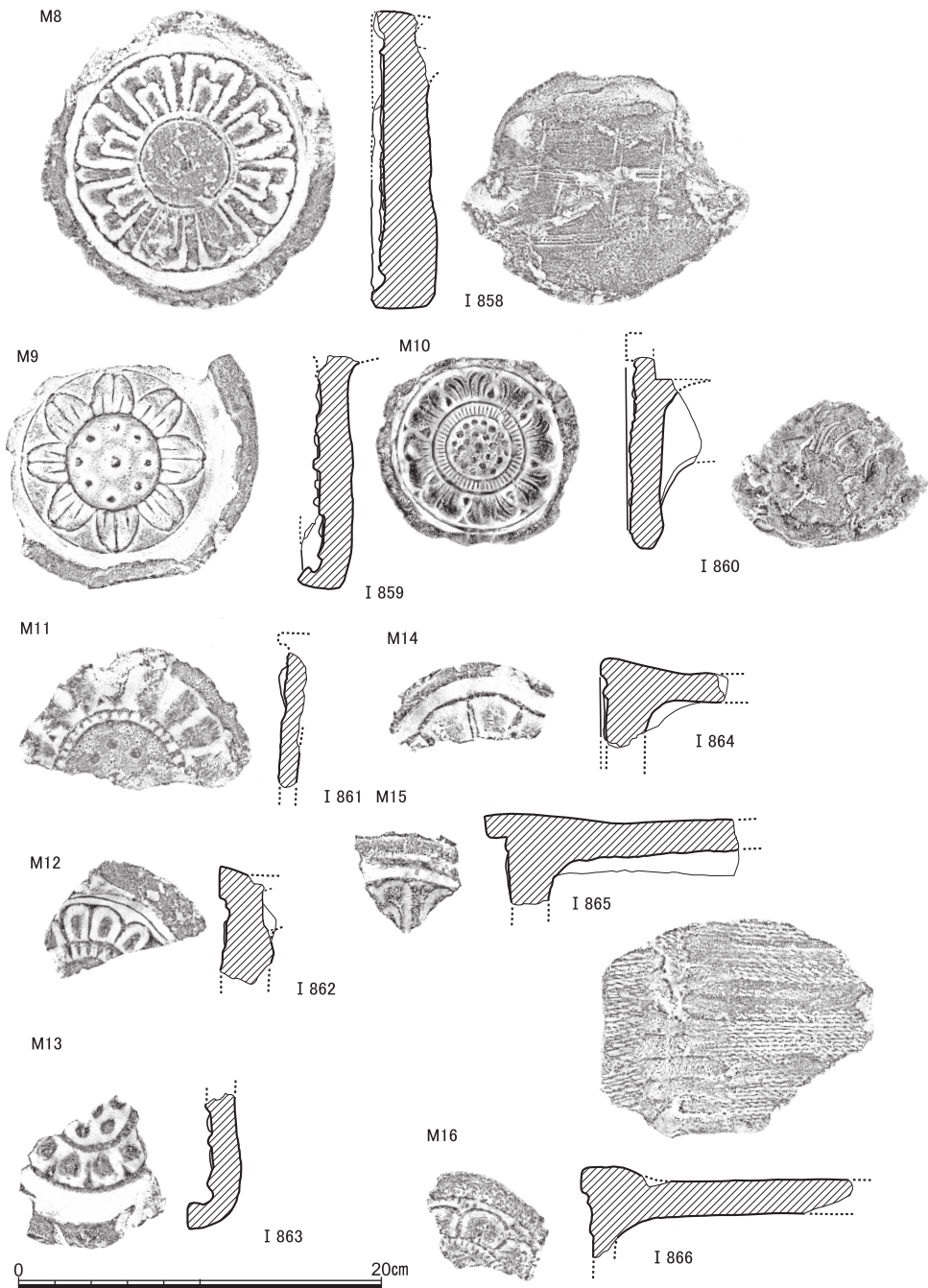


図43 軒丸瓦(3) (I 858: S X15・16, I 859: S X36, I 860・I 865: S X14, I 861・I 866: S X22, I 862・I 863: 黒色粘質土, I 864・I 865: 黒褐色土出土)

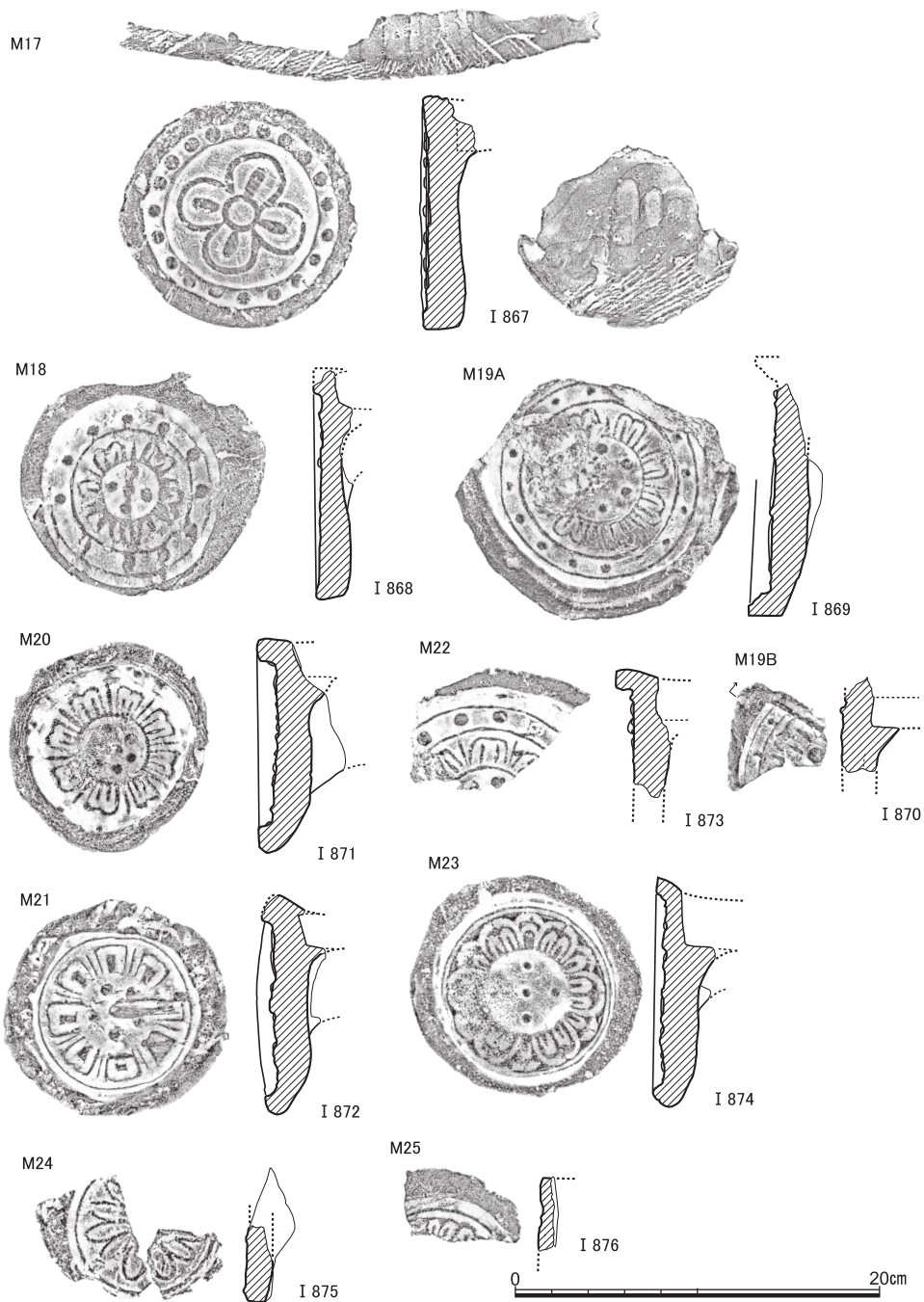


図44 軒丸瓦(4) (I 867: S X15・16, I 868・I 874: 黒色粘質土, I 869: S X22, I 870: S X14, I 871・I 873・I 875・I 876: 黒褐色土, I 872: S E13上面出土)

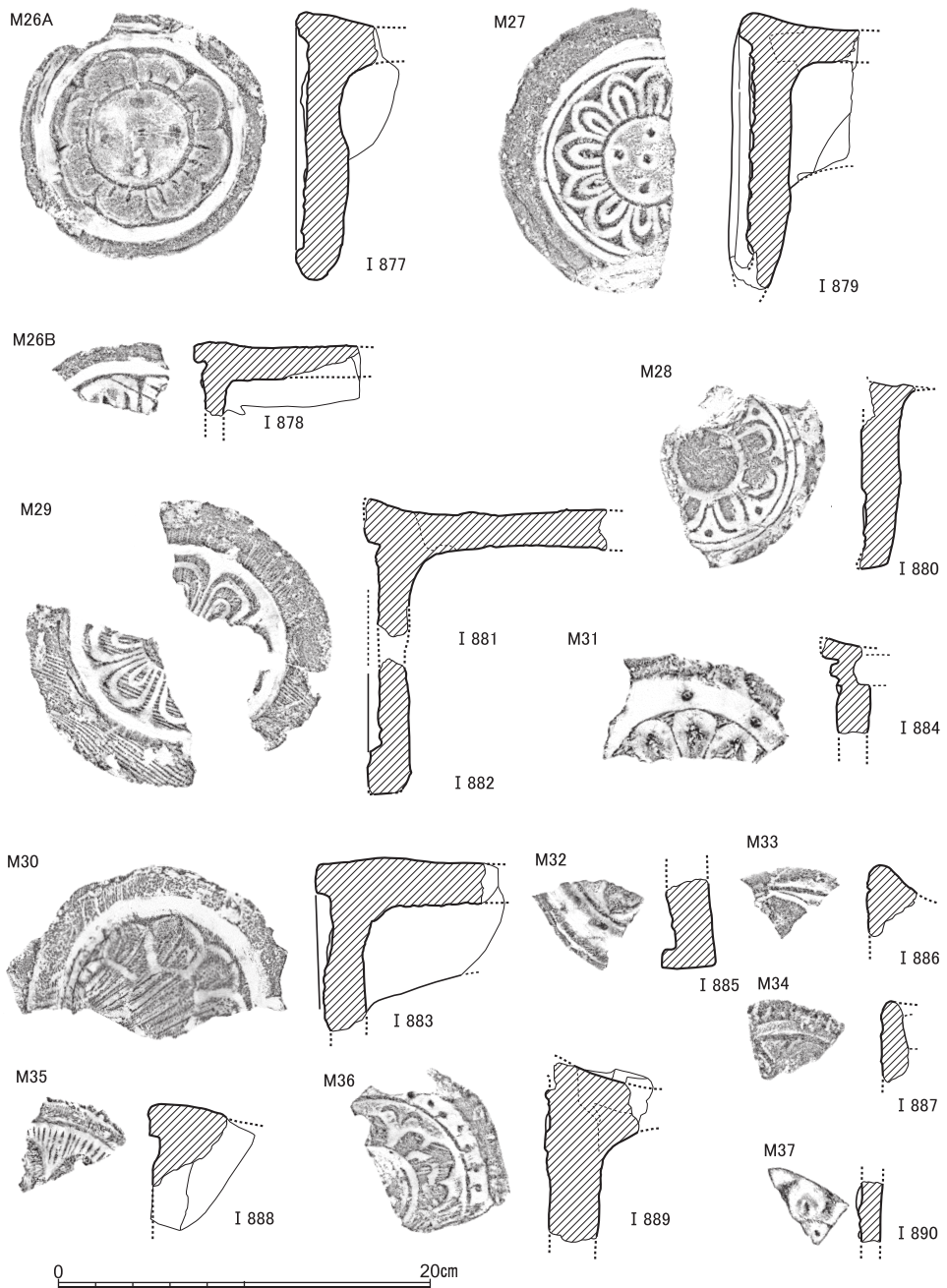


図45 軒丸瓦(5) (I 877・I 878・I 882・I 884・I 888: 黒褐色土, I 879: S X15・16, I 880・I 889: S P30, I 881: S E 5, I 883: S X13, I 885: 黒色粘質土, I 886: S E 6, I 887: 茶褐色土, I 890: S X14出土)

古代末～中世の遺跡

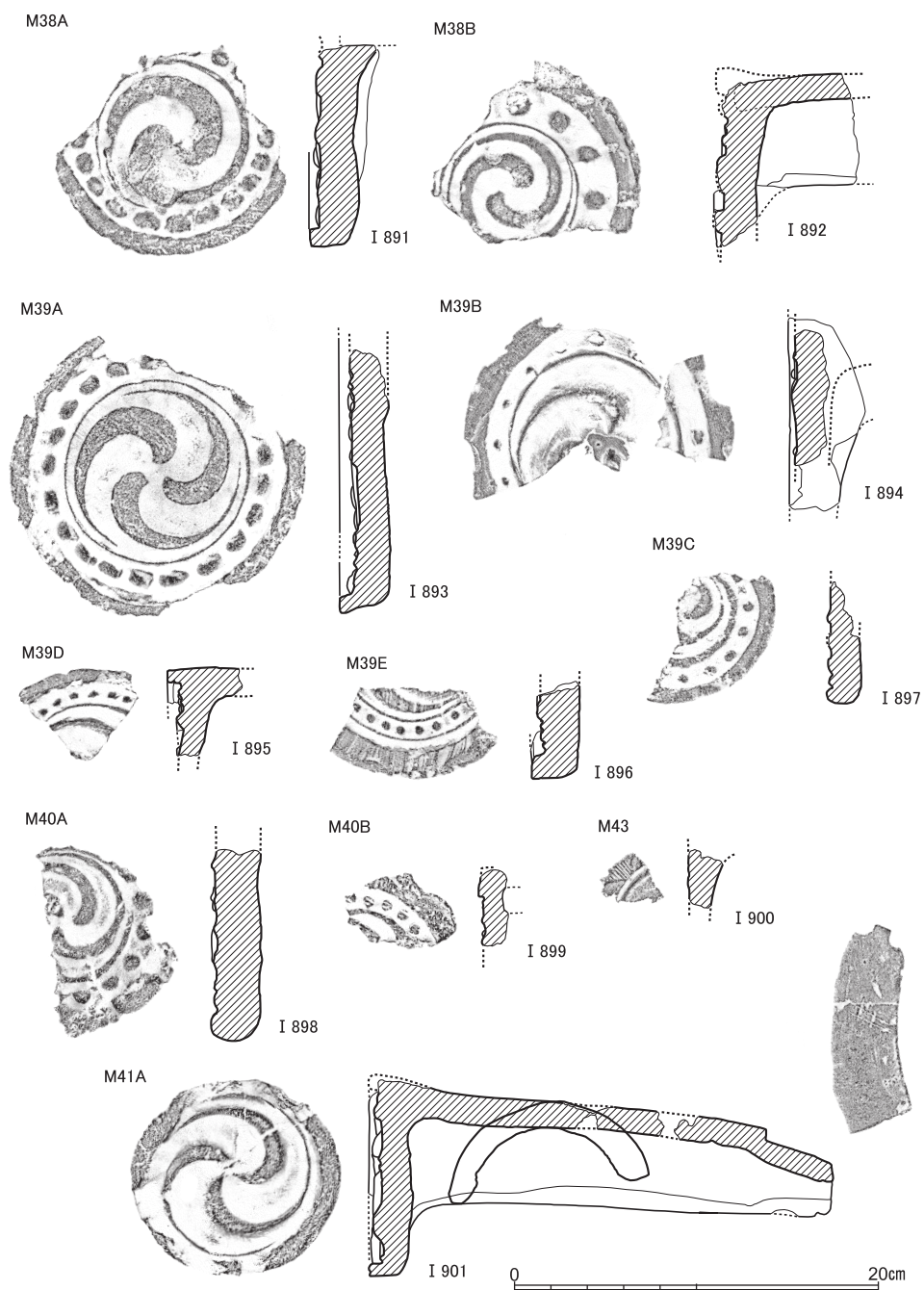


図46 軒丸瓦(6) (I 891 : S X 10, I 892・I 895・I 901 : S E 5, I 893・I 897～I 899 : 黒褐色土, I 894 : S K 2, I 896 : S X 36, I 900 : 茶褐色土出土)

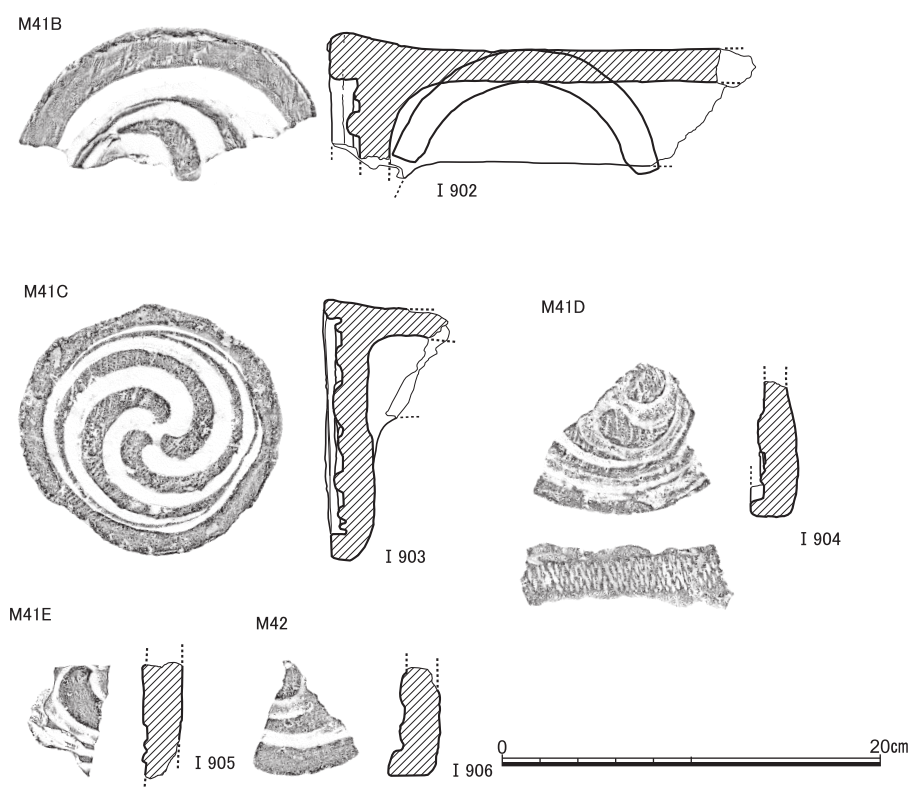


図47 軒丸瓦(7) (I 902: S X15・16, I 903: S E 7, I 904: S D35, I 905・I 906: 茶褐色土出土)

M18 (I 868) と M19 (I 869・I 870) は、M 1 や M 2 に次いで出土の多いもので、細い突線で複弁蓮華文を表すもの。ともに山城産で、M18は特徴的な楕円形の瓦当をもち、中央官衙系瓦屋のⅢ～Ⅳ期、12世紀前半～中葉期に位置づけられる〔上原1978〕。M19は、弁が完全に複弁化し大きな范傷のある I 870 を B とする。『平古』217 と同范だろう。

M20～M34 (I 871～I 887) も、多くは類似の特徴をもつ平安後期の山城産とみられるが、1～2点しか出土していない。うち、M21 (I 872) は、南側調査地で瓦10と報告されるものが同文であり〔京都市埋文研2014 図23〕、また三条西殿跡出土の『平古』205は、横位の大きな范傷の存在も一致することから同范であろう。また M22 (I 873) は『尊』の6型式、M23 (I 874) は18型式と同文であろう。M24 (I 875)・M25 (I 876) も薄手の楕円形瓦当となる。M26は、范のきわめて浅く不鮮明だが范傷はない A (I 877) と、鮮明だが范傷のある B (I 878) に細分したが、モチーフとしては同じかもしれない。同文とみられる『尊』の23B型式は斜行する2条の范傷が顕著で、I 878 と同范とみられ、

円勝寺・成勝寺跡の瓦23〔京都市埋文研2015 図版33〕や南側調査地の瓦11とも範を同じくする。M27（I 879）は単弁十二葉蓮華文で、円勝寺・成勝寺跡の瓦28と同文である〔京都市埋文研2014 図23〕。M28（I 880）は『尊』の62型式と同文。M29（I 882・I 883）は瓦当面に範の木目が著しい単弁蓮華文。『平古』199にモチーフは類似するが同文品は定かでない。M30（I 883）も瓦当面の荒れが著しい単弁八葉蓮華文。M31（I 884）は、円勝寺・成勝寺跡の瓦19と同文かとみられる。M32～M34はいずれも単弁蓮華文の小片で、全体は判然としない。

M35（I 888）は産地不明で、突出表現の単弁蓮華文かとみられる背景には木目らしき筋状痕が著しい。黄白色の軟質の焼成で大粒の砂粒を多量に含む胎土である。

M36（I 889）は南都系（大和産）とみられる宝相華文軒丸瓦。薬師寺出土品に同文があり、11世紀後葉～12世紀前葉に位置づけられている〔上原1978 第26図－9〕。M37（I 890）は小片で全容を把握しがたいが、平安宮大極殿出土の南都系として紹介されるもの〔上原前掲 第26図－5〕に類似している。

M38～M42（I 891～I 906）は巴文の軒丸瓦である。M38は左巻きの二巴に珠文帯がめぐるもの。巴と珠文の差異でA（I 891）とB（I 892）に細分する。M39は左巻きの三巴文に、圏線を介して珠文帯がめぐるもの。同様に巴や珠文の差異で多数細分される。うちM39A（I 893）は、硬質の堅緻な焼成で播磨産の特徴を示し、明石林崎三本松瓦窯と同文とみられる〔春成2014 図版4－61〕。M40は同じ三巴文でも圏線を介さずに珠文帯がめぐるもの。M41は珠文帯をもたない三巴文。巴の差異で複数に細分される。筒部も遺存するSE5出土のI 901は、玉縁に平行斜線の篋記号をとまなう。I 904は瓦当側面に縄叩きがみられ、丹波産系かとみられる。M42（I 906）は右巻きの巴文で、右巻きはこの1点のみである。

M43（I 900）は、斜線を充填した鋸歯状のモチーフが外周をめぐるもの。『尊』の101型式が同種の装飾をもち、同文であるとすれば内区は巴文となる。

軒平瓦（図48～52） H 1～H57に区分した。H 1（I 907～I 909）は『提要』で12世紀前葉の丹波産とされる軒平瓦。軒平瓦の中では最も点数が多い。同文だが顎の形状や調整に差異があり、I 908は瓦当面の外縁が突出するが、I 907・I 909は平坦である。一方でI 907とI 908は顎の外面に縄叩き調整がそのまま残されるが、I 909は丁寧に撫で消されている。またI 909には瓦当裏面に赤色顔料の付着を認める。残りの良いI 907では、平瓦部は凸面が全面縦位の縄叩き、凹面が粗い布目である。『尊』では150A型式に相当し、

同じ丹波系の軒丸瓦Ⅰ型式（今回のMⅠ）と組み合わせるものとされている。

H2～H24（I910～I933）は、おおむね硬質の堅緻な焼成で、瓦当が接合式の播磨産の技法的特徴を有する、12世紀代の一群である。うち比較的点数が多いのはH2・H3であり、ほかは1～3点程度の出土点数である。H2は唐草文の周囲に珠文を配するモチーフで、圏線で囲まれる全体が瓦当面に納まる2A（I910）と上下が切除されている2B（I911）に細分した。それぞれ5点と2点が出土している。『尊』での259A型式と259B型式に相当する。H3（I912）は、樹枝状の中心飾りをもつ唐草文で、神出窯の製品とされる〔上原1978 第17図-2〕。『尊』の254型式に相当する。H4～H8は、背向するC字文を中心飾りとする唐草文モチーフになるとみられ、H4（I913）は『尊』での229A型式にはほぼ相当するだろう。H5（I914）は、瓦当の右半分しか残っていないが、『尊』の233型式に相当する。H6（I915）は『尊』の228型式、H7（I916）は同じく226型式に相当するもので、これらは11世紀後半の播磨系軒平瓦の系譜を引く尊勝寺創建瓦と評価されている〔上原2014 図5〕。H8（I917）も同文品を見いだせていないが、同種のものかもしれない。

H9（I918）・H10（I919）・H11（I920）は、12世紀中葉以降展開する播磨系の宝相華唐草文とされるもので〔上原2014 図13〕、明石魚住窯や林崎三本松窯に同文品を認める〔春成2014 図版10-235・図版7-151・143〕。H11は南方の延勝寺比定地内の調査や〔六勝寺研究会1973 写真第11〕、南側隣接地での調査においても同文品の出土が報告される〔京都市埋文研2014 図24-瓦24〕。H12～H14（I921～I923）もこれらと同種の唐草文になるものと想定しているが、残存部分が少なく同文品を見いだせていない。H14（I923）は顎貼り付け技法によるものかもしれない。

H15（I924）は、『提要』では12世紀中葉の播磨産とされるもので、『尊』では242C型式として軒丸瓦の52A型式（今回のM2）とセットを成すものとされる。全体のモチーフは下向きC字形2個を中心飾りとする唐草文で、尊勝寺の創建瓦と評価されている〔上原2014 第7図〕。

H16（I925）・H17（I926）は、「成菩提院式軒瓦」と上原が仮称するものの系譜を引く12世紀代の偏行唐草文で、H16は三木平井窯で、H17は『尊』の155型式や三木久留実柳谷窯に同一モチーフが知られる〔上原2014 図10-2・3〕。H18（I927）・H19（I928）は宝相華唐草文で、H19は『尊』の269型式や明石林崎三本松窯出土品にはほぼ同じものを認める〔春成2014 図版6〕。

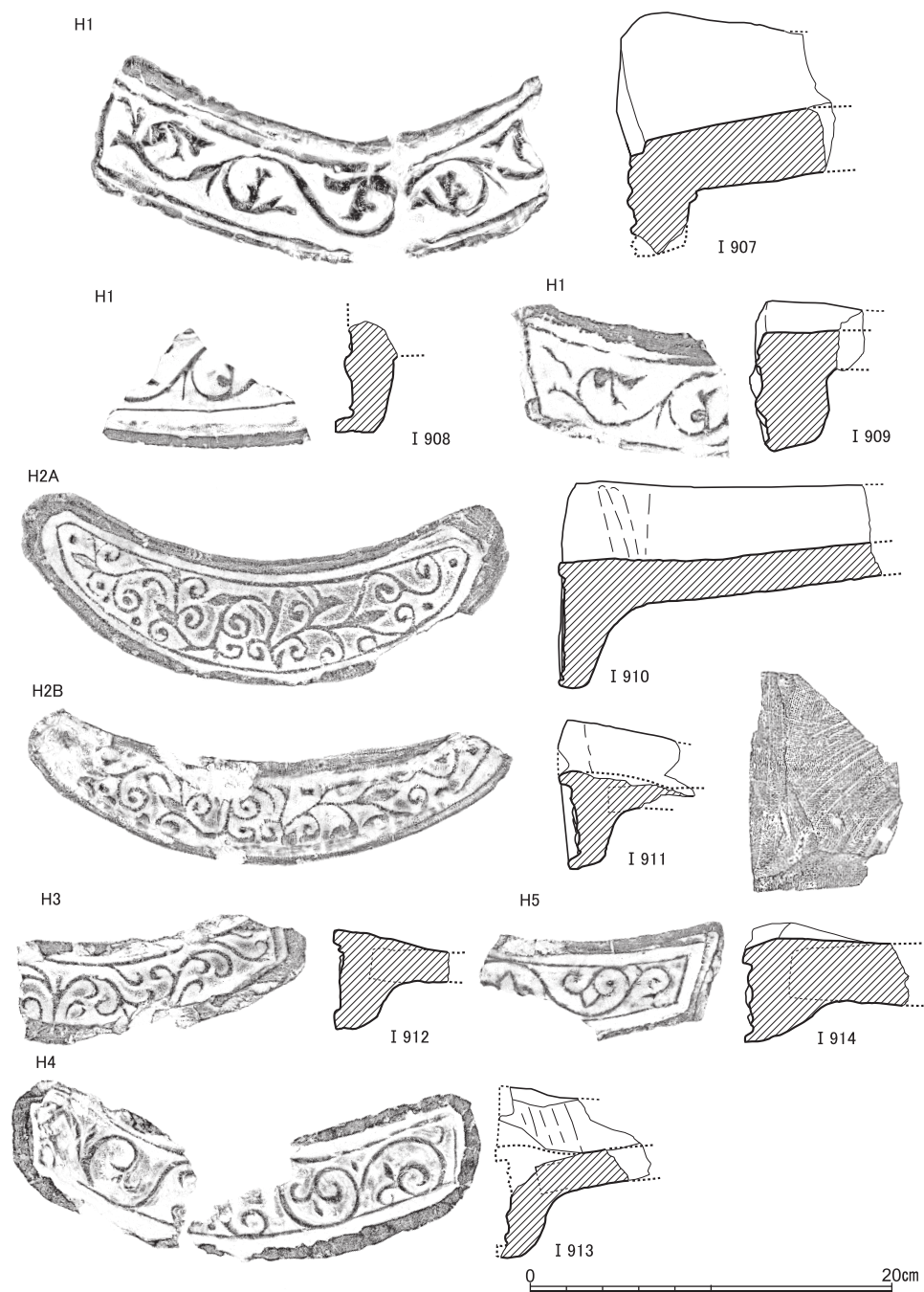


図48 軒平瓦(1) (I 907・I 913: S X14, I 908: 黒色粘質土, I 909: S X27, I 910: S E15, I 911・I 914: S X10, I 912: S P59出土)

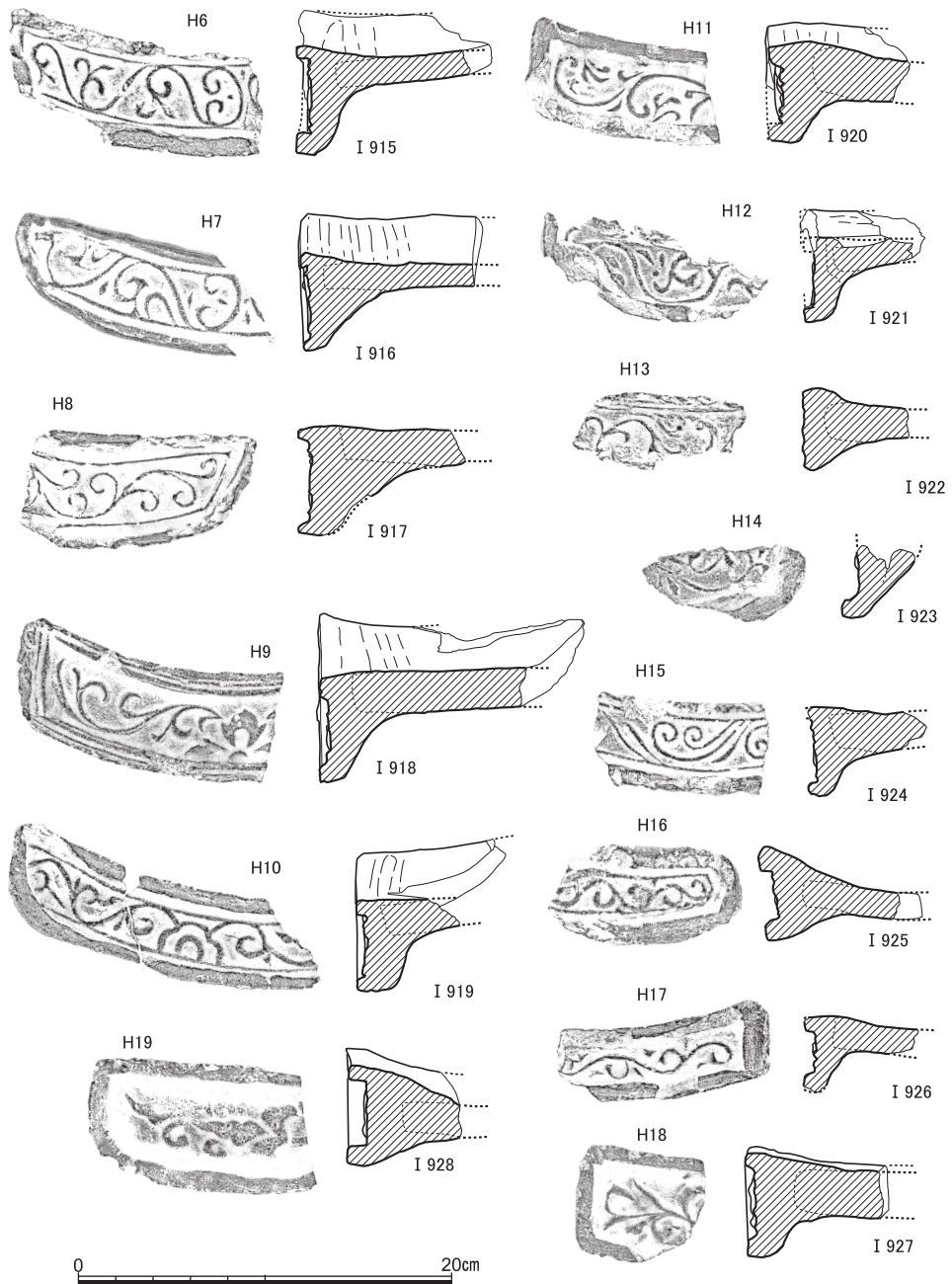


図49 軒平瓦(2) (I 915, I 919: S E 5, I 916・I 922・I 925・I 927・I 928: 黒褐色土, I 917: 黒色粘質土, I 918: S X 36, I 920: S D 35, I 921: 上層混入, I 923: S X 1 上面, I 924: S X 15・16, I 926: S E 6 出土)

古代末～中世の遺跡

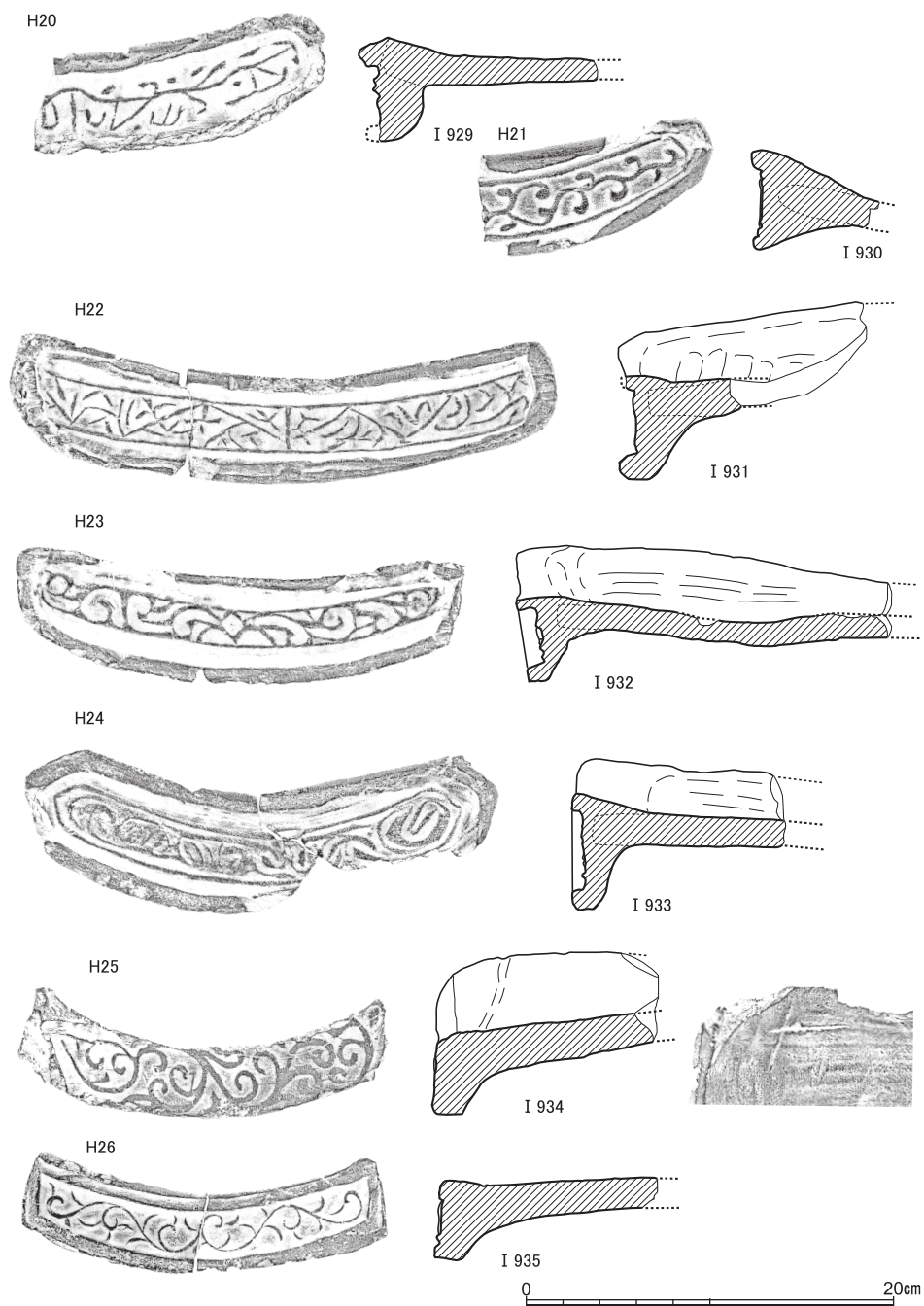


図50 軒平瓦(3) (I 929 : S X 23, I 930 : 黒褐色土, I 931 : S X 22, I 932 : S X 6, I 933 : S X 13, I 934 : S X 20, I 935 : S X 22 + S E 5 出土)

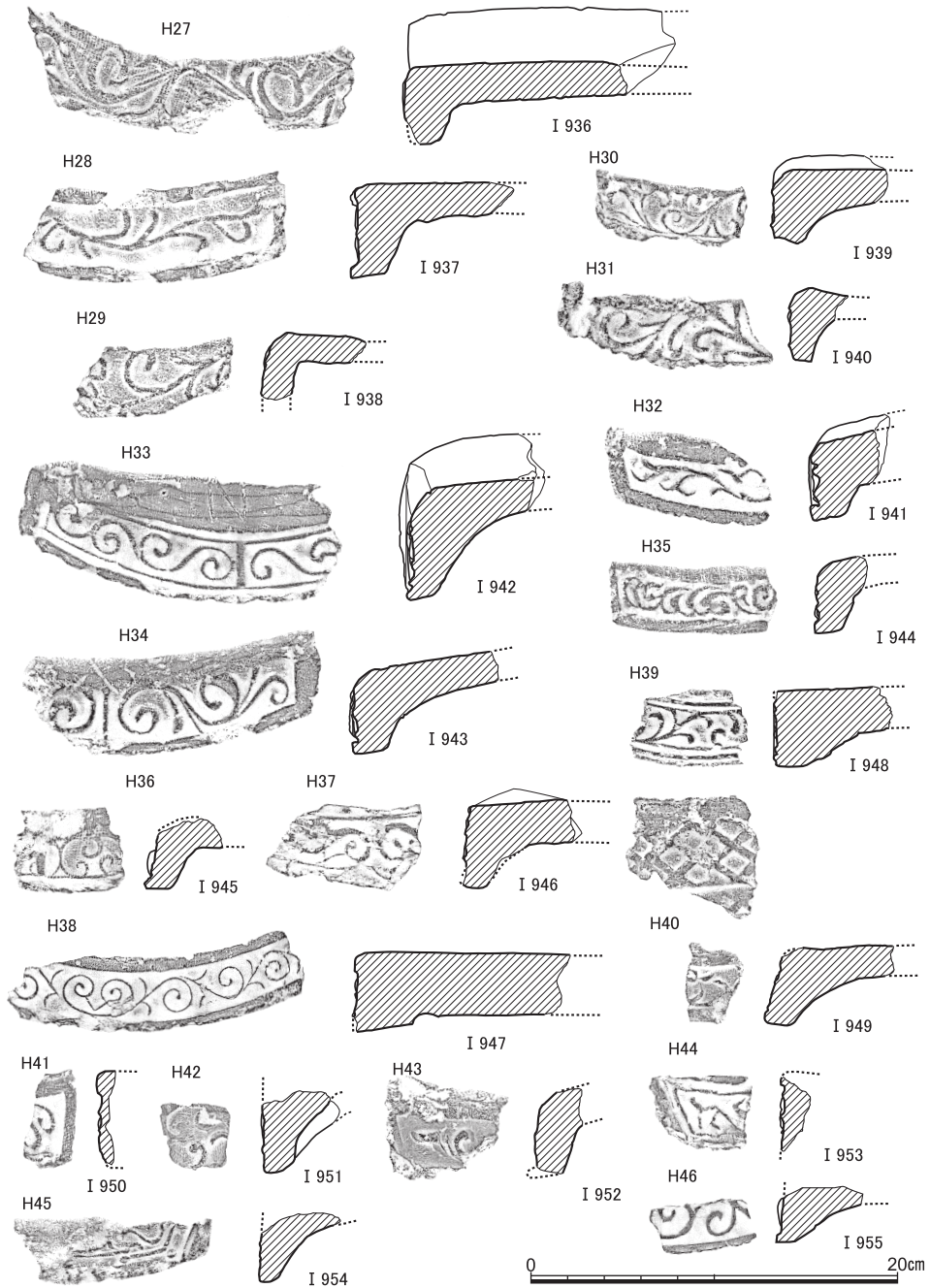


図51 軒平瓦(4) (I 936・I 938～I 940・I 944～I 946・I 950・I 951・I 955: 黒褐色土, I 937: S X 7, I 941: S X 37, I 942: S X 40, I 943: S X 15・16, I 947: 黒色粘質土, I 948: S E 5, I 949: 茶褐色土, I 952: S E 6, I 953: S X 22, I 954: S X 35出土)

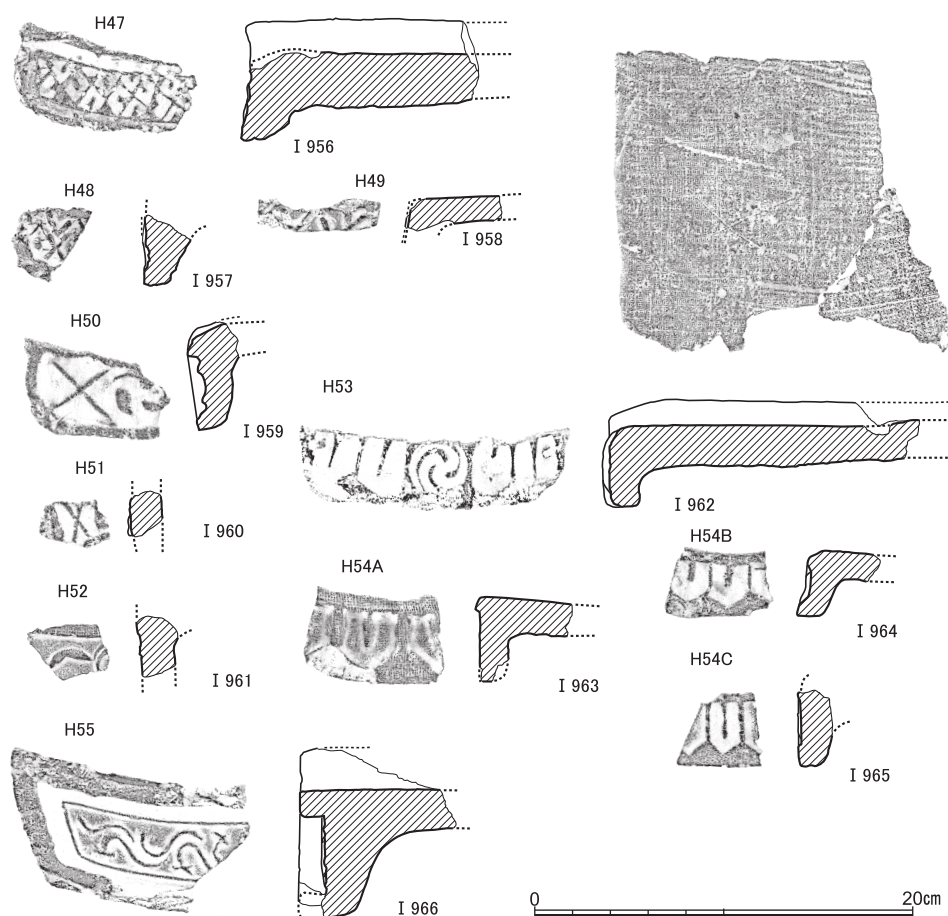


図52 軒平瓦(5) (I 956 : S X 10, I 957 : 上層混入, I 958 : S E 6, I 959・I 960・I 963・I 964 : 黒褐色土, I 961・I 962 : S E 5, I 965 : S X 35, I 966 : 表土出土)

H20～H24 (I 929～I 933) は、点数は少ないが瓦当面の残りの良い一群で、H20 (I 929) は『尊』の266型式、H21 (I 930) は法勝寺塔跡〔柏田2011 図84-瓦59〕や鳥羽離宮成菩提院三重塔〔上原2014 図10-12〕での出土が知られる。また、幾何学文となるH22 (I 931) は円勝寺成勝寺跡での瓦213と同文で〔京都市埋文研2015 図版48〕、『尊』の279型式に近い。H23は『尊』の235型式と、またH24は177型式と同文である。

H25～H37 (I 934～I 946) は、瓦当の成形が折り曲げによるもので、中央官衙系と呼ばれるような山城産の一群と判断している。このうちまとまった点数が出土しているのはH25とH26の2型式のみであり、ほかは1～2点の出土にとどまる。H25 (I 934) は、『平

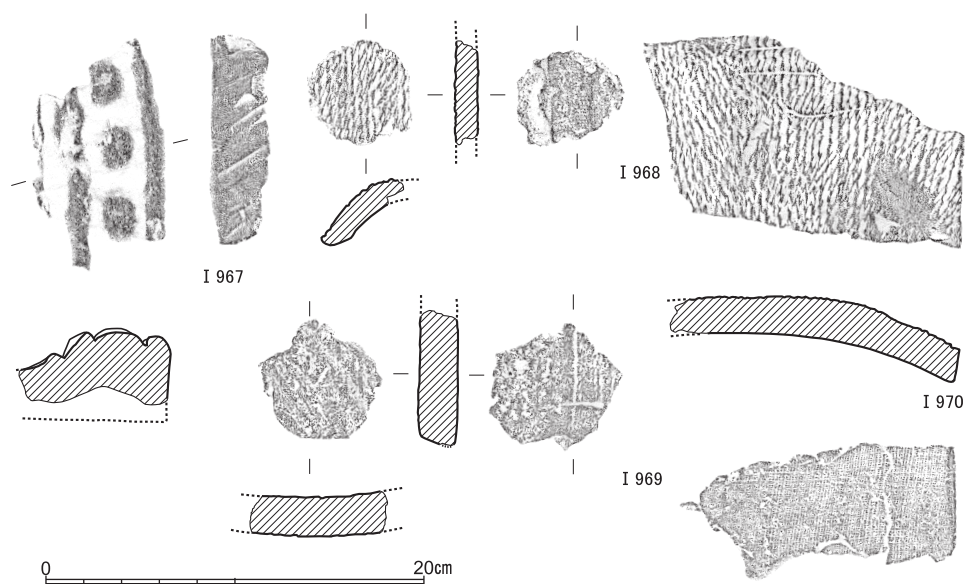


図53 鬼瓦（I 967：S X 14出土），瓦製円板（I 968・I 969：S E 7出土），線刻平瓦（I 970：S X 35出土）

古』464・465と，H26（I 935）は『平古』525と同文であり，栗栖野瓦窯でも出土があるとされる。前者は中央官衛系Ⅲ～Ⅳ移行期の12世紀前半代，後者はⅣ期の12世紀中葉に位置づけられている〔上原1978〕。なおI 934の凸面には1本線による窺記号がみられるほか，瓦当裏面に赤色顔料の付着がみられる。

H27（I 936）以下では，H28（I 937）が『尊』の185型式と，H35（I 944）が同277型式と同文と認定できたほかは，類例を探索し切れていないが，上述の瓦当の特徴などから，おおむね中央官衛系Ⅲ期やⅣ期となる山城産かとみている。ただし，H33（I 942）とH34（I 943）は，中央の縦位線を挟んで唐草文が対向するモチーフで，中央官衛系よりも播磨産の系譜を引くものともみられる点，注意される。なお，I 942の瓦当面中央上端に，「N」字形に刻線を連ねた窺記号が施されている。

H38（I 947）は，南都系とされる大和産の軒平瓦で，わずかに段差をもつ顎は凹線で平瓦部分と区画される。興福寺〔奈文研編1959 PL.27-52〕や円勝寺成勝寺跡〔京都市埋文研2015 図版52-瓦254〕で同文の出土が知られる。H39（I 948）は，貼り付けによる瓦当をもつもので，顎の裏面には太い格子目叩きがみられる。系譜・産地は不詳である。

H40（I 949）～H46（I 955）は，いずれも小片で全体像を伺い難いものだが，折り曲げとみられる瓦当がほとんどであり，おおむね12世紀代の山城産ではないかとみられる。

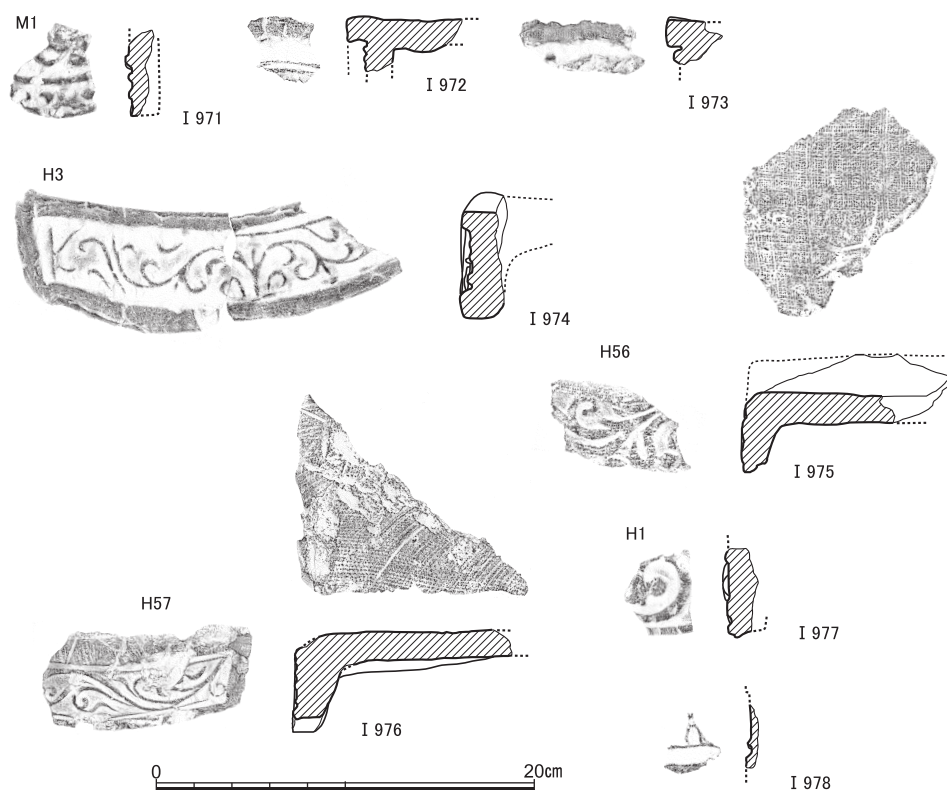


図54 SK 1 出土軒瓦 (I 971～I 973: 軒丸瓦, I 974～I 978: 軒平瓦)

H47 (I 956) は、斜格子の内部を珠文で埋める幾何学文で、広隆寺出土とされる『平古』554と同文とみられる。山城産であろう。一方H48 (I 957) は、鋸歯状のモチーフがうかがえる瓦当の端部片。灰色の焼成であり、播磨産の可能性もあろう。H49 (I 958) は、顎が剥落して瓦当上端のみしか残っていないが、突線による幾何学上のモチーフがうかがえる。『尊』281型式のようなものと同類かもしれない。

H50 (I 959) は、「×」と巴が交互に配されるモチーフとみられ、『尊』293型式と同類であろう。それより小ぶりなH51 (I 960) にも×のモチーフがみられるが、全体は判じ得ない。H52 (I 961) は、小片であるが雁行文と巴文を配した、『尊』294型式と同種のモチーフとみられる。またH53 (I 962) は、巴と2単位の剣頭を交互に配する『尊』296型式と同種であろう。H54は、各種の剣頭文で、細部の異同で細分した。前7点のうち、おおぶりな剣頭文であるH54A (I 963) が3点、小ぶりなH54B (I 964) も3点。これら巴や剣頭文をモチーフにもつ一群は、中央官衙系のIV～V期、12世紀後半代を中心とす

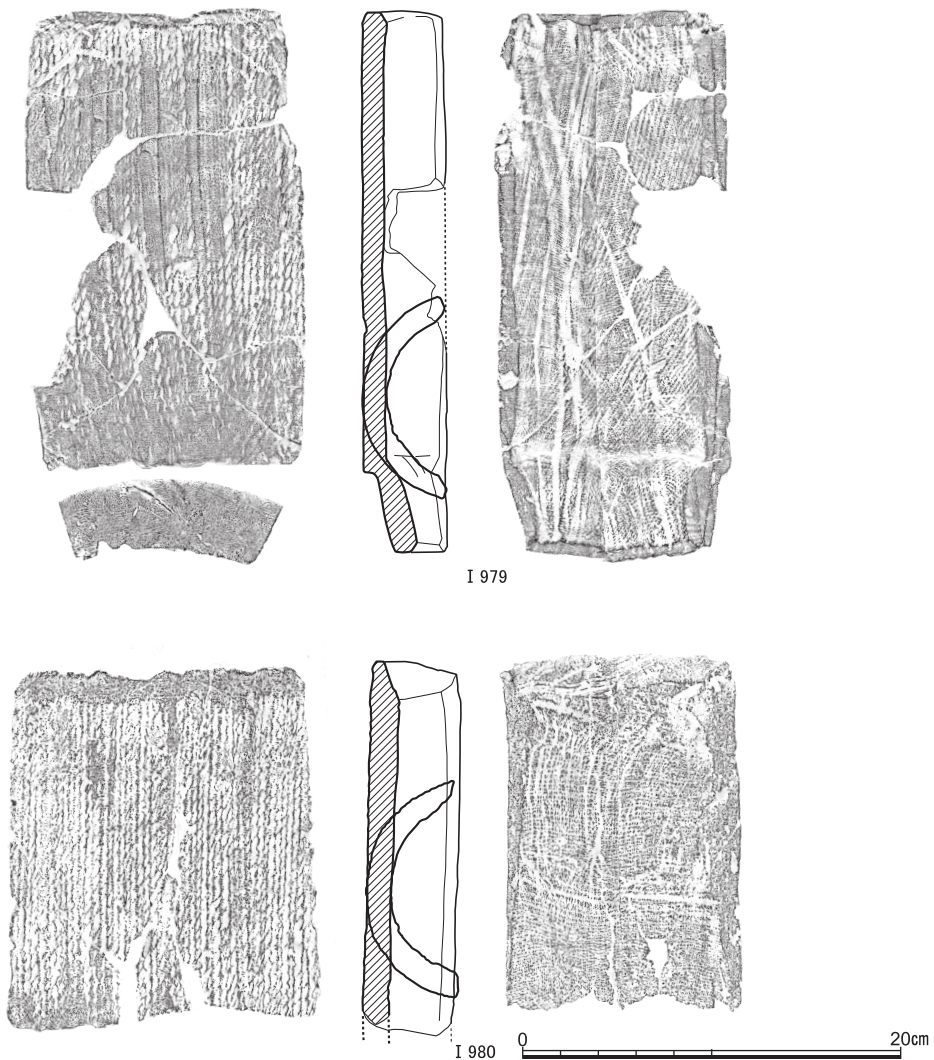


図55 SK1出土瓦(1) (I 979・I 980丸瓦)

るものだろう。

H55 (I 966) は、表土中より採集されたもので、退化した唐草文状のモチーフをもつ曲線型の軒平瓦。燈色で堅緻な焼成である。中世後半期のものであろう。

特殊瓦 (図53) 鬼瓦 (I 967) は、灰色でやや軟質の焼成で、周縁の珠文帯の破片である。瓦製円盤 (I 968・969) は、打ち欠きによって径5cm程度の円形に瓦片を整えている。線刻平瓦 (I 970) は、平瓦もしくは軒平瓦の凸面側に「モ」字形のような窠描線

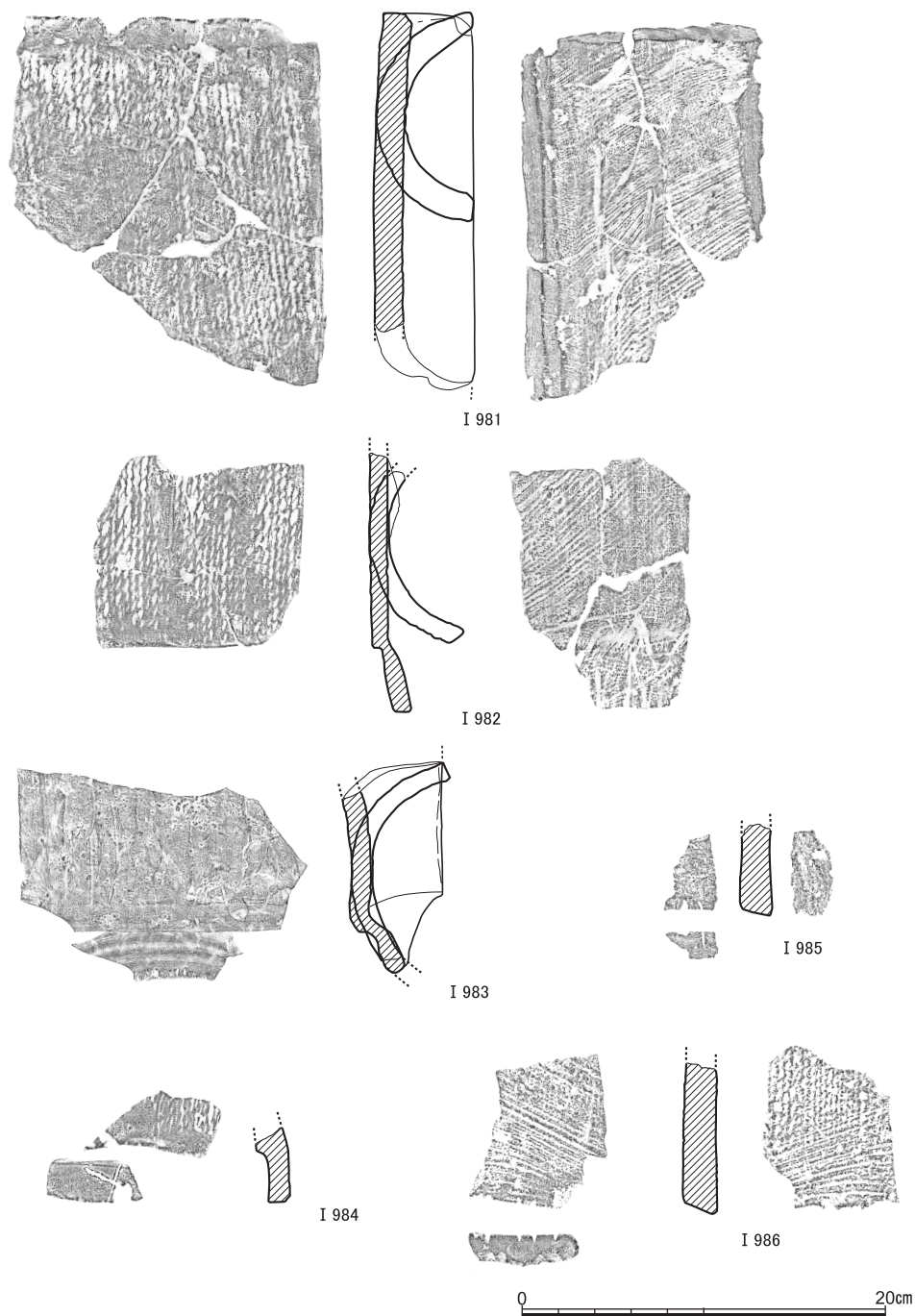


図56 S K 1 出土瓦(2) (I 981～I 984丸瓦, I 985・I 986平瓦)

京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ

表2 軒丸瓦型式別出土点数

型式/ 遺構	SK 1	SK 2	SK 5	SE 5	SE 6	SE 7	SE 13	SE 15	SX14 ・27	SX 10	SX35- 38	遺物溜・ 瓦溜	Pit	黒褐	黒粘	上層 混入	計
M1	1								1		1	2		9	3	3	20
M2								1	3	1		2		4	1	1	13
M3			1						1			1		2			5
M4											1			1		1	3
M5		1										1		2			4
M6									2	1	1	2		2	1		9
M7				1						1		3		1			6
M8												1					1
M9										1							1
M10									1								1
M11												2					2
M12															1		1
M13															1		1
M14														1			1
M15														1			1
M16												1					1
M17												1					1
M18										2		1	3	5	2	1	14
M19				1					1			1		2	1		6
M20												2					2
M21							1										1
M22														1			1
M23															1		1
M24														1			1
M25														1		1	2
M26														2			2
M27												1					1
M28													1				1
M29				1										1			2
M30												1					1
M31														1			1
M32															1		1
M33					1												1
M34																1	1
M35															1		1
M36													1				1
M37									1								1
M38				1						1	1						3
M39		1		1							1			2			5
M40														2			2
M41				1		1						1				4	7
M42														3		1	4
M43																1	1
不詳	4		1	5			3	1	6		3	11	1	37	6	7	85
計	5	2	2	11	1	1	4	2	16	7	8	34	6	81	19	21	220

古代末～中世の遺跡

表3 軒平瓦型式別出土点数（その1）

型式/ 遺構	SK 1	SK 2	SK 5	SE 5	SE 6	SE 7	SE 13	SE 15	SX14 ・27	SX 10	SX35- 38	遺物溜・ 瓦溜	Pit	黒褐	黒粘	上層 混入	計
H1	1						1		7			3		16	2		30
H2								2	2	1		1		1			7
H3	1										1		1	2			5
H4									1					1			2
H5										1				1			2
H6				1													1
H7														1			1
H8															1		1
H9											1						1
H10				1													1
H11																1	1
H12																1	1
H13														1			1
H14																1	1
H15												1					1
H16														2			2
H17					1												1
H18														1			1
H19														1			1
H20												1					1
H21														1			1
H22												1					1
H23									1			2					3
H24												1					1
H25				2					1			2		1	1		7
H26				2								1		3		1	7
H27														2			2
H28												1					1
H29														1			1
H30											1			1			2
H31														1			1
H32											1						1
H33												1					1
H34												1					1
H35														1			1
H36														1			1
H37														1			1
H38															1		1
H39				1													1
H40																1	1
H41														1			1
H42														1			1
H43					1												1
H44												1					1
H45											1						1

表4 軒平瓦型式別出土点数（その2）

型式/ 遺構	SK 1	SK 2	SK 5	SE 5	SE 6	SE 7	SE 13	SE 15	SX14 ・27	SX 10	SX35- 38	遺物溜・ 瓦溜	Pit	黒褐	黒粘	上層 混入	計
H46														1			1
H47										1							1
H48																1	1
H49					1												1
H50														1			1
H51														1			1
H52				1													1
H53				1													1
H54					2						1			2	1	1	7
H55																1	1
H56	1																1
H57	1																1
不詳	4			2			1		2		3	7		18	1	7	45
計	8	0	0	11	5	0	2	2	14	3	9	24	1	65	7	15	166

が記されている。

SK1出土瓦（図54～56） 特殊遺構のSK1は、埋土の上層を中心に瓦や礫などが多数遺棄されていた。軒丸瓦（I971～I973）は小片のみで、型式が判別できるのは丹波産のM1（I971）のみ。軒平瓦（I974～I978）では、播磨産のH3（I974）と丹波産のH1（I977）以外に、京都産とみられる偏行唐草文が2点あり、他の遺構や包含層でも出土していないモチーフであることから、H56（I975）とH57（I976）とした。

こうした軒瓦の破片以外に、遺存の良い丸瓦が複数点出土していることが、他の遺構とは異なる状況として注意される。I979はそのうちの1点で、玉縁部に窺記号「\」が施される（図版33）。同様な記号をもつ玉縁がSK1ではほかに9点確認できる。I980・I981はこうした丸瓦の筒部。I982は玉縁部も含むが窺記号が確認されないもの。I984は玉縁部付近の小片だが窺記号「×」がみられる。以上は黄白色～淡灰色の軟質の焼成だが、I983の丸瓦は須恵質の堅緻な焼成で、播磨産の特徴を示すものである。

平瓦の出土は少量で、窺記号をもつものを呈示する。いずれも端面の凹面側角部に刻みを入れるもので、I985は窺描線とも組み合わせている。I986は3つの軽いタッチの刻みを施している（図版33）。

C：木器・木製品類（図版34～37，図57～63，表5～8）

今回の調査地は、湧水が豊富で湿潤な埋蔵環境に恵まれていたこともあり、多数の木製遺物が遺存していた。そのうち、主要なものは、井戸の水溜に転用されていた曲物2点のほか、SK1-2や井戸SE5の井筒埋土などから出土した祭祀具や各種の部材、編組製品のカゴなどがある。用途不明の部材も多いが、以下、おおむね形態と、そこから想定される機能別に報告する。なお、樹種や素材については第6節と第7節で別途報告している。樹種については図中にも付記した。

曲物（図版34，I987・I988） I987はSE5の水溜に転用されていたもの。わずかに楕円で、内径38.0cm～41.2cm，高さ36.8cm。内側は1枚ものの側板を巻いて重ね、一部分が2列となるように樺皮で縦位に綴じ合わせている。その外側の上下に、籬（たが）となるそれぞれ幅8cmと7cmの板を巻き、側板とは反対側の位置で、同じく一部分2列となるように樺皮で綴じ合わせる。下端に底板を結合するための釘孔（径3mm）が9箇所穿たれてめぐり、7箇所には木釘が残存する。また上縁には凹形の切り込みが2箇所施されている。内面には縦位と斜位のケビキが綴じ合わせ部以外にみられる。側板や籬板の厚みは約5mmの板目材であるが、籬板は綴じ合わせ部位となる片端を薄く加工している。樹種はすべてヒノキ。

I988はSE9の水溜に用いられていたもの。内径29.8cm～31.4cm，高さ22.0cm。仕様はさきのI987と同じで、厚さ3～5mm程度の1枚ものの側板と上下の籬板からなるが、巻いた側板端部の重ね方は逆（向かって右側を手前側とする）となり、樺皮による縦位の綴じ合わせ列も1列である。ただし、上下の籬板の綴じ合わせはともに2列。側板、籬板ともに綴じ合わせで重なる片端を薄く加工している。なお、側板にはべつに1箇所のみ樺皮で綴じた箇所があり、割れを補修したものかと推測される。側板の内側下端は2cm幅程度が薄く削られており、底板をはめ込むための加工と推測される。この薄くなる下端部に底板を結合するための釘孔（径3mm）が5箇所穿たれてめぐり、すべて木釘が残存する。また側板には、下から9cmの位置に20cm程度の間隔を空けて2箇所、径8mm程度の穿孔がある。内面のケビキは縦位の5mm間隔程度で全面密に施される。総じて上記のI987より丁寧な作りであるといえる。なお、外面には墨書があり、上段籬板に横位で「田マ□□」かとみられる。中央付近にも3cm大程度の墨痕、下段籬板にも薄くなった墨痕かと見られる染みが観察される。墨書については別稿において資料紹介している〔伊藤2019〕。側板と籬板の樹種はツガ。

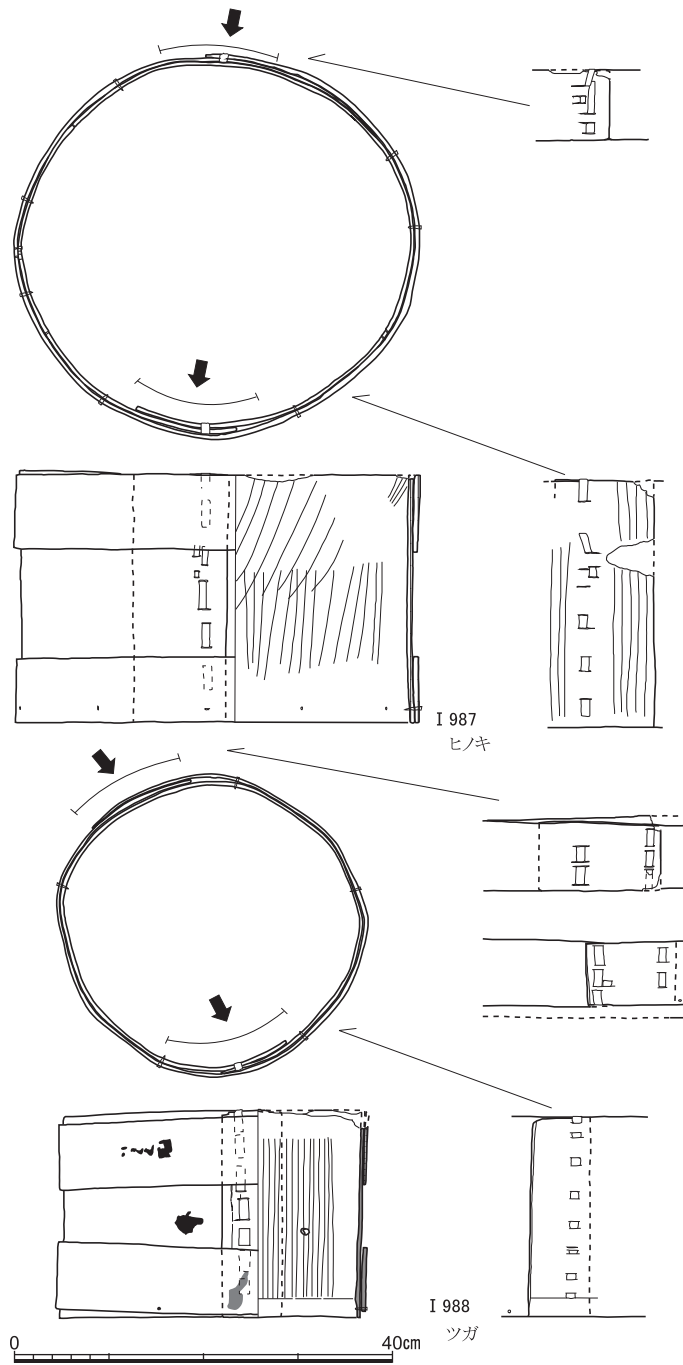


図57 曲物（I 987：SE 5出土，I 988：SE 9出土） 縮尺1/8

円形の板材（I 989・I 990・I 993） I 989は、径14.3cmで厚さ5mmの円盤で、側面に左右2箇所ずつ木釘が打ち込まれる。柄杓など小型曲物の底板であろう。I 990は厚さ2mm程度の薄い円盤形板材の部分。底板あるいは蓋板になるものだろう。I 993は径10cm程度厚さ8mmで、中央に12mm程度の穿孔が施される円盤。用途不明である。

台形の板材（I 994） 上辺が5.5cm下辺が8.7cm高さ4.7cmをはかる台形の板材。形態は小型の四方転びの箱の1面かともいえるが、綴じ孔が存在せず、下辺に向かって薄くなるように作られていることから、楔状の機能を果たすものだったかもしれない。

長大な加工材（I 991・I 992・I 1049） I 991は辺が1cm四方程度の方形で長さ44cmをはかる長大な加工材で、一端の10cmあまりは薄く板状としたうえで、先端を斜めに加工する。祭祀具であろうか。I 992は、先端をわずかに欠くが、一端を尖らすように加工した板材で、残存長34.5cm・幅4.8cm・厚さ1.3cmをはかる。尖らす部分の基部付近に半円形の抉りが1箇所ほどこされている。矢板であろうか。I 1049は、残存長43cmあまり・幅4.5cm・厚さ2cmをはかる板材で、片側を半分ほどの厚さまで薄く削っている。側面にはほぞ穴状のえぐり込みがある。本来建具であったものを加工して転用し、楔状に使用したものであろうか。

小型の棒状・板状製品（I 995～I 1046） 加工されている小型の板材や棒状具をまとめる。明らかに祭祀具と認定できるものから、何らかの構造物の部材とみられるもの、箸や転用された火付け木、楔として構造物の固定に供したかとみられるもの等、さまざまなものが含まれている。

I 995は井戸SE5の底面から出土したもので、長さ8cm・幅2cm・厚さ5mmをはかる。両端を尖らすよう加工した上で両側面に細かなえぐりが施され、卒堵婆状を呈する。I 996は長さ12.5cm・幅1cm・厚さ5mmの細長い板状で、片側は山形に尖らしたうえ側面に細かなえぐりが認められる。これらは明らかに祭祀具といえよう。

I 997～I 1007は、長さ4～15cm程度とさまざまだが、片端を尖らすように加工したり（I 997・I 998）、羽子板状の形態（I 999）を呈するなどの小型の板状品。また、I 1000は又状の加工がみられるほか、I 1001～I 1007は端部を斜めに切り落としている。これらも斉串などに類する祭祀具であった可能性が高いとみられる。

I 1008は凹形の抉りのある小型の板材。なんらかの構造物の部材であろう。

I 1009は1cm角程度の棒状で、片端は破損して折れ曲がる。細い黒色線は墨書の可能性があるが判然としない。

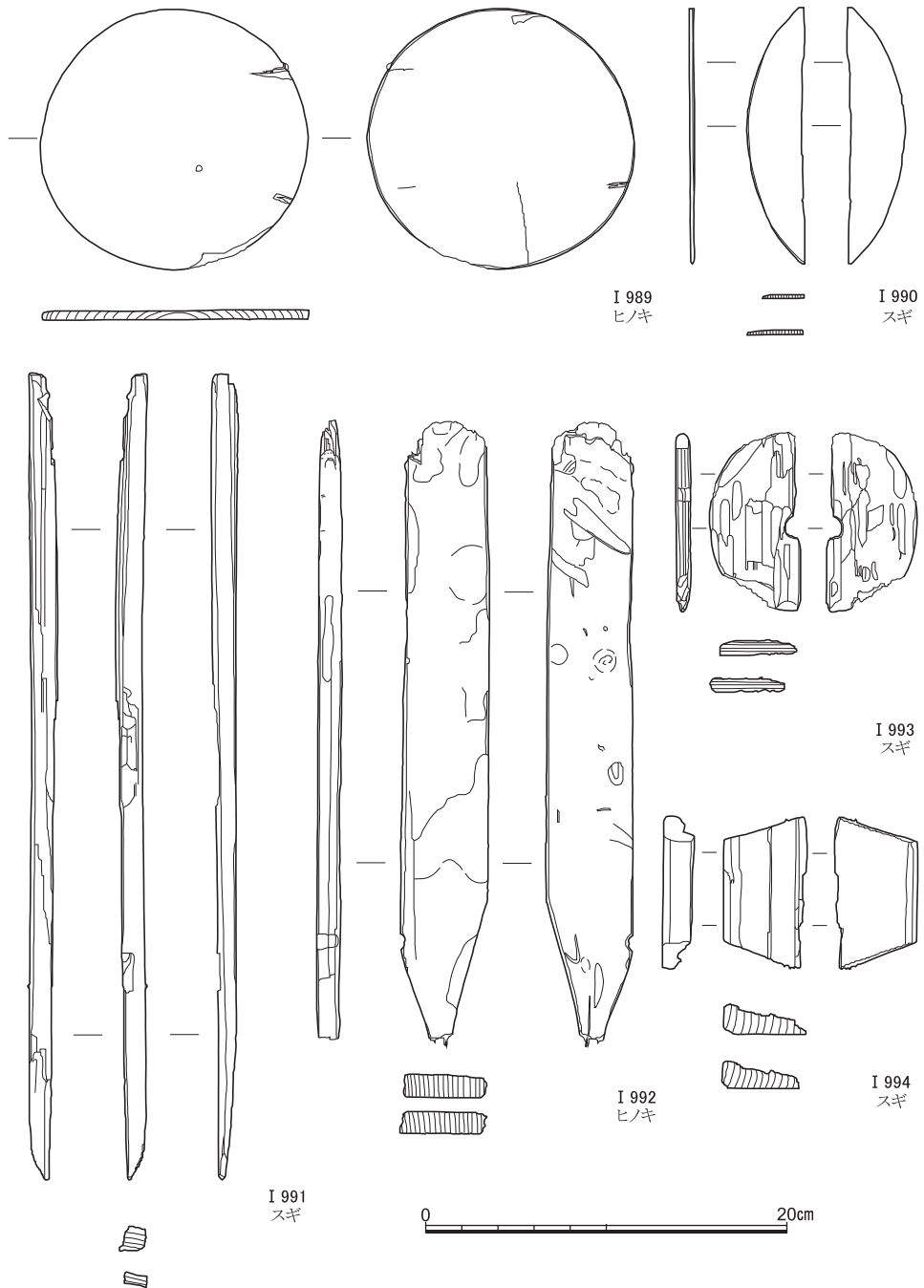


図58 木器・木製品(1) (I 989・I 990：SE 5，I 991・I 993・I 994：SK 1-2埋土，I 992：SX15出土)

古代末～中世の遺跡

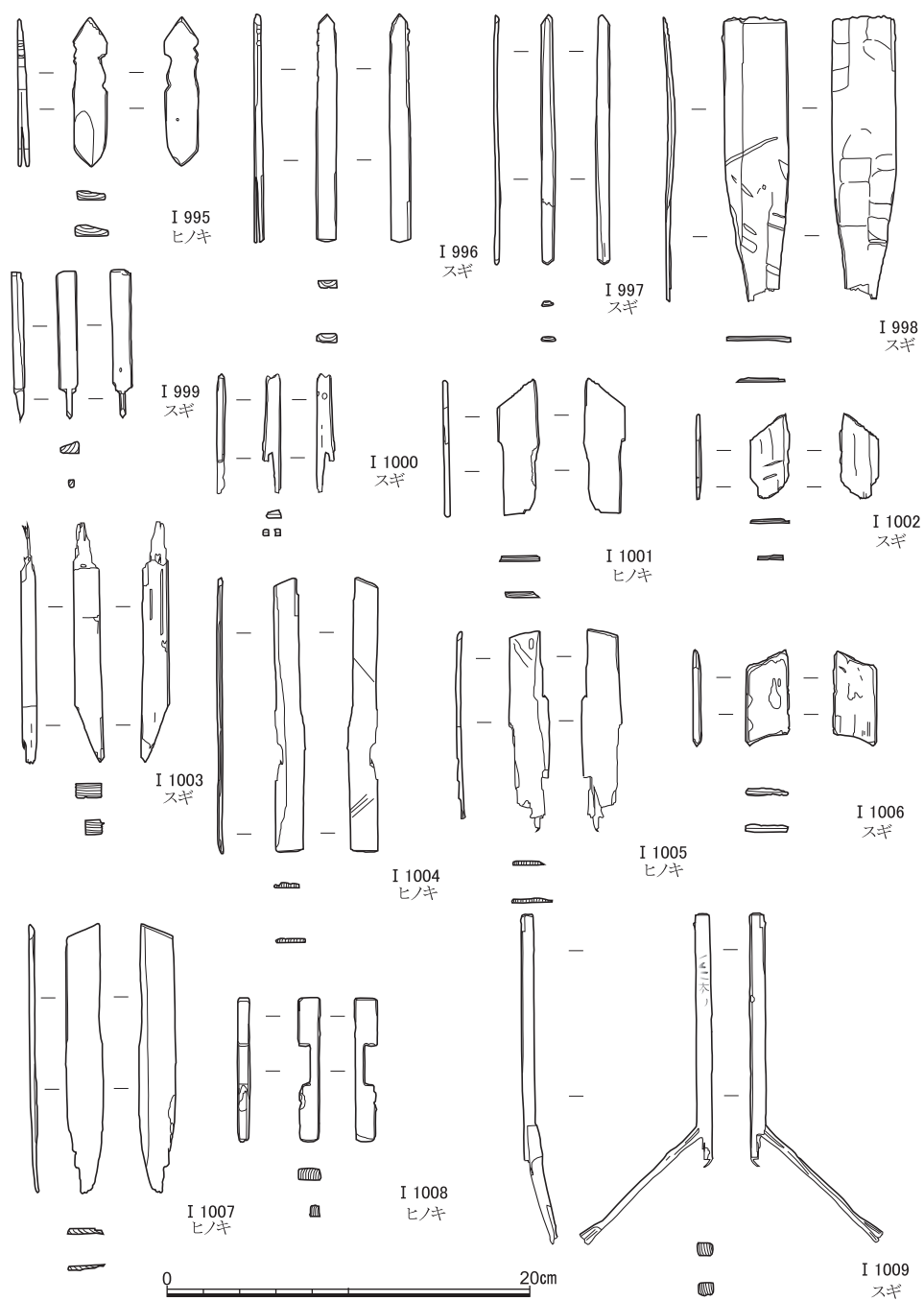


図59 木器・木製品(2) (I 995・I 1001・I 1006: S E 5, I 996～I 1000・I 1002・I 1004・I 1005・I 1007～I 1009: S K 1 - 2 埋土, I 1003: S X 42出土)

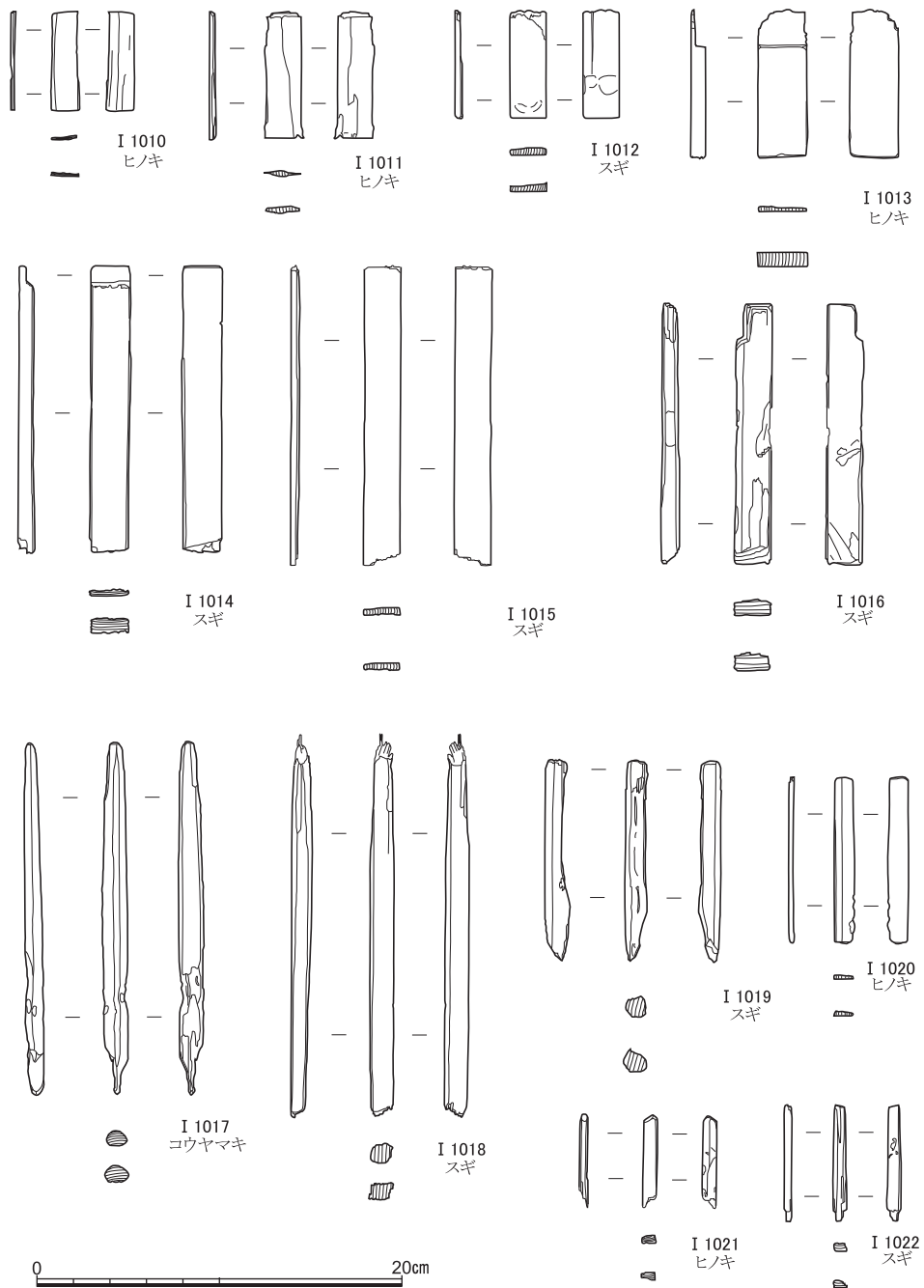


図60 木器・木製品(3) (I 1010: S E 5, I 1011・I 1012・I 1014・I 1015・I 1018～I 1022: S K 1 - 2, I 1013・I 1017: S X 42, I 1016: S K 1 - 1出土)

古代末～中世の遺跡

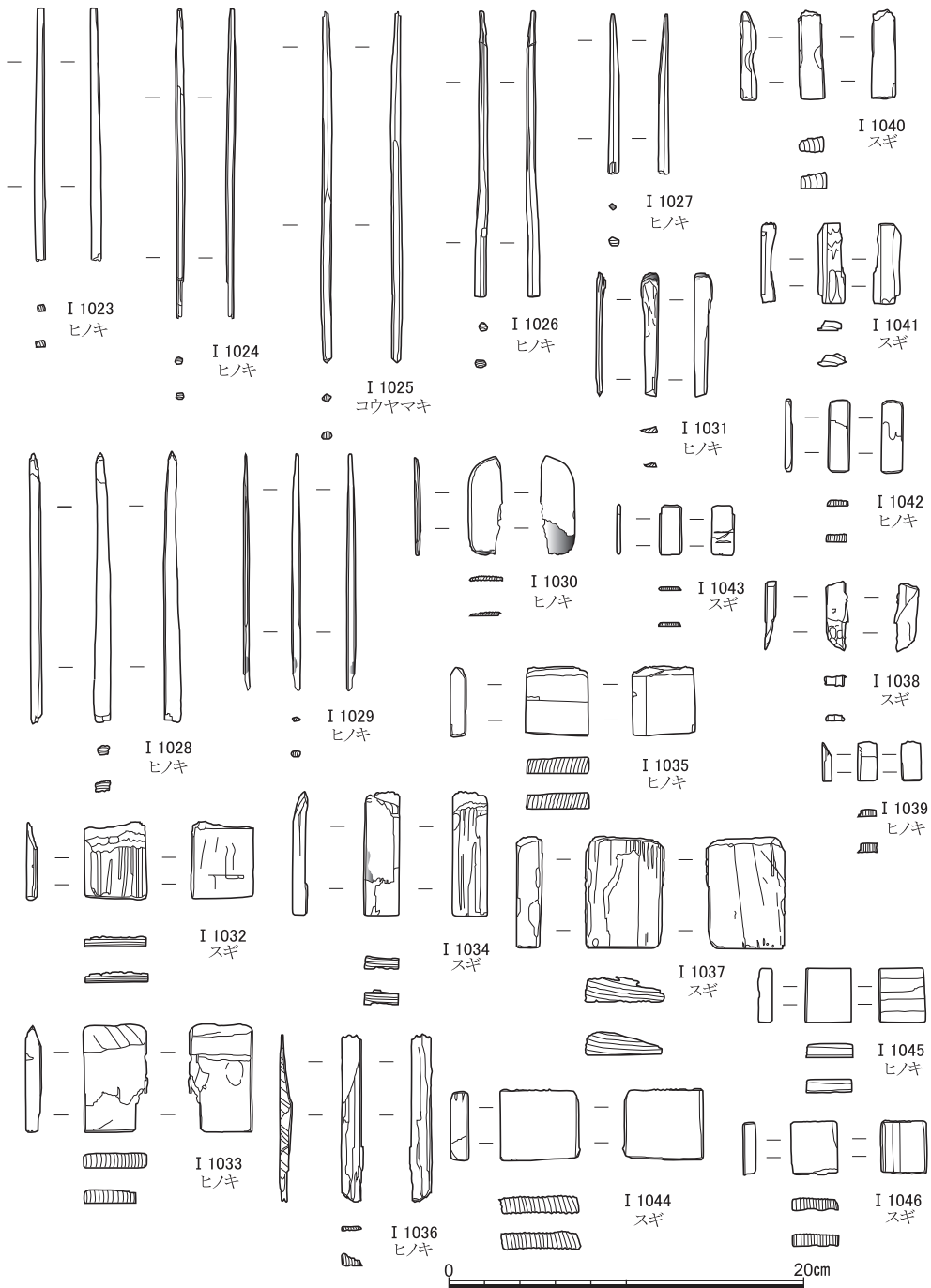


図61 木器・木製品(4) (I 1023～ I 1025・ I 1029・ I 1031～ I 1036・ I 1038・ I 1039・ I 1041～ I 1043・ I 1046: S K 1 - 2, I 1026・ I 1027・ I 1045: S E 5, I 1028・ I 1030: S X 25, I 1037: S K 1 - 1, I 1040・ I 1044: S X 42出土)

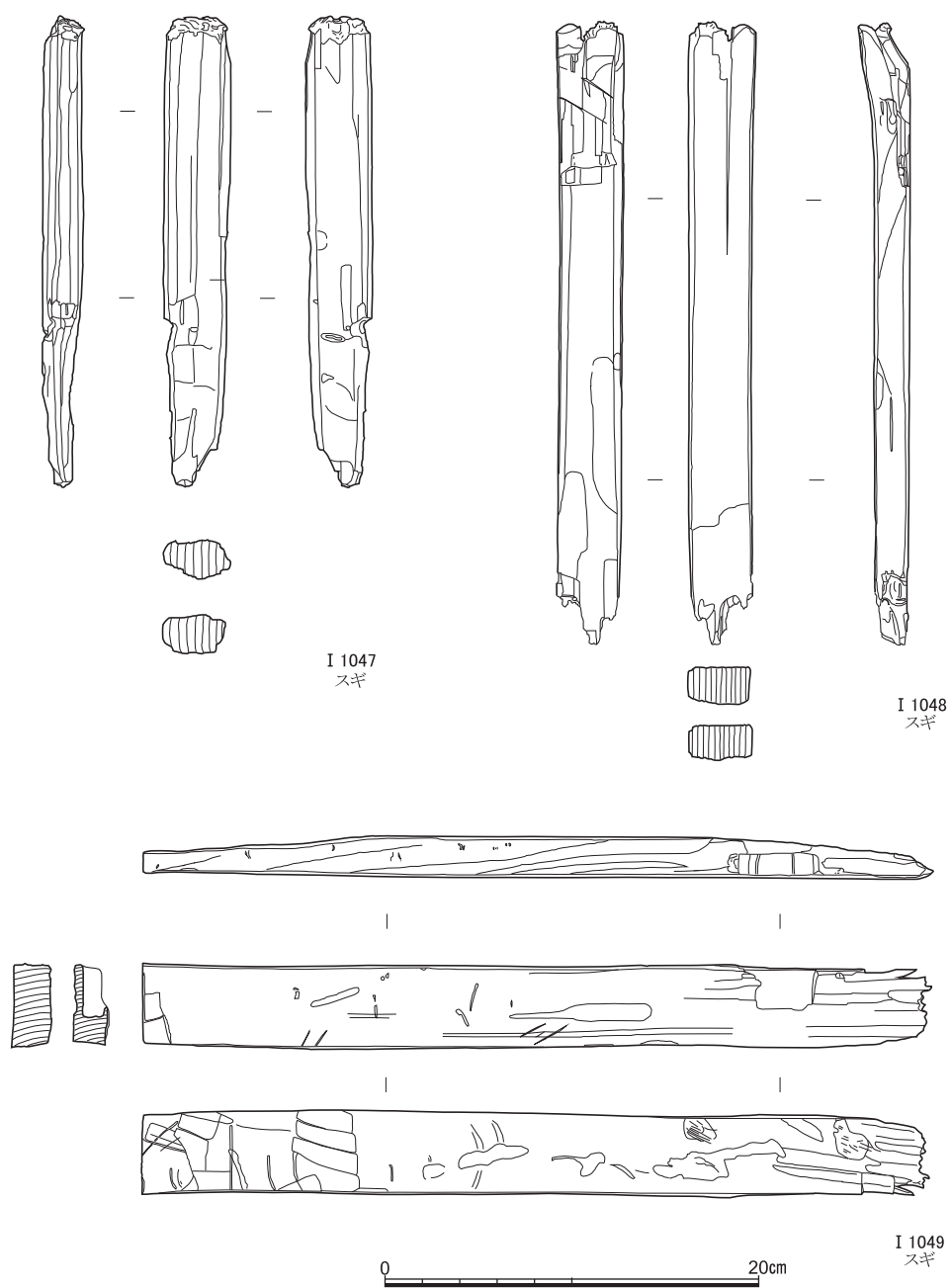


図62 木器・木製品(5) (I 1047・I 1048：S K 1 西側石22下杭，I 1049：S K 1 - 2 出土)

I 1010～I 1016は、片端あるいは両端を直線状に加工している細長い板材。I 1013やI 1014は端部付近を段状に薄く加工して折り取っているかのようなものである。I 1017・I 1018は長さ20cm前後径1cm程度の棒状具。I 1017は、両端が丸みを帯びるとともに、片端は薄く仕上げる。また強く圧迫されたかのようなくぼみがめぐる。I 1019～I 1022は、長さ5～10cm程度の細い棒状や板状製品。I 1019も片面は圧迫されたように窪んでいる。

I 1023～I 1029は箸かとみられる径5mm程度の細長い棒状具。I 1023は片端を薄く仕上げるが、I 1029は片端を尖らせる。I 1028は端部が焼けており、火付け木に転用されたとみられる。I 1030・I 1031も同様に転用された火付け木かとみられ、本来はそれぞれ小型曲物容器の底板ないし蓋と匙状の製品であったものとみられる。

I 1032～I 1046は、楔など構造物に組み合わせて強度を高める用途などに用いられたかと推測される小型の板状部材。幅や長さが4～5cm程度のI 1032～I 1037から2cmに満たないI 1038・I 1039に至るまでいずれも、端部や側面を斜めに加工して嵌め込むようにしている。I 1040～I 1046はこうした加工は見られないが、I 1040・I 1041は組み合わせにともなう凹みが顕著にみられる。I 1042・I 1043は厚さ2mmに満たない薄板である。I 1044～I 1046は、方形に四辺をしっかりと加工している。

石22下の杭（I 1047・I 1048） S K 1の東西軸に相当する位置に西接して置かれた石22の下部には2本の木杭が打ち込まれていた（図版8-3）。I 1047は北側の杭で、径3.5cm。頂部は潰れて荒れており、打ち込まれた側はやや細く削り出されている。削り出される部位の上端に穿孔がある。I 1048は南側の杭で、幅3.5cm厚さ2cmの板状であり、頂部は中央部で裂けている。

S E 5井筒内出土編組製品（I 1050） 井戸S E 5井筒内の中層で検出された編組製品のカゴ（図版10-3，図63）。土圧による崩壊で折れてせり出している下から2段目の横棧木に圧着した状態で遺存していた。井戸の廃絶にともなう埋め立て時に、土砂や他の遺物とともに遺棄されたものだろう。口縁が欠落した体部から底部にかけての部分とみられ、残存する範囲で径40cm程度。第7節で素材と技法について詳述されるが、タケ亜科で笹類の可能性が指摘されている。同時に出土している土師器皿類から12世紀後葉～13世紀前葉に比定され、古代以降のカゴ類の出土報告例はきわめて少ないとされるなかで〔堀川2011〕、貴重な事例が追加されたといえる。



図63 S E 5 井筒内編組製品出土状況（上が北・上段は写真からの図化） 縮尺約1/5

4 古墳時代以前の遺跡

(1) 遺 構 (図版15・16, 図64)

遺構・遺物の検出状況 調査地東半では、黒色粘質土中において弥生時代末～古墳時代前期の土器が古代の遺物と混在して多く出土する。また、その下部の砂層やシルト層になると古墳時代以前の遺物のみの出土となる。シルト層には自然木など有機物が多量に遺存する湿地状の様相が観察され、調査区中央の北壁壁面からは板状木器（I 1264）が得られた（図版16-7）。当該遺物については次節で詳述する。流路S R 1は、このような谷状の低地帯が古墳期にかけて埋積していく過程で最終的に形成された流れであろう。そして、調査区東北辺では、このS R 1上面や埋積砂層中で残りの良い土器が一括出土した（S X 31～34）。ほか不定形な土坑S X 44・45からも多数の遺物出土があったが、少量の古代の遺物が混在しており、本来は土器集中だった場所が後世に攪拌されたものとみられる。これらの地点より南方においても、S R 1の東側一帯においては、古代以降の遺構や包含層に混在する弥生時代末～古墳時代前期の土器が急激に増加する。以上の状況は、調査地北方～東方にかけての微高地上に集落が展開していることを推測させる。

流路S R 1 上述したように、調査区東北隅から南南西方向への流れによるとみられる砂層の堆積範囲。北壁付近では幅2 m深さ40cm程度に明瞭に把握することができるが、南方へ向かうほど幅が拡大するとともに浅く不鮮明になっている。北壁付近では、東岸沿いに遺存良好な土器の一括出土がまとまる傾向があるが（土器集中S X 31～33, 図版15-3）、流路の西肩となっているシルト層上面からも同様な一括出土がみられる（S X 34, 図版16-5）。下部のシルト層も古墳時代前期までに低地に堆積していたたものであり、S R 1の運ぶ砂層によって埋積がさらに進行した、と理解されよう。

S X 31 (図版16-1・2) 北壁際で、黒色粘質土の下部からS R 1上面にかけて、土師器甕（I 1051）の破片が折り重なるように集積していた。東方の微高地より遺棄ないし転落してきたものであろう。

S X 32・33 (図版16-3・4) 調査区北東隅の、S R 1東岸の斜面沿いに連なるように複数個体の破片（I 1052～I 1057）が集積して一括出土し、北側のまとまりよりS X 32-A～Cとして3つのまとまりで取り上げた（図版16-3）。さらに、その下部からも破片のまとまり（I 1058）が検出され、S X 33として取り上げた（同4）。これらの残存度はさまざまであるが摩滅はほとんどみられず、やはり東方の至近の場所から転落ないし

京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ

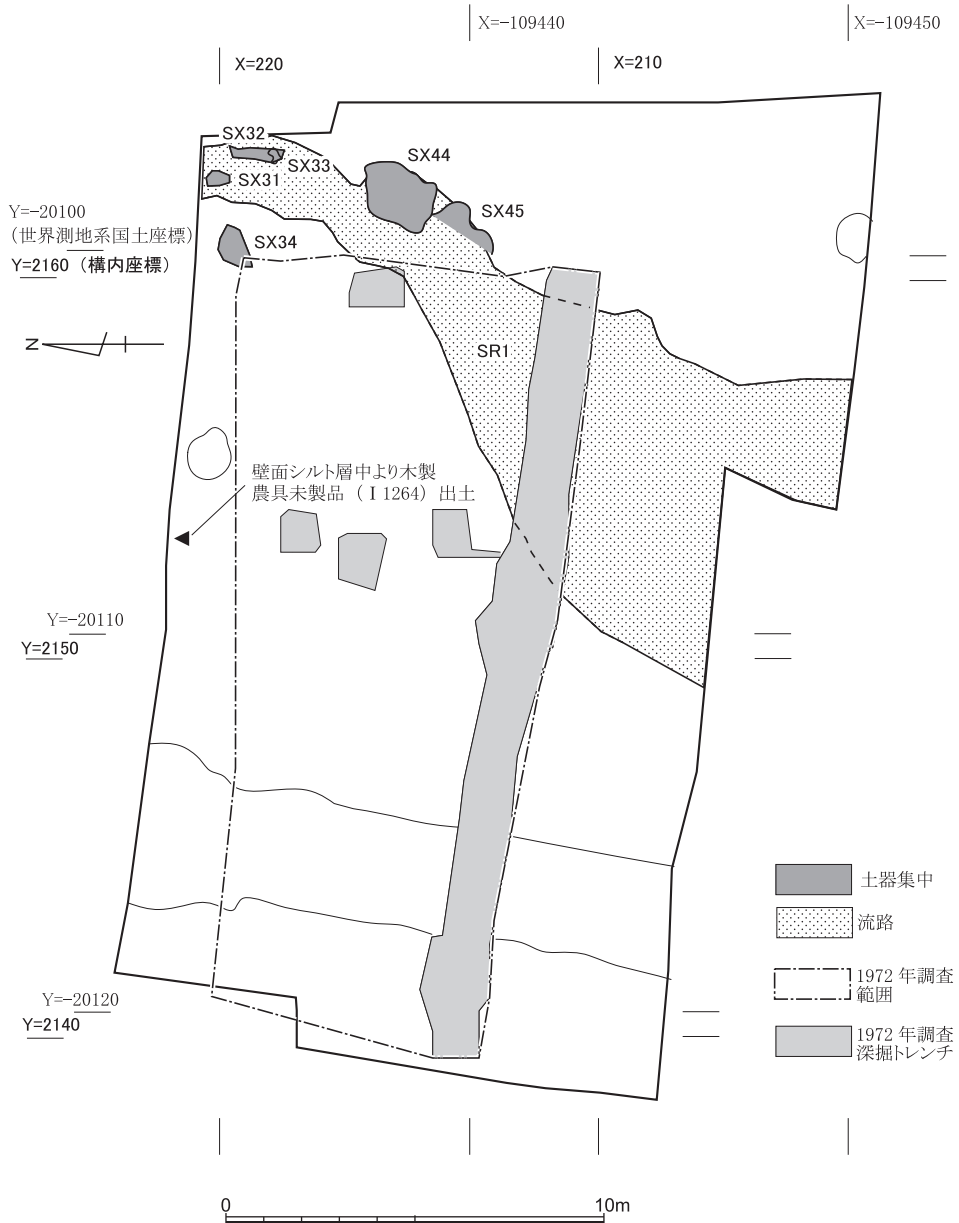


図64 弥生～古墳時代の遺構 縮尺1/200

遺棄されたものであろう。

S X34 (図版16-5・6) S R1の西肩となるシルト層上面で複数個体の破片 (I 1059~I 1066) がまとまって出土した。東に下る流路斜面上の1m四方程度の範囲に摩滅していない破片が密集しており、至近の場所より遺棄されたものとみられる。

(2) 遺物 (図版38~42, 図65~75)

土器集中S X31~34とS X45から出土したものは、以下それぞれ遺構別に呈示する。それ以外は全体を一括して、おおむね器種ごとにまとめて呈示している。なお、多くが調査区東半の黒色粘質土の出土だが、それより上部の包含層や遺構から出土しているものは「上層混入」としている。

S X31出土遺物 (I 1051) 短く外反する口縁から頸部にかけて弱く「く」字状にくびれる形態の甕。胴部外面は刷毛調整だが、著しく煤が付着しており、大半が撫で調整される内面も下半に黒色物が付着している。胴部上半に焼成後穿孔の可能性のある欠失部分があるが、被熱による剝離と破損のいずれかとも決め難い。

S X32出土遺物 (I 1052~I 1057) I 1052も口縁部が短く外反する甕の上半部。厚手の器壁で、叩き調整をほぼ消すような外面の縦位の粗い刷毛調整が特徴的である。内面は細かな横位の刷毛調整。口唇部を軽く押捺するかのようにつまんでいる。I 1053は壺の頸部から胴部にかけてで、外面は全面丁寧に横位の篋磨き調整される。頸部付近に横撫でによる浅い凹線状の窪みがめぐるが、突帯が剝離した痕跡かもしれない。胎土中にシャモットを顕著に含有している。I 1054は、頸部から口縁にかけて強く外反する形態の小型甕で、口縁端部は横撫でされて唇部が短くたちあがる。薄手の器壁で茶褐色の色調を呈し、胎土中に雲母が目立つなど、他の個体と特徴を異にする。外面は横位の刷毛調整、内面は撫で調整。I 1055は口縁が短く斜め上方にたちあがる受け口状口縁の甕。外面は口縁をのぞく全面に煤が付着しているが、右上がりの叩き調整ののち斜位の刷毛調整。内面は撫で調整。I 1056も受け口状口縁の甕。いわゆる近江型甕の典型だが、砂粒を多く含む胎土で、淡い黄白色を基調とする色調からみて山城産と思われる。櫛による刺突列と直線文や波状文を交互にめぐらしており、胴部は内外面とも刷毛調整。この甕にも胴部中央に焼成後の小さな穿孔かとみられる破損が確認できる (図版38)。I 1057は小型の鉢。口縁は直立する受け口状に近い形態で、頸部には櫛描直線文が一条めぐる。外面の下半は磨き調整され、内面は頸部付近のみ横位の刷毛調整される。底部と胴部の境に成形時の明瞭な段差による接合痕が観察され、分割成形であることがわかる。

S X33出土遺物 (I 1058) 頸部から口縁にかけて直立した後短く外反する形態の甕。口縁端部は、篋による刻み目がめぐる。外面は細かな縦位の刷毛調整、内面は撫で調整する。

S X34出土遺物 (I 1059～I 1066) I 1059は、横撫で調整される口縁が短く上方にたちあがる受け口状口縁甕。口唇部は強い横撫でによってわずかに外方へ肥厚気味である。厚手の器壁で胴部細かな斜位の刷毛調整、内面は一部に横位の刷毛調整がみられるほかは撫で調整。I 1060も同種の形態の甕だが、各部位の破片は多数あるが接合率が悪く、下半部の器形は想定復元している。器壁はやや薄手で、口縁の屈曲部外面に櫛歯による細かな刺突がめぐり、胴部上半は、櫛描直線文をめぐらした上に刺突列2帯を重ねている。また外面は被熱による煤の付着が著しく、内面下半も黒変している。調整は内外面とも浅く流れるような横位の刷毛調整である。I 1061は、強く張る胴部と斜め上方へと立ち上がる口縁～頸部をもつ短頸壺。口縁端部は強く横撫でされて外方へわずかに肥厚するとともに、ごく弱く受け口状を指向している。厚手の器壁だが外面下半は被熱により煤の付着が著しい。ただし内面には調理痕跡はない。内外とも刷毛目調整ののちほとんどが撫で消されている。短かく突出気味の底部は凹み底である。I 1062は、受け口状口縁の甕。受け口部の屈曲はなめらかで、側面に櫛歯による刺突列がめぐる。また頸部に直線文と刺突列がめぐる。I 1063は短く外反する口縁部の小破片で、短頸壺の口縁部かとみられる。I 1064はきわめて薄い器壁の素縁の口縁部片。小型の鉢ないし短頸壺の口縁部であろう。I 1065・I 1066は短く突出する底部。前者は内面に蜘蛛の巣状の刷毛目調整がみられる。

S X45出土遺物 (I 1067) 頸部から短く外反する口縁をもつ甕で、口唇部は横撫でによりわずかに上方へ立ち上がる。外面は右上がりの細い叩き調整のち粗い斜位方向の刷毛調整であるが、胴部は被熱により煤の付着が著しい。また内面は、全面平滑になっているが、胴部下半～底面にかけて全面黒色物が付着している。胎土には大粒の石英砂粒の混入が著しい。

受け口状口縁の甕・鉢類 (I 1068～I 1101) 全形のわかるものは乏しいことから、受け口状を呈する口縁をもつ甕や鉢をまとめて呈示した。細部は多様な変異があるが、主体は短く斜め上方に立ち上がるもので、側面に櫛歯の刺突列を施すものが多い。それらは頸部にも刺突列と直線文を施すのが通有である。I 1068は、受け口の屈曲部に篋刻みをおこない、頸部に直線文をめぐらす。器壁は厚く、口縁端部は強い横撫でで凹線状に窪んでいる。内面の頸部上端付近に横位の軽い篋削りが観察できることが注目され、山城産では

古墳時代以前の遺跡

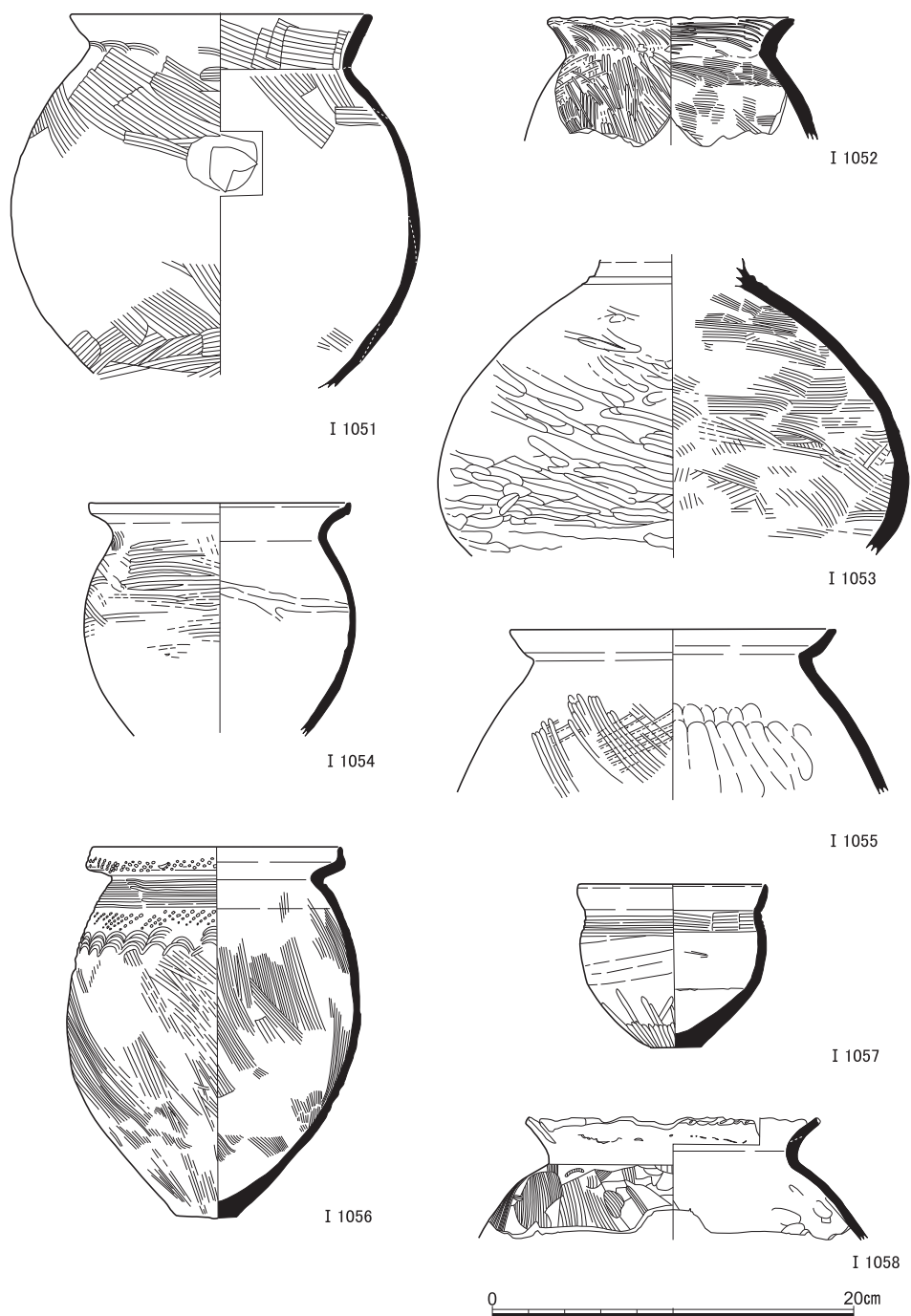


図65 弥生～古墳時代の遺物(1) (I 1051 : S X31, I 1052～I 1057 : S X32, I 1058 : S X33出土)

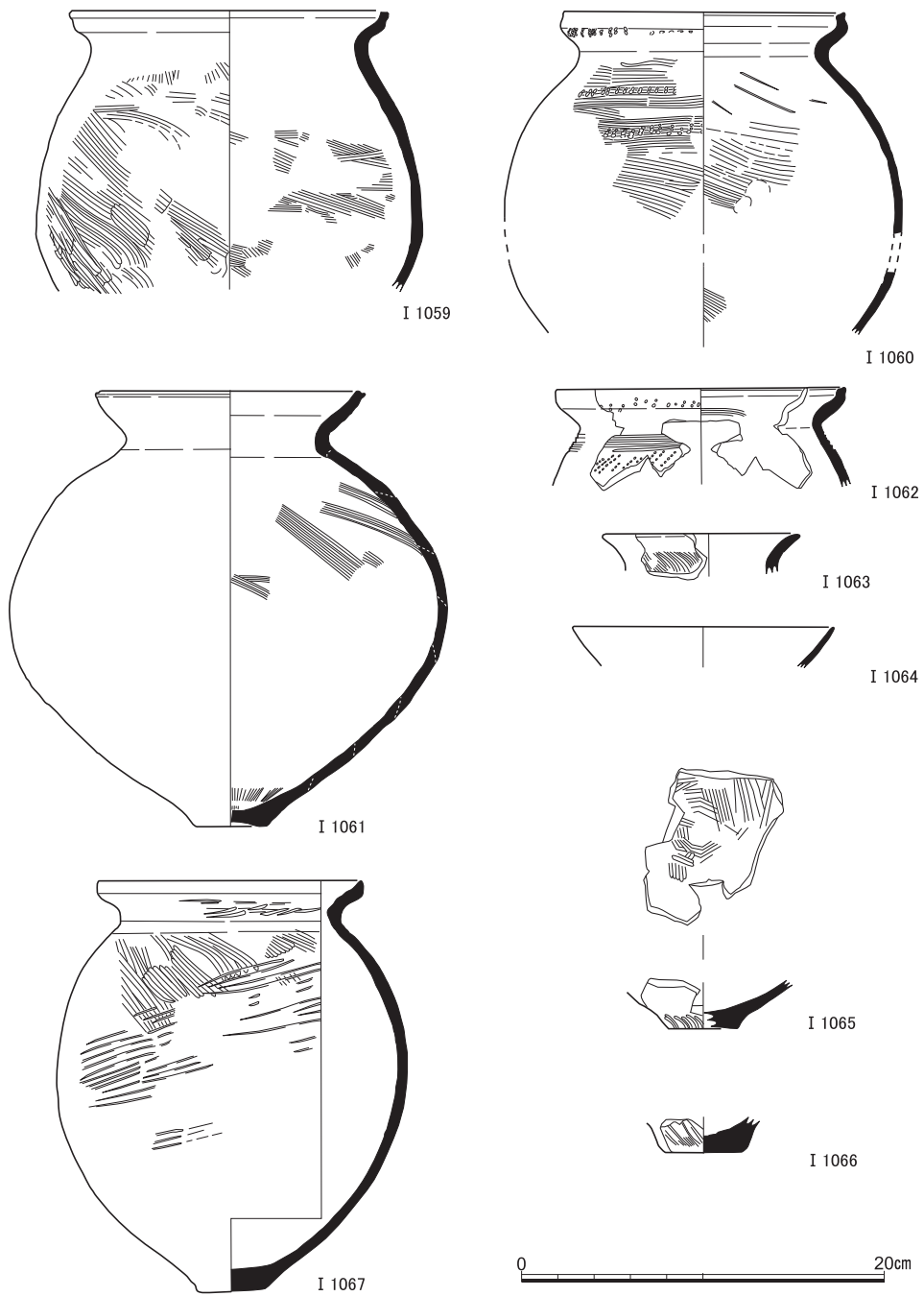


図66 弥生～古墳時代の遺物(2) (I 1059～1066 : S X34, I 1067 : S X45出土)

古墳時代以前の遺跡

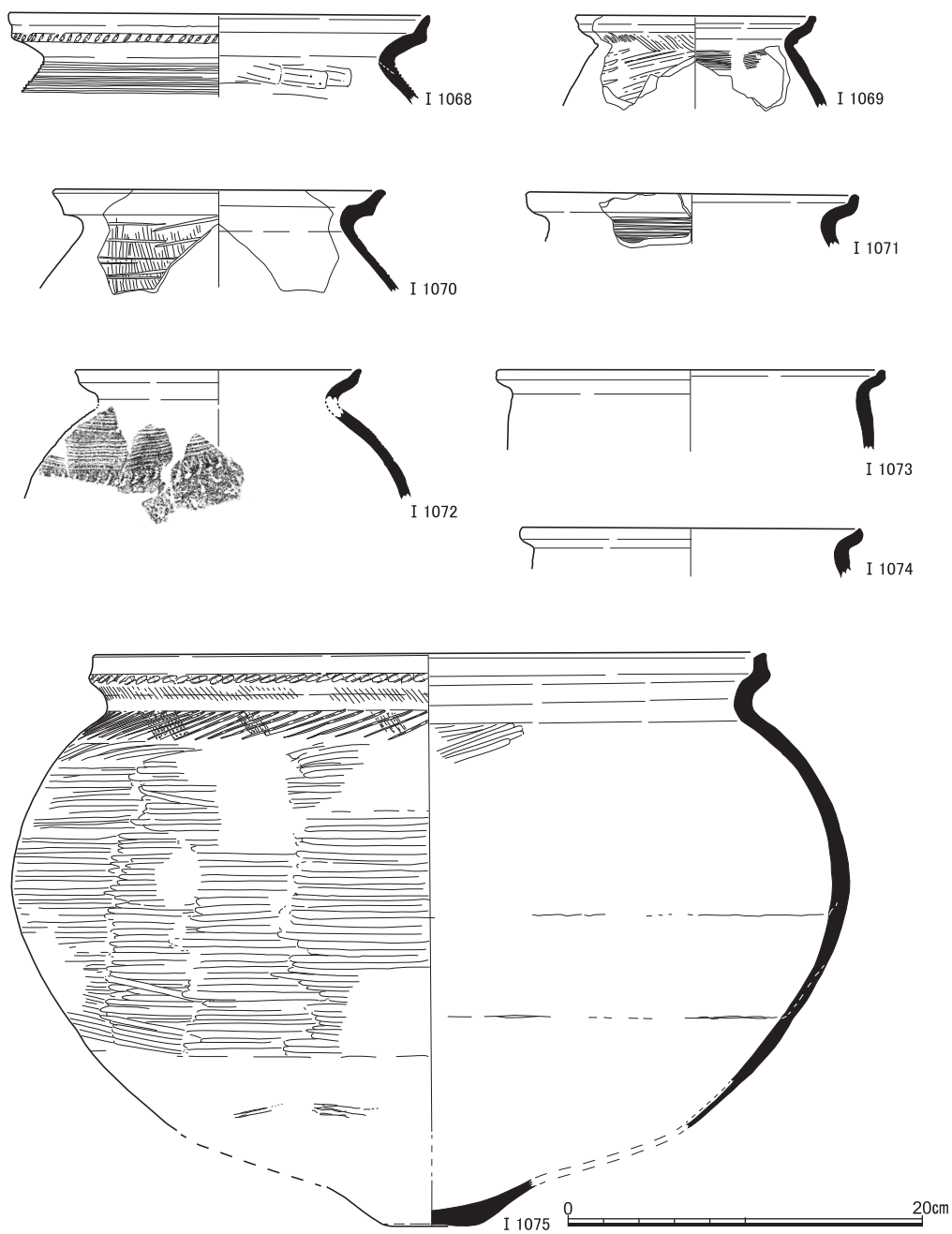


図67 弥生～古墳時代の遺物(3) (I 1074黒褐色土, ほかは黒色粘質土出土)

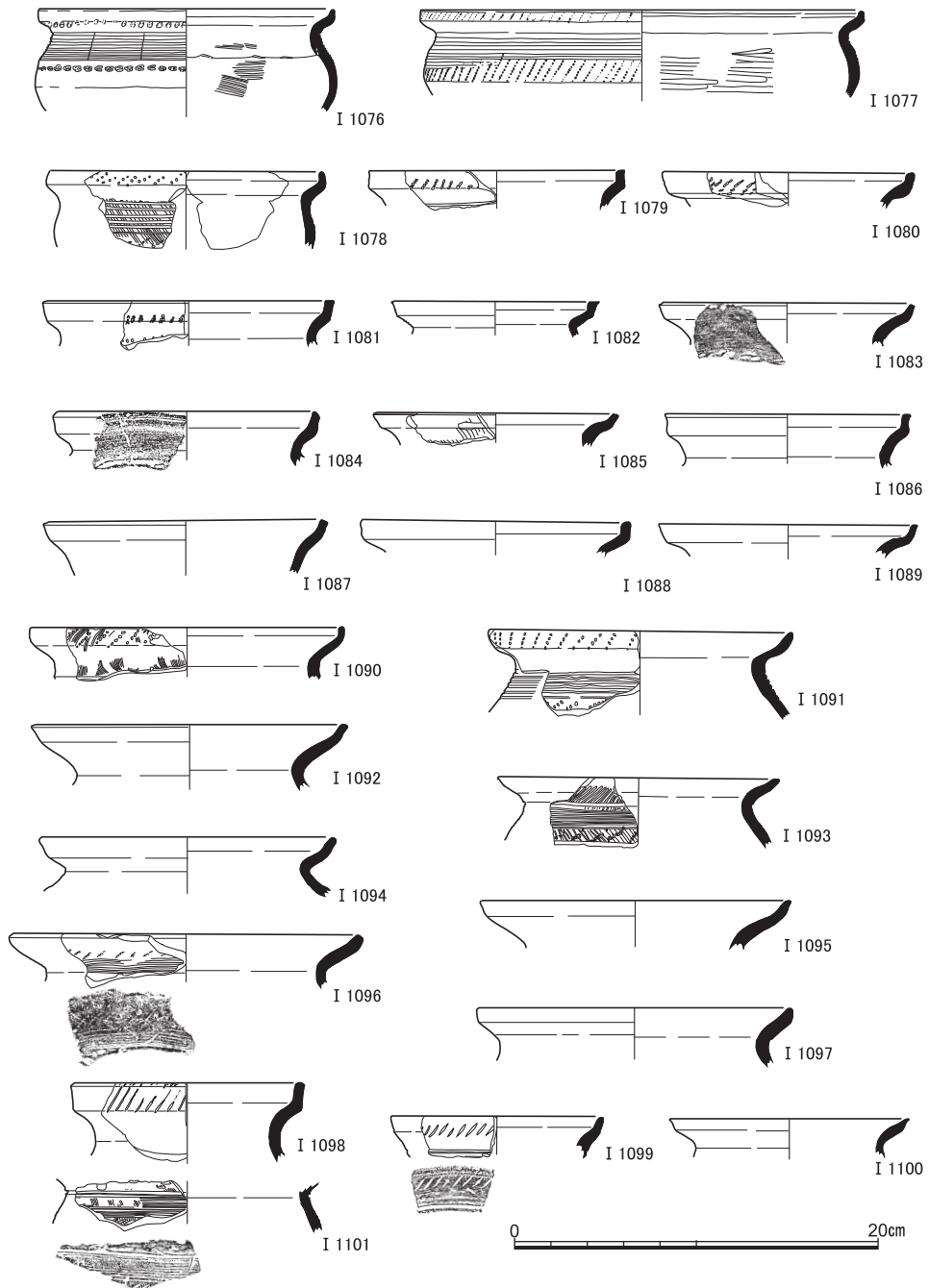


図68 弥生～古墳時代の遺物(4) (I 1076・I 1095上層混入, I 1078・I 1089・I 1090黒褐色土, I 1092下層シルト, I 1093・I 1098・I 1101 S R 1下層砂層, ほかは黒色粘質土出土)

古墳時代以前の遺跡

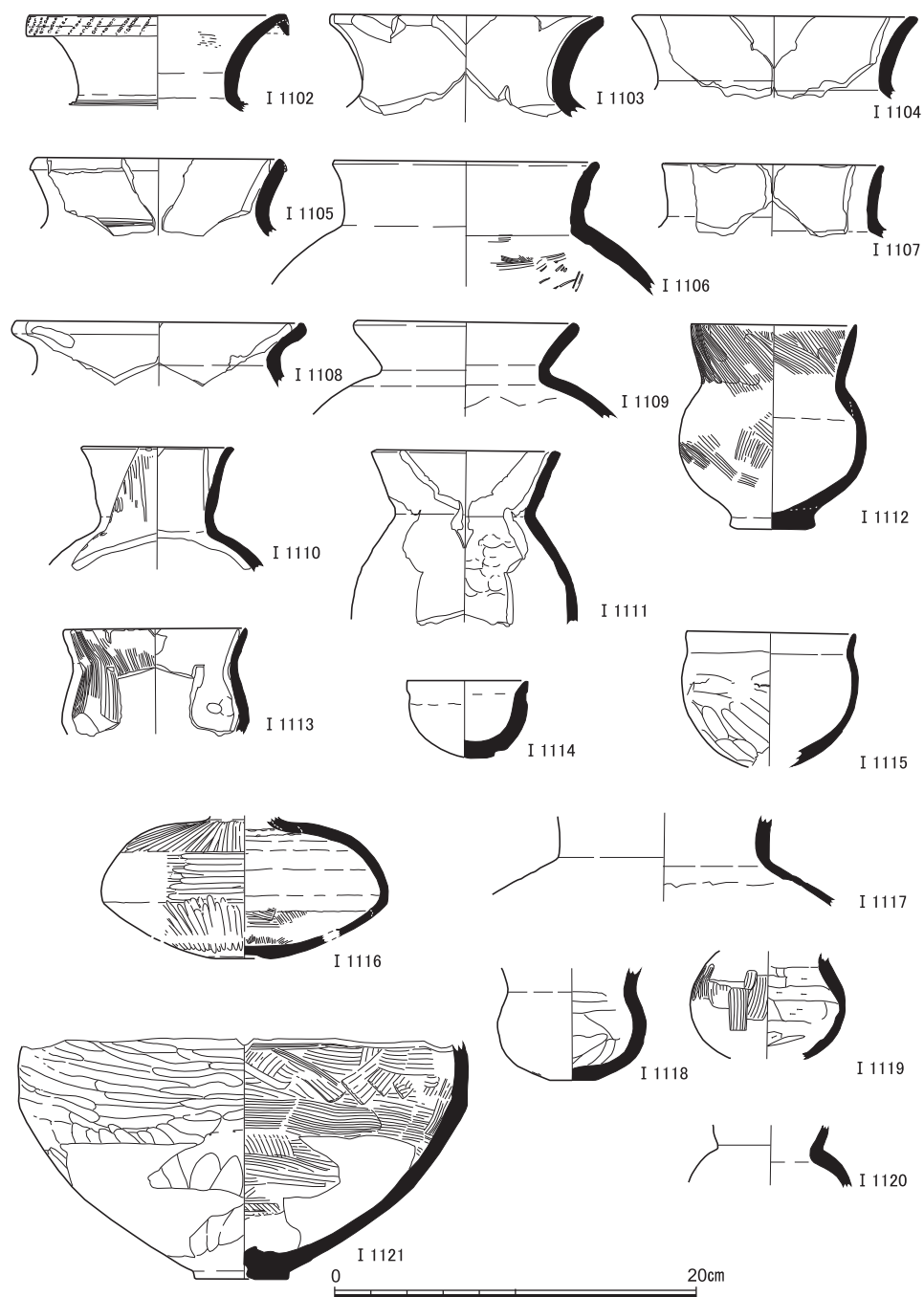


図69 弥生～古墳時代の遺物(5) (I 1108黒褐色土, I 1114S X45, I 1105・I 1110・I 1113SR 1下層砂層, I 1117下層シルト層, ほかは黒色粘質土出土)

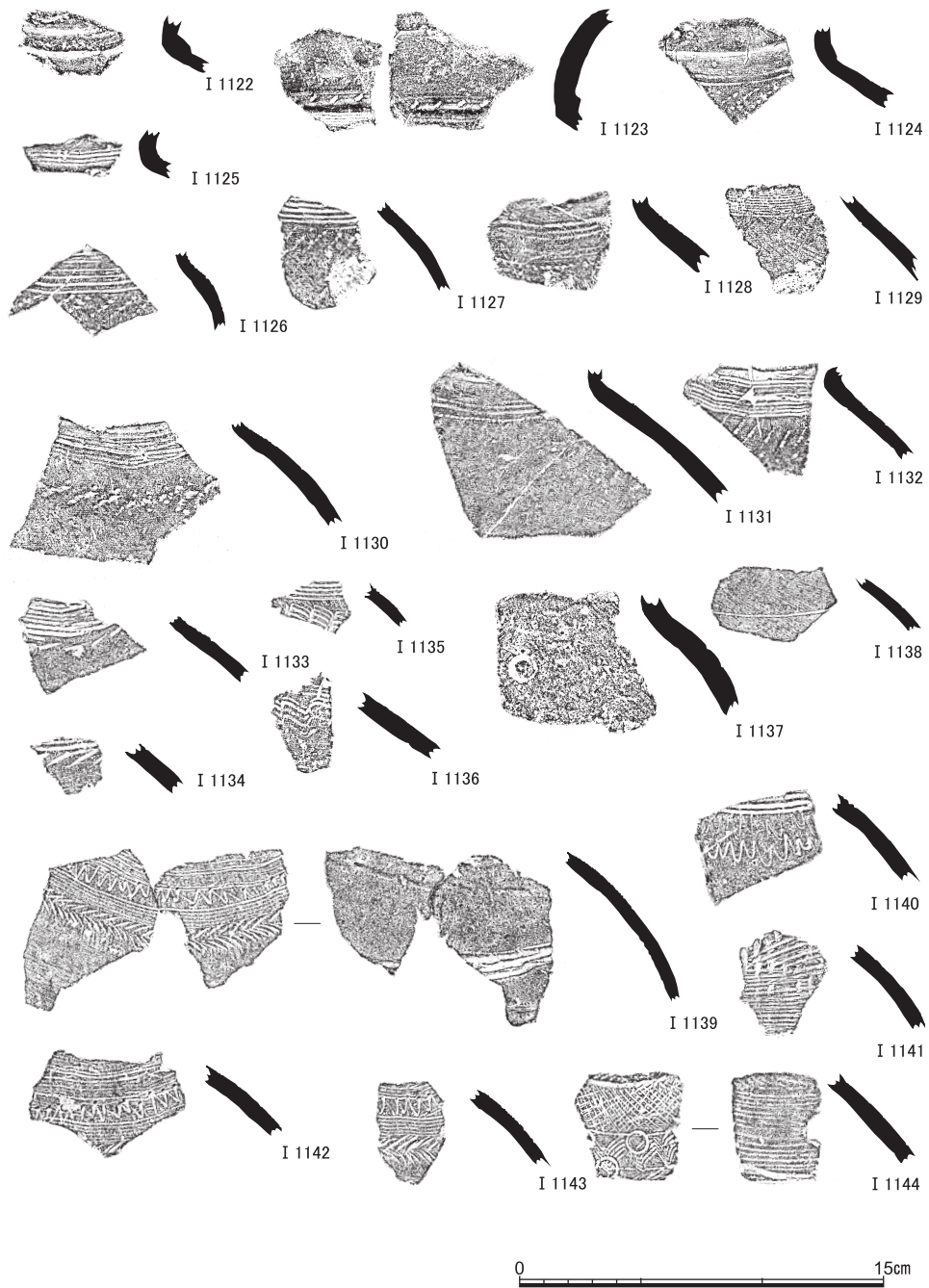


図70 弥生～古墳時代の遺物(6) (I 1124・I 1135黒褐色土, I 1127 S X34, I 1133・I 1134・I 1137・I 1138 S R 1 下層砂層, I 1132下層シルト層, ほかは黒色粘質土出土) 縮尺1/3

古墳時代以前の遺跡

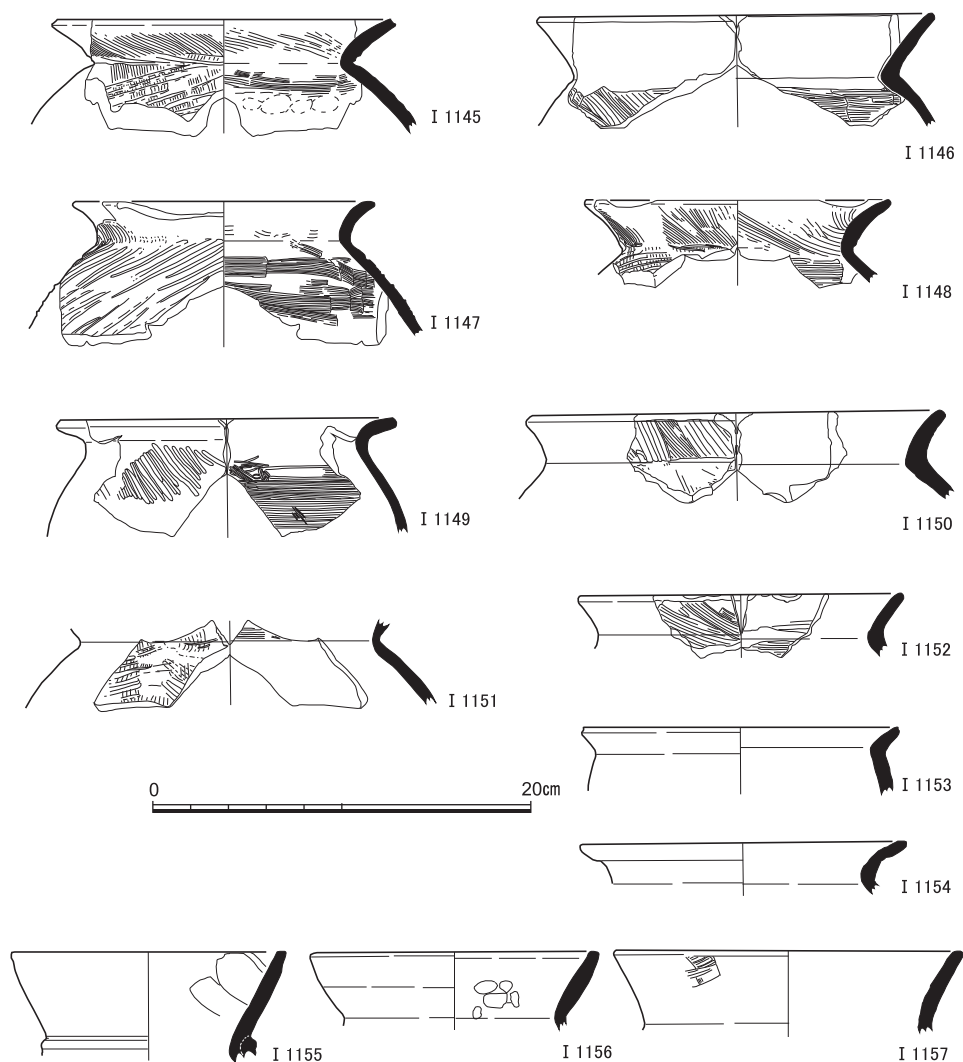


図71 弥生～古墳時代の遺物(7) (I 1148・I 1153・I 1155黒褐色土, I 1151上層混入, ほか黒色粘質土出土)

ない可能性も考えられる。I 1069は、胴部の右上がりの粗い叩き調整が頸部付近まで及んでいる。一方、I 1070は刷毛調整の地の上面に不揃いな2条単位程度の櫛描文がめぐるのである。I 1075は大型の鉢あるいは短頸壺とも呼べる器形で、口縁屈曲部下端を篋刻みするほか、頸部にも篋描斜線文がめぐっている。器壁は厚く、胴部は全面横位の丁寧な磨き調整、底部付近のみ磨きが不十分で、地文の刷毛調整がのぞいている。

I 1076～I 1078は、小型の鉢であることがわかるもので、装飾は直線と櫛歯刺突列から

なるが、I 1076は、2～3条単位の小さな櫛歯による刺突をめぐらしている。I 1079以下は、口縁部のみのものがほとんどだが、I 1086やI 1098などのように頸部から口縁にかけての屈曲のゆるやかなものと、それ以外の屈曲の急なものがある。

広口壺・直口壺等（I 1102～I 1113） 器形の全容がわかる壺は少ない。口縁が大きく開く広口の壺や、斜め上方へと直線的に開く短頸や長頸の直口の壺に関連する一群をまとめた。I 1102は、外反する口縁の端部が、貼り付けによって垂下する面を成し、櫛歯の刺突をめぐらしている広口壺。頸部には櫛描直線文がめぐることがわかる。I 1103～I 1109は、短頸の広口壺と呼べるもので、I 1105の頸部に櫛描直線文が確認できる以外は、無文のようである。I 1106は厚手の器壁で、砂粒を多く含む胎土で赤褐色を呈しており、黄白色～黄褐色の他の個体とはやや異質である。I 1109は頸部が「く」字状に強くくびれる形態となる。I 1110～I 1113は、小型の長頸壺や短頸壺。I 1110・I 1111は外面を磨きや撫で調整、I 1112・I 1113は縦位に刷毛調整している。I 1113は薄手の器壁で器高10cmに満たない小型品になるとみられる。

小型無文鉢・壺（I 1114・I 1115・I 1118～I 1120） I 1114・I 1115は小型で丸底の鉢で、I 1114は厚手で手づくね風のつくり、I 1115は薄手で口縁端部を横撫でし、外面を粗い篋磨きで平滑としている。I 1118～I 1120は同種の特徴をもつ小型の壺とみられるが、胎土は精良ではない。I 1119は外面を刷毛調整、内面を横位に篋削り調整する。

長頸壺（I 1116） 白色の精良な胎土で、扁平な胴部の全面が篋磨き調整される。底部は凹み底となっている。頸部より上を欠いているが、細頸の長頸壺となるものだろう。

壺胴部（I 1121） 壺の胴部以下とみられ、突出する底部の中央に窪みがある。外面全面が横位に粗く篋磨き調整されるが、底部付近は被熱によるものか赤変して表面が荒れている。内面は横位の刷毛目調整であるが、底部付近の器表面は剝落している。

有文の頸部・胴部片（I 1122～I 1144） 頸部や胴部の破片で装飾がみられるものを呈示した。I 1122・I 1123は壺頸部の貼り付け突帯で、I 1123は突帯上ではなく突帯に沿った上側に刺突列をめぐらしている。ほかは、おもには壺の胴部上半にみられる櫛描文や篋描による鋸歯や刺突文である。

頸部「く」字状の無文甕（I 1145～I 1154） I 1145・I 1147・I 1148・I 1151は外面を叩き調整、ほかは刷毛調整の甕で、受け口状の口縁形態ではないもの。おおむね頸部から「く」字状に口縁部が大きく外反するが、I 1149のように屈曲が丸みを帯びるものもある。

その他の壺口縁部（I 1155～I 1157） やや内湾気味に斜め上方へと立ち上がる口縁部。I 1155は頸部に突帯がめぐっている。球形の胴部にこうした口頸部がつく短頸壺となるものだろう。

高杯（I 1158～I 1181） 全容がわかるものはI 1161のみで、深い皿形の杯部で口縁部は大きく外反して開く。中空の脚部も裾は扁平に近くなるほど大きく開いている。器壁は薄手で、透かし穴をもたない。そのほかは、杯部と脚部それぞれの破片が多数あり、皿形の杯部では厚手で口縁端部も面をもつI 1158・I 1159から、薄手で浅く端部も丸く仕上げるようなI 1164までバラエティがある。またI 1162～I 1170は深い碗形の杯部である。いずれも、内外面とも精緻な磨き調整される。脚部では、厚手でしっかりとした作りのI 1173は、全体がゆるやかに開く形態であるが、ほかはおおむね薄手で、I 1171のように中間付近で屈曲気味に裾開きとなる形態をとる。I 1180・I 1181は、杯部は不明だが丈の低い脚台となるようである。

器台（I 1182～I 1203） ほぼ全形が把握されるのはI 1182のみで、径の大きな筒部から短く口縁が開き、脚裾も短く外反する。口縁端部には突帯の剥落痕がめぐることから、垂下する面をもつものであったとみられる。ほかは、受部と脚部の破片がほとんどであるが、筒部に関してはこのI 1182やI 1183のように筒状を呈してゆるやかに外反する口縁や脚部へつながる形態のものと、I 1184のように直線的な受部から「く」字状に角度をもって屈曲して外反する脚裾へと連続していく形態のものの2種に大別できる。量的に主体となるのは后者であり、I 1190・I 1191のように口縁端部は垂下する面と擬凹線や円形浮文の装飾をもつものが含まれる。I 1201・I 1202は明瞭な角度をもって外側へ屈曲する脚端部であり、高杯の脚部となる可能性も考えられる。I 1203は上半が薄手の器壁で強く横撫でされ、下半は厚い器壁で屈曲している破片。山陰系の鼓形器台とされるものの筒部片かとみられる。

底部（I 1204～I 1242） 壺や甕の各種の底部をまとめた。I 1204は短い脚台が付され、中央が穿孔されている。内面には蜘蛛の巣状の刷毛調整がめぐる。I 1207は厚手の器壁の丸底で、内面は粗いしわと起伏がそのまま残される。叩き調整のI 1212は底部に焼成前とみられる穿孔がある。ほかは、短く突出して中央がわずかに窪むドーナツ状のものが目立つ、I 1230は角閃石を多量に含む茶褐色の色調で、生駒西麓産とされるものの特徴を示す。I 1236は底部外縁が剥落しているが窪み底になるものとみられる。I 1237は外縁がひとまわり剥落している。I 1240は尖底である。

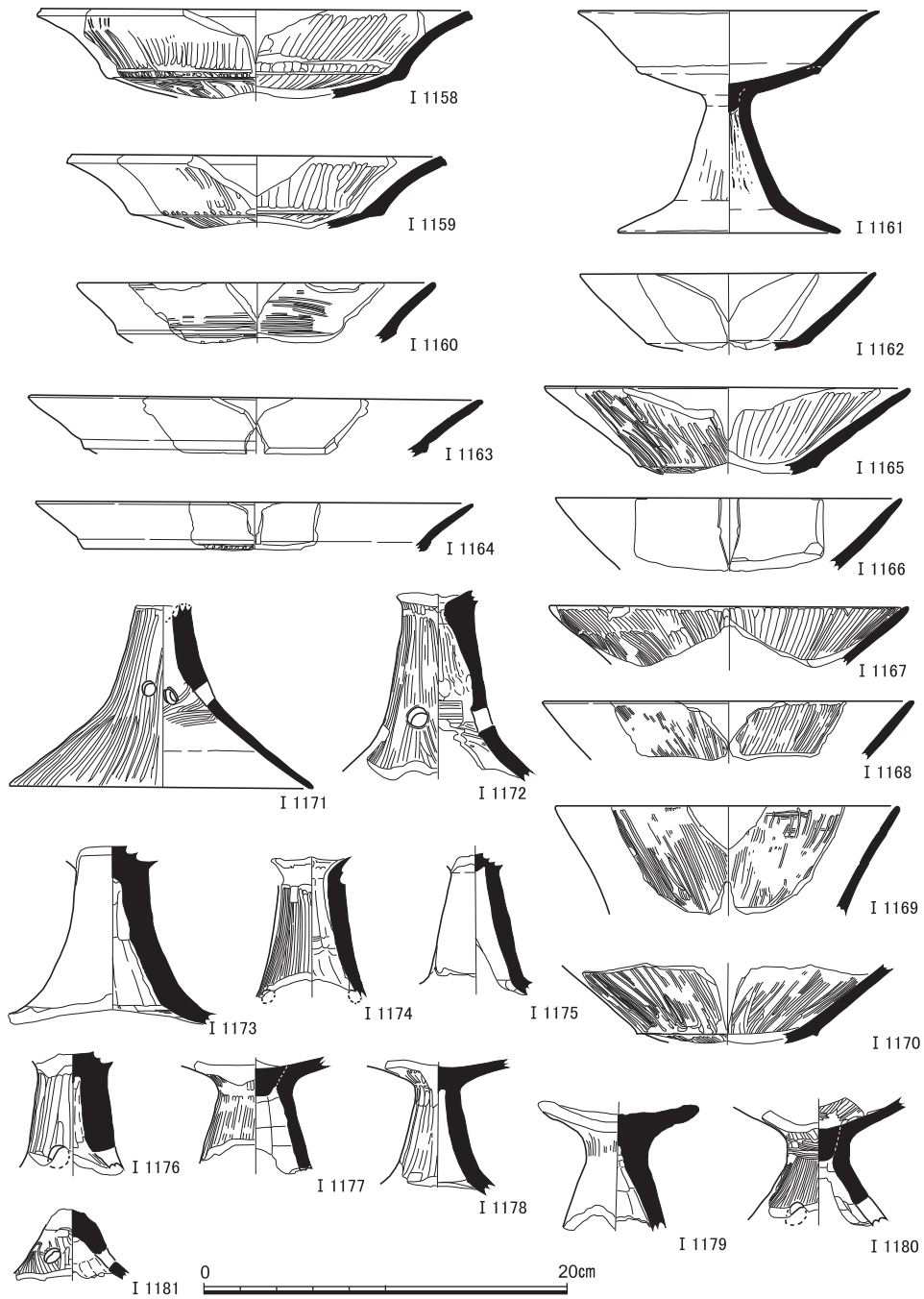


図72 弥生～古墳時代の遺物(8) (I 1160・I 1177黒褐色土, I 1172・I 1173・I 1178・I 1181上層混入, I 1158・I 1164 S R 1 下層砂層, ほかは黒色粘質土出土)

古墳時代以前の遺跡

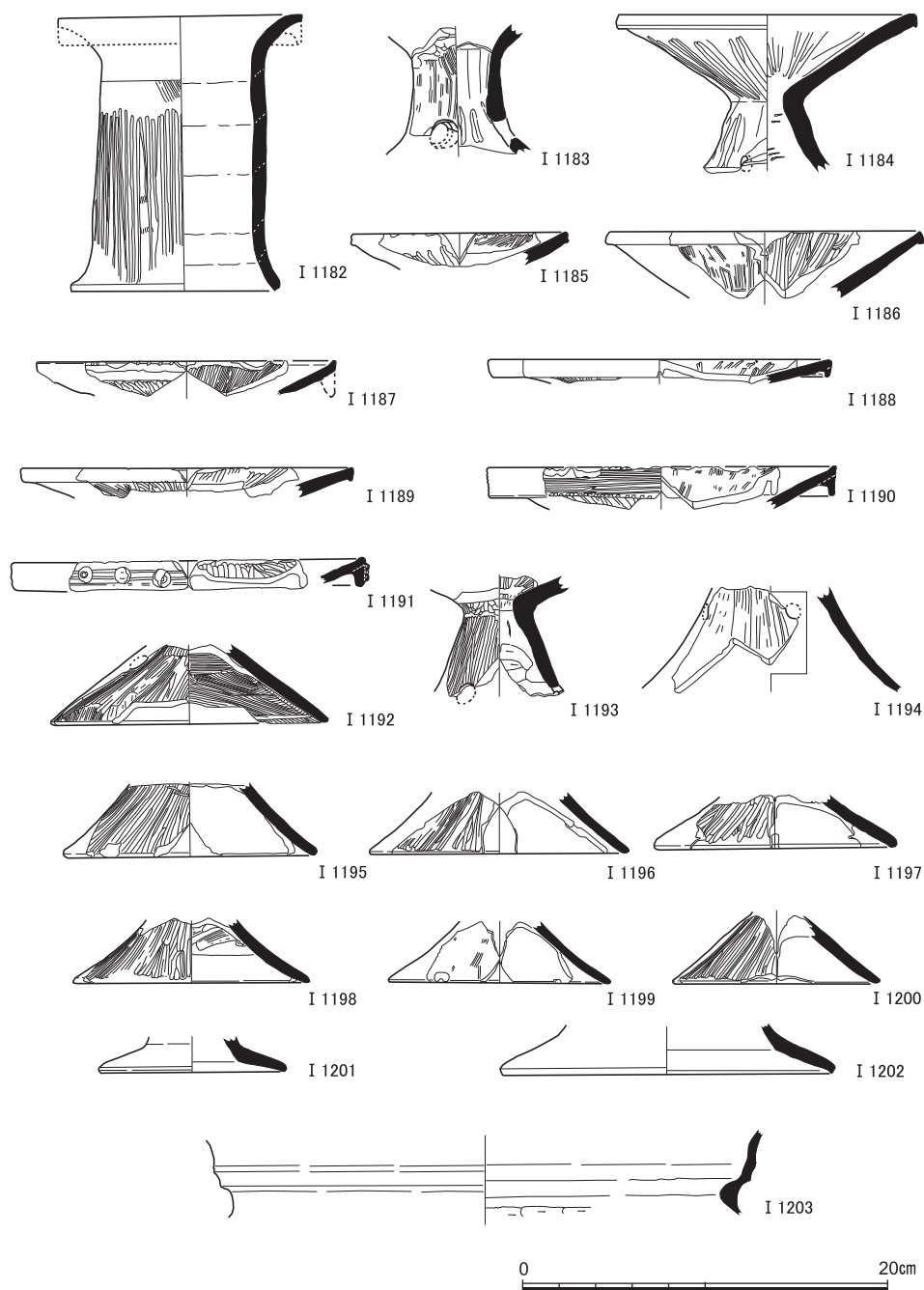


図73 弥生～古墳時代の遺物(9) (I 1190黒褐色土, I 1192・I 1196上層混入, I 1183・I 1185・I 1203下層シルト層, ほかは黒色粘質土出土)

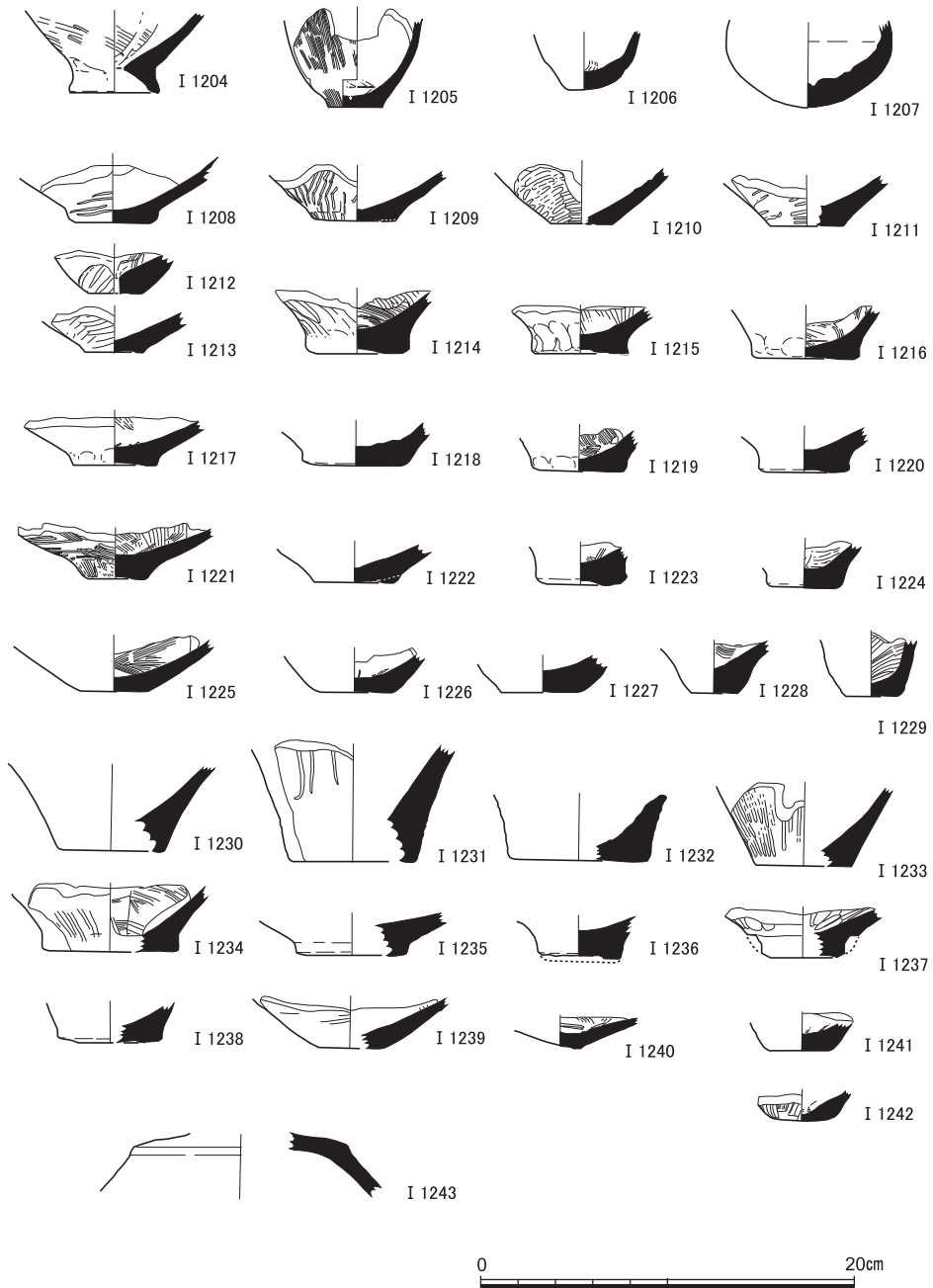


図74 弥生～古墳時代の遺物(Ⅱ) (I 1206・I 1207・I 1235・I 1237上層混入, I 1211・I 1215・I 1227黒褐色土, I 1204 S R 1下層砂層, ほかは黒色粘質土出土)

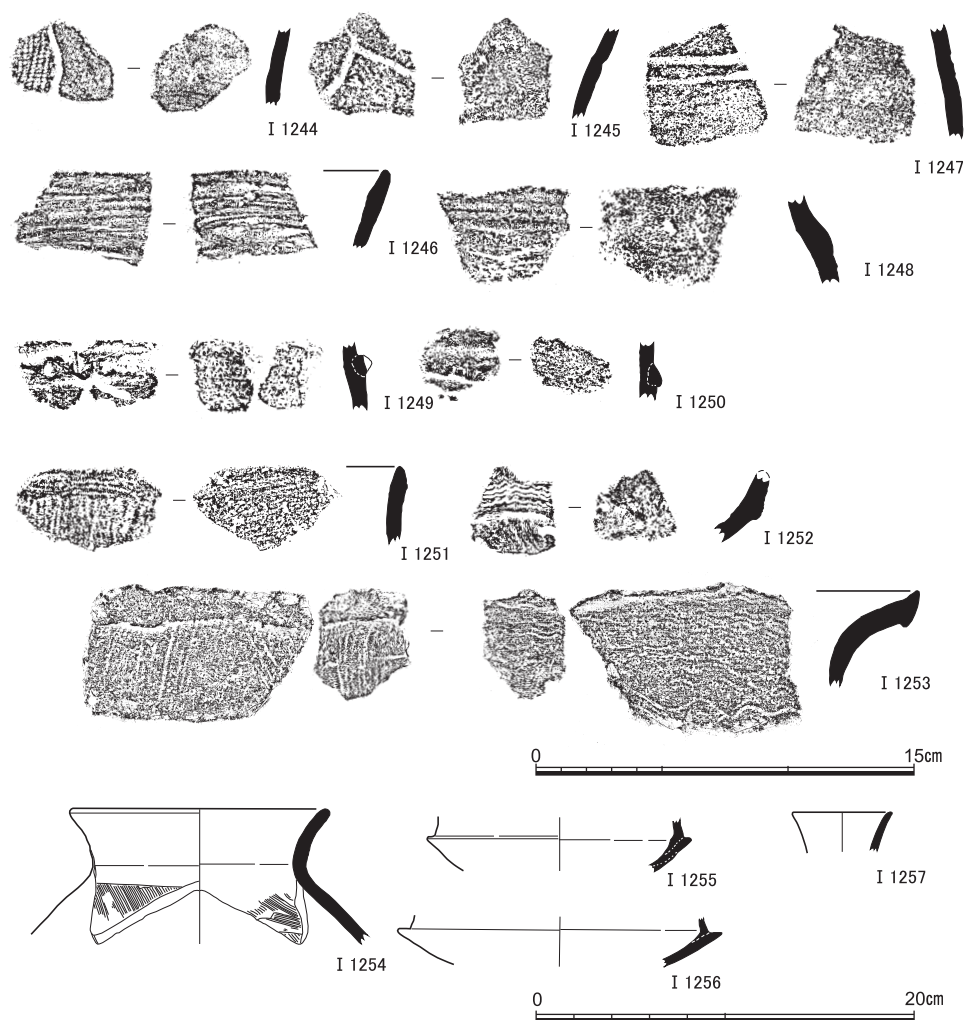


図75 縄文後期の土器 (I 1244～I 1246)・晩期の土器 (I 1247～I 1250), 弥生中期の土器 (I 1251～I 1253), 古墳中期の土師器 (I 1254)・須恵器 (I 1255～I 1257) I 1244～I 1253: 縮尺1/3, I 1254～I 1257: 縮尺1/4

脚台 (I 1243) は、厚手の器壁の屈曲部分で、外面は撫でにより丁寧に仕上げられる。屈曲部は1条の浅い凹線状の窪みがめぐる。北陸方面にみられるような、有段の脚台裾をもつような器台の可能性があるとみている。

弥生後期～古墳前期土器の編年的位置づけ 以上の土器群は、たとえば高杯 I 1158や器台 I 1182などは後期前半～中葉にさかのぼる可能性をもつといえる。ほかは、後期終末～庄内式が主体になるものと言え、典型的な庄内式甕や、甕などの内面の削り調整や尖底

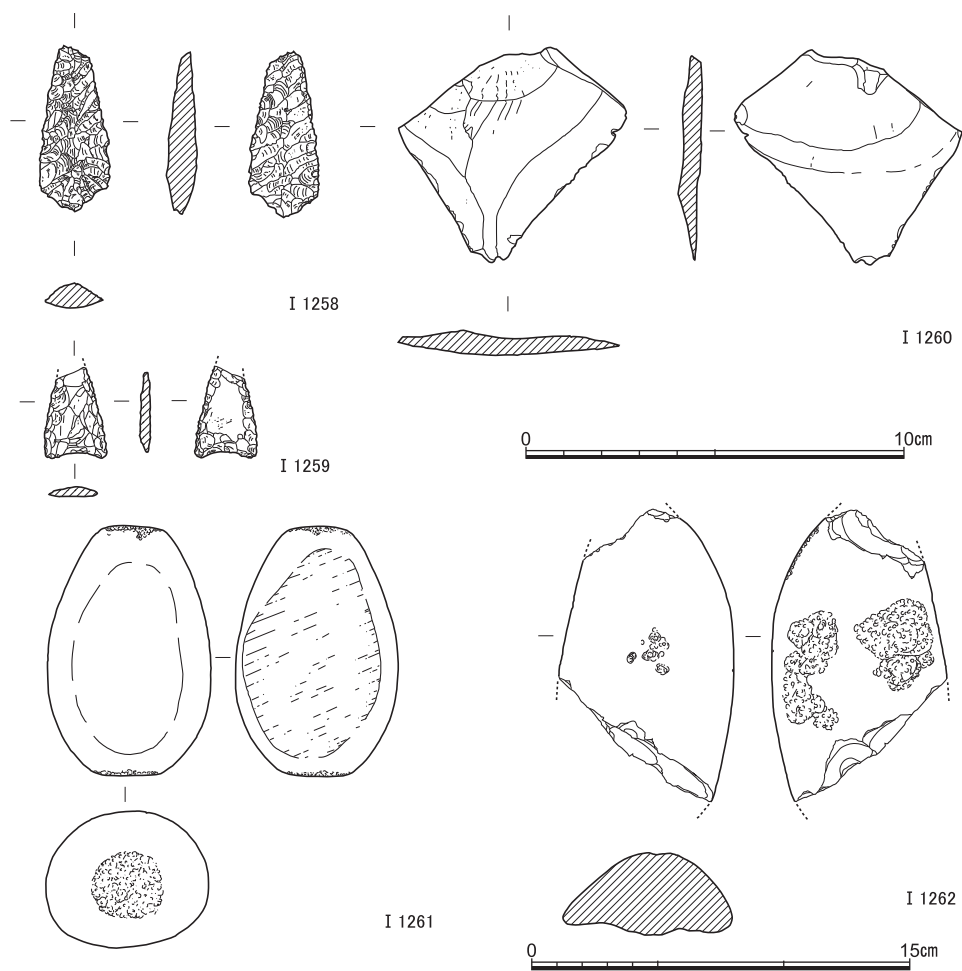


図76 先史時代の石器・石製品（I 1258：有茎尖頭器，I 1259：石鎌，I 1260：剥片，I 1261・I 1262：叩き石） I 1258～I 1260：縮尺1/2，I 1261・I 1262：縮尺1/3

～丸底化がほとんどみられず，また小型精製器種群も，その萌芽的なものは散見されるにとどまることから，庄内式でも初頭ころまでにとどまる様相と評価したい。ただし，短く明瞭な屈曲をもつ I 1201・I 1202 のような脚台は，布留式期まで下る可能性があるともみられ，資料総体としては，弥生後期終末～古墳時代初頭を中心としながら，前後の時期も微量含まれる内容，とするのが妥当といえよう。

縄文後晩期・弥生中期・古墳中期の土器（I 1244～I 1257） 上述してきた主体となる時期以外の縄文～古墳時代各期の土器も，少量出土している。I 1244・I 1245 は縄文後期の磨消縄文土器，I 1246 は同時期の粗製土器口縁。I 1247 は凹線が2条みられる胴部片

で、晩期前葉だろう。I 1248は深鉢の頸胴部境付近の破片で、下半を篋削りしている。I 1249・I 1250は刻目突帯文土器。これらは晩期中葉～後葉である。I 1251～I 1253は弥生中期前葉～中葉の甕（I 1251）や壺（I 1252・I 1253）の口縁部である。I 1254～I 1257は古墳時代中～後期の土器で、I 1254は口縁部をひろく回転横撫で調整する土師器の壺、I 1255・I 1256は須恵器杯身、I 1257は須恵器の壺口縁部。

石器・石製品（I 1258～I 1262） I 1258は有茎尖頭器。濃緑色のチャート製で先端をわずかに欠失する。残存長42mm，最大幅18mm，重さ6.7gをはかる。茶褐色土中に混入して出土したものだが，縄文草創期～早期ころの製品として，貴重な事例を追加したといえよう。I 1259は凹基式の石鏃。頁岩製で先端を欠失し，やや摩滅している。上層の古代～中世のピット内に混入して出土した。重さ1.4gをはかる。縄文時代の製品であろう。I 1260はサヌカイト製の使用痕のある剝片。古代の遺構S X 15に混入して出土した。I 1261は緻密な細粒砂岩製の叩石。黒色粘質土から出土した。長さ98mm幅64mm厚さ54mmの卵形で，両端部には明瞭な敲打痕が残り，両平面も磨耗して平坦化している。I 1262は花崗岩質の石材による叩石の破片。断面は半円形を呈し，両面や側面に敲打痕が認められる。S R 1下層から出土している。

滑石製有孔円盤（I 1263） 黒色粘質土上面から出土している。径27mm厚さ2mm重さ4.7gをはかる黒褐色の滑石製で，中央付近に接近した2孔が穿たれる。両平面と縁辺も丁寧に加工して整えており，全面に擦過痕がのこる。古墳時代中期の製品であろう。

板状木器（I 1264） 下部のシルト層より出土。調査区北壁に一部が露出していたものを掘り出した（図版16-7）。次節で詳報するが，広鋤用の泥除未製品と想定される。

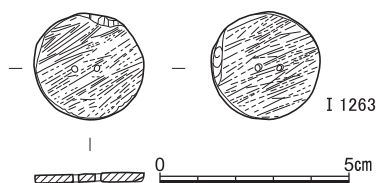


図77 滑石製有孔円盤（黒色粘質土出土） 縮尺1/2

5 岡崎遺跡出土板状木器について

資料の概要 本節では岡崎遺跡から出土した板状木器について報告する。本資料は暗灰色シルト層に所属し、同じ層位で弥生時代後期から庄内式にかけての土器が見つかった。木器は調査区壁面に掛かった状態で見つかったため、周囲の状況は完全には把握できない（図版16-7）。

木器は最大長30.2cm、最大幅29.8cm、最大厚4.4cmのほぼ方形の板材で、中央がやや肥厚する（図版42、図78-I 1264）。樹種はコナラ属アカガシ亜属で柾目材を使用しており（第6節表6を参照）、最も広い主面が柾目面、その左右が木口面となる。隆起の裏面は中央をわずかに窪ませているが、非常に浅く断面にはほとんど反映されない。いま便宜的に隆起をもつ柾目面を凸主面、その裏面を凹主面、凸主面の左右の木口面を左側面、右側面と呼ぶ。

資料の形成過程 凸主面に対して左側面は主面に直交し、比較的平滑に整えられる。加工にともなう刃先痕は不規則な方向に形成されており、木器がより大きな規格だった段階の加工面と考えられる。素材以前の段階で木口面が平滑に調整されるのは、丸太材ないし分割材の段階で楔による分割をおこなう場合であるから、当該面は分割材の端部に相当する。

右側面は「く」字形の断面を呈し、突出部には折取痕が観察できる。ただし、凸主面に隆起を作り出す過程で折取痕は部分的に削られている。板材を切断する際に両面に溝を彫

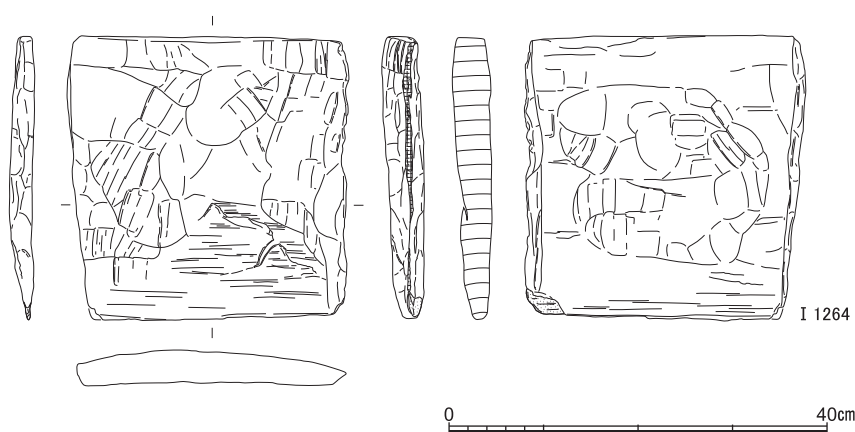


図78 板状木器 縮尺1/8

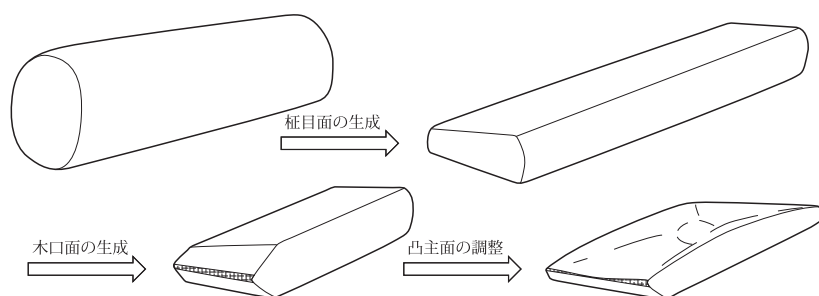


図79 板状木器の形成過程

り込んで折り取る施溝切断という技法を示唆するが、横断面をみると一般的な施溝切断よりも凸主面の傾斜が緩やかである。折取痕の位置を考慮すると、原材をこの規格まで分割したのちに施溝切断をおこない、さらに凸主面に調整を加えたものと断定できる。

以上の検討から、加工面の形成順序は左側面・凹主面→右側面→凸主面となる。左側面に残る加工痕には凹主面に切られるように見えるものもある。また、左側面の加工方向が不規則であるのは、丸太材段階で転がしながら調整したことに起因する可能性が高い。これらを勘案すれば、凹主面よりも左側面が早く形成されたとみるのが妥当だろう（図79）。

資料の器種 本例が相伴土器の示す弥生時代後期から庄内式期の産物だとすれば、アカガシ亜属を利用する板状の木器は、鋤や鋤などの農具に限られると言ってよい。隆起の位置は中心から樹皮側に若干偏っており、弥生時代の農具が対称性を重視することをふまえると、図78のように木口面を左右におく向きをとる器種と推測される。これは横木取りと呼ばれ、農具では泥除と横鋤が該当する。泥除は鋤に装着する補助具であり、広鋤や横鋤とセット関係をなす。横鋤は刃幅の広い鋤であり、土を寄せる作業に適している。当該期の泥除は、広鋤に対応する型式では器高と最大幅が近似するのに対して、横鋤とセットになる型式ではやや幅広の形態をとる。また横鋤本体も同様に幅が器高よりも大きく、長方形の素材が必要となる。本例がすでに成形を開始することを考えれば広鋤用の泥除とするのが妥当であり、筆者分類のⅡ系列平峰式に該当するだろう〔鶴来2020〕。

平峰式は前面が平坦かわずかに湾曲するのが一般的であり、本例の主面形態と合致する。泥除と広鋤にはそれぞれに結合を補助する装置が設けられ、装置の種別ごとにセット関係をなす。平峰式では結合部が平坦な1式と、断面台形の突出をもつ2式に細分される。本例が所属する弥生時代後期以降は2式が圧倒的多数を占めるものの、ごく数例ながら1式

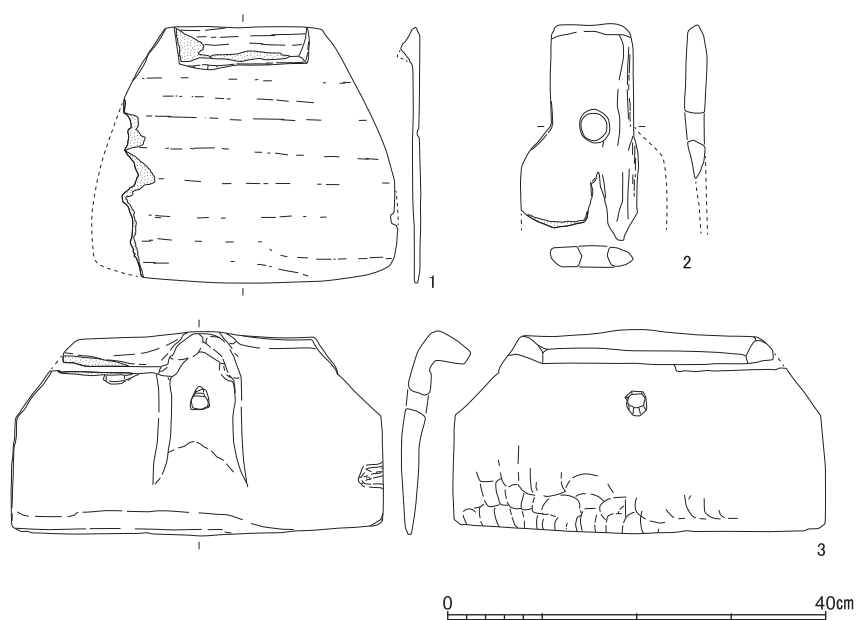


図80 岡崎遺跡出土農具 縮尺1/8 (1・2〔上原1993〕, 3〔熊谷2016〕より筆者再トレース)
も継続するため未成品では断定しづらい。なお岡崎遺跡では過去の調査でも古墳時代前期から中期に所属する平峰2式の泥除未成品が出土している(図80-1)。

資料の位置づけ 平峰式は中期後葉に1式が成立して、後期以降は2式が主体となる。平峰2式の出現は近畿地方で鉄器が普及する時期と重なり、同型式は鉄器の高い加工精度を利用した蟻じゃくりという結合技術を採用する。とはいえ出現当初は鉄器へのアクセスが限られており、広鋤とあわせて集約的に製作されていた〔鶴来2018〕。今回出土した泥除未成品が所属する時期には、岡崎遺跡でも農具の供給を基本的に外部に依存していたと考えるのが自然である。

ところが本例の形成過程には、そうした想定と相反する点がみられる。弥生時代の本器製作では、長い板材に複数個体を配置して同時に成形を進める連結製作が採用される。連結製作は作業効率が高く、農具の大規模需要に応える技術と評価されている〔飯塚2001〕。集約生産が展開する弥生時代後期でも連結製作は徹底され、滋賀県柳遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡など周辺地域で連結状態の泥除未成品が見つかった。農具のなかでも広鋤と泥除は出土数が突出して多く、効率的な生産で膨大な消費量をまかなっていたのだろう。

それに対して、本例は予め1個体分として切断された素材を成形したものである。こうした製作手順は単体製作と呼ばれ、楔割技術が未熟だった弥生時代の初め頃にみられるものの、連結製作が普及してから一部の器種を除いてほぼ採用例がなくなる。単体製作は作業効率が悪いだけでなく用材を余分に切除するため無駄が多く、合理化された体制下ではまずみられない。したがって、本例は同時期の量産品とは異なり個別的な生産によって作られたのではないかと推測される。

岡崎遺跡では本例以外にも個別製作の所産とみられる農具が出土する。図80-2は前面に泥除装置をもたず、当初から泥除を伴わない用途を想定して製作されている。弥生時代後期以降、広鋤ではほぼすべての個体に泥除装置が標準装備される。中期までは鋤の用途に応じて泥除装置の有無を作り分けていたが、生産地が一元化すると個別の要請に応えることが難しくなり、規格品が生み出される。平坦な後面も通有の形態とは異なっており、泥除装置を意図的に外した本例は非量産品と推定できる。古墳時代前期の横鋤(図80-3)も上端から突出する泥除装置が同時期の事例と比べて大きく張り出している。特異性の発現を個別生産と結びつけるならば、本例もその類である。

以上の分析を総合すると、岡崎遺跡では木器生産の集約化が進行する時期に個別で生産をおこなっていた可能性が想定される。とはいえ本遺跡が木器の流通網から脱落していたわけではなく、外部供給と消費のバランスが崩れた際の臨機的な補完を目的とした対応であると思われる。鉄製木工具の普及を契機として木器の生産構造が再編されるものの、供給が安定化するには一定の時間が必要となる。各集落では中期以来の製作技術を継承して不足分をその都度自前で補ったと考えられる。また鋤と泥除の一方が破損した場合に、鉄器がなければ作り直すことができず、セットをそのまま破棄せざるを得ない。その点で中期以前の型式ならばメンテナンスが可能であり、今回の出土未成品も古い形態を意図している可能性がある。いずれにせよ本例は大量生産を意図しない単体製作の産物であり、弥生時代後期以降における木器生産の多様性を物語る資料である。(鶴来)

〔編者注〕

ここで報告した板状木器の破片については、(株)加速器分析研究所のAMS測定による放射性炭素年代として23~74calADの暦年較正年代(1 σ)が得られている(第8節表10を参照)。

6 出土木製品の樹種同定結果

第一次依頼61点ならびに第二次依頼116点について、樹種調査を行った。サンプリングは、異物の混入をさけるために、現場にて複数名で作業をおこない、採取後直ちにラベルを施した。出土木材サンプルは、適度に大きさもあり、また硬さもあったため、特に包埋等の処理をほどこさずに、徒手により3断面の切片を作成した。作成した切片はガムクロールに封入してプレパラートとした。一方竹材は維管束と基本組織の保存状態が大きく異なり、徒手では良好な切片が得られなかったため、エポキシ樹脂に包埋してガラスナイフにより薄切した。作成した薄切片は、サフラニン染色ののち、バイオライトに封入してプレパラートとした。観察は、顕微鏡用デジタルカメラ（Olympus DP26）を装着した光学顕微鏡（Olympus BX-51）にて行った。同定結果は表4～7にまとめた。

なお、昨年度報告した近世の木組遺構S X 1・S X 2については、使用材の位置が対照できるよう図84・85に写真と図を再掲した。また今回遺物として図で報告した試料は、表内に報告番号を示した。

第一次依頼61点（試料1-1～61）の内訳は、スギが39点、ヒノキが9点、ニヨウマツ類が5点、ツガが3点、種を特定できないヒノキ科が2点、タケ亜科が2点、アカガシ亜属1点であった。曲物の一部にヒノキに加えてツガが使われていることは、ツガの木目の美しさが重宝されたことを想起させる。

第二次依頼116点（試料2-1～116）の内訳は、スギが75点、ヒノキが34点、種を特定できないヒノキ科が1点、コウヤマキ2点、アカガシ亜属4点であった。棒状具2点にコウヤマキが認められたが、卒塔婆状の製品が出土していることから、祭祀と関連したものかもしれない。

調査全般を通して、杭、栈木など構造部材としては、圧倒的にスギが頻用されたことが明らかであり、当時（近世・平安後期）の木造建築事情を伝える資料のひとつとなろう。

出土木材の考古的考察の詳細は他に譲り、ここでは同定した樹種の識別上の特徴を述べ、光学顕微鏡写真を示すこととする（図81～83）。

1. スギ *Cryptomeria japonica* ヒノキ科スギ亜科スギ属の日本を代表する針葉樹の一つ。国産針葉樹としては軽軟化で、とくに早材部の壁厚は薄い。木口面①において、樹脂細胞が接線方向に帯状に配列する。早材から晩材への移行はやや急で、通常晩材部は8～10細胞程度からなる。柃目面③では、分野壁孔がスギ型であり、壁孔は比較的大きく、

開口部の楕円が水平方向に大きく傾く特徴がある。

2. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* ヒノキ科ヒノキ属を代表する針葉樹の一つ。木口面①において、樹脂細胞が接線方向に帯状に配列する。早材から晩材への移行は緩やかで、通常晩材部は5～8細胞以下である。柢目面③では、分野壁孔がヒノキ型であり、壁孔は整然と2つ並ぶ場合は多く、開口部の楕円が細く、垂直方向に近い特徴がある。

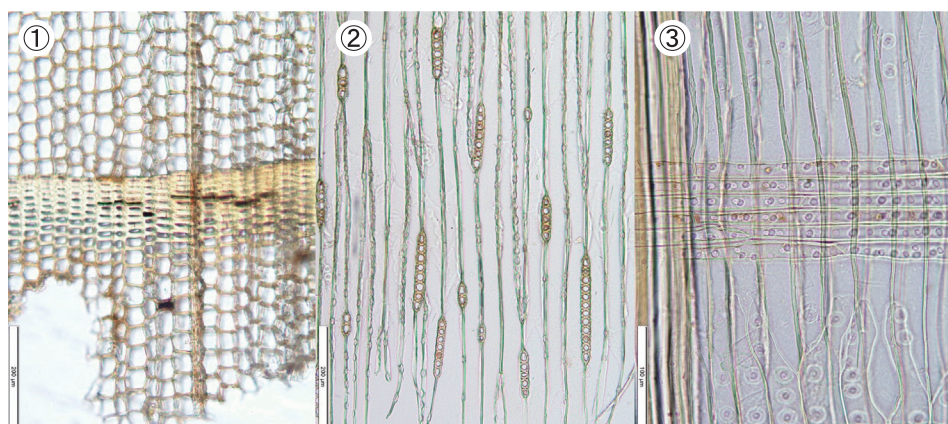
3. ニヨウマツ類 *Pinus sp.* /*Diploxylon* マツ科マツ属、複維管束亜属ニヨウマツ類で針葉が二葉の樹木。アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツなど。樹脂道が肉眼でも明瞭に認められるマツ科の有用樹。木口面①において、薄壁のエピセリウム細胞に囲まれた垂直樹脂道が認められ、通常晩材部は10細胞程度あるいはそれ以上で早材から晩材への移行は極めて急である。板目面②には写真中央の放射組織に水平樹脂道の痕跡（腐朽により空隙化）が認められる。柢目面③では、放射組織は、平伏細胞部の分野壁孔が窓型であり、両端部に鋸歯状突起が顕著な放射仮道管を有する。

4. ツガ *Tsuga sieboldii* マツ科ツガ属。傷害時に大量に樹脂道を生産する樹木で、通常時は樹脂道を持たないため、特に古材となり匂いや色が不明瞭な場合は、スギと間違われる場合がある。木口面①において、早材から晩材への移行は急である。柢目面③では、放射組織は、平伏細胞部の末端壁が数珠状であり、また水平壁にも多数の単壁孔対が認められ、両端部に放射仮道管を有する。

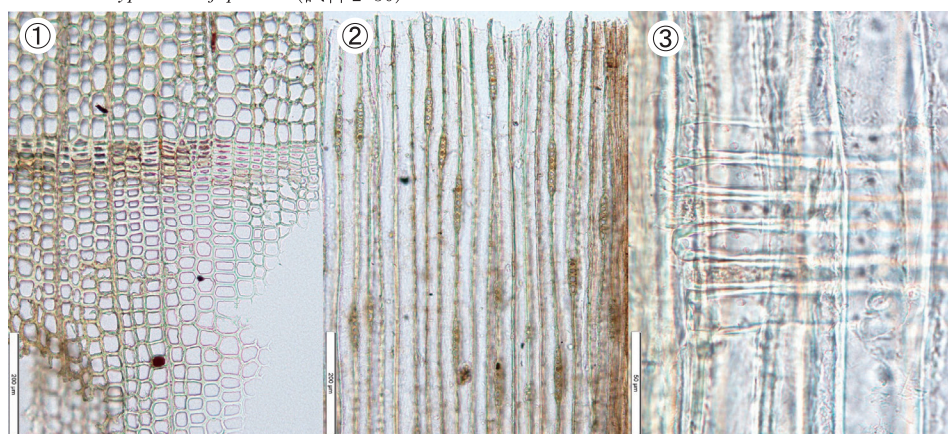
5. コウヤマキ *Sciadopitys verticillate* コウヤマキ科コウヤマキ属の日本の固有種。木口面①において、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂道も樹脂細胞も認められない。柢目面③では、放射組織は、平伏細胞のみからなり、分野壁孔は窓状（マツ型）であるが、両端部に放射仮道管を伴わない。

6. アカガシ亜属 *Cyclobalanopsis sp.* ブナ科コナラ属アカガシ亜属に属する常緑の櫟。管孔性に特徴があり、道管が放射方向に配列する放射孔材に分類される。木口面①において、放射方向に太い広放射組織が条線となって現れる。軸方向柔細胞は帯状に配列し、間隔において何層もの帯を形成する。道管は直径ほぼ一定のまま、放射方向に配列する。柢目面③では、帯状配列する軸方向柔細胞が間隔において観察される。

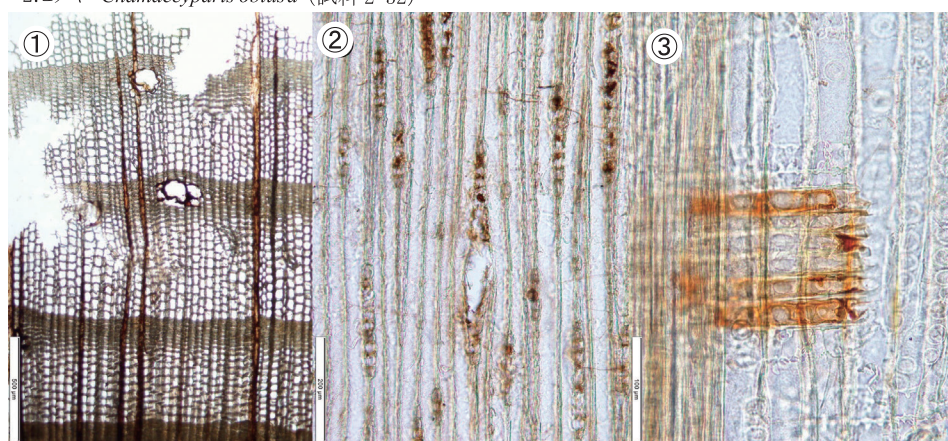
7. タケ亜科 *Bambusoideae sp.* 竹稈の断面の表皮から少し内側の、柔細胞（基本組織）中に分散する維管束鞘の形態はタケ亜科のものである。



1.スギ *Cryptomeria japonica* (試料 2-30)



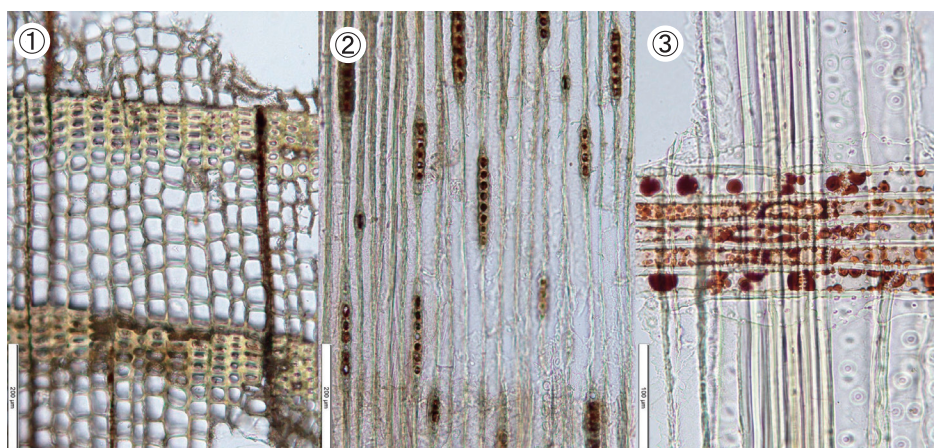
2.ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (試料 2-32)



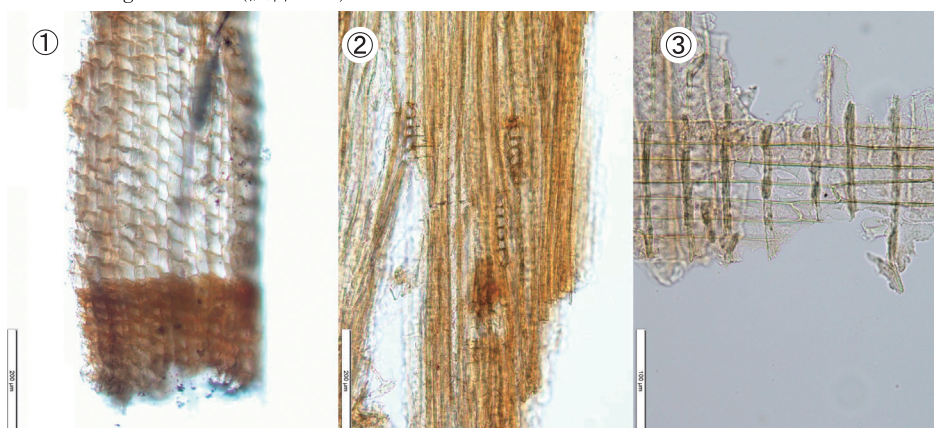
3.ニヨウマツ類 *Pinus* sp./*Diploxylon* (試料 1-44)

図81 出土木材の光学顕微鏡写真(1) いずれも①：木口面，②：板目面，③：柁目面を提示

出土木製品の樹種同定結果



4.ツガ *Tsuga sieboldii* (試料 1-57)

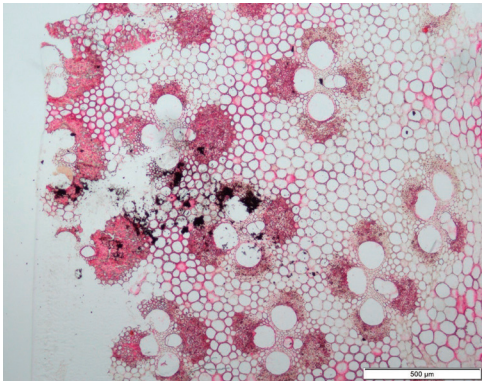


5.コウヤマキ *Sciadopitys verticillate* (試料 2-95)



6.アカガシ亜属 *Cyclobalanopsis* sp. (①試料 1-113, ②1-114, ③1-115)

図82 出土木材の光学顕微鏡写真(2) いずれも①：木口面，②：板目面，③：柁目面を提示

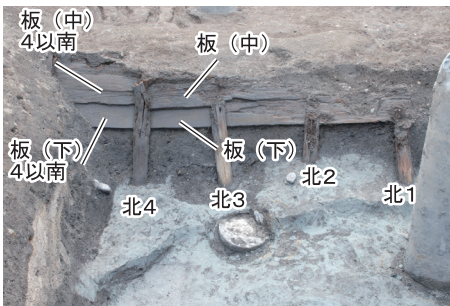


7.タケ亜科 *Bambusoideae* sp. (試料 1-33)

図83 出土木材の光学顕微鏡写真(3) 維管束横断面を提示



1. SX1・SX2の位置（北東から）



2. SX1（東から）



3. SX2（南から）材の個別番号は図 85 に提示

図84 近世木組遺構 S X 1 ・ S X 2 における材の使用状況

出土木製品の樹種同定結果

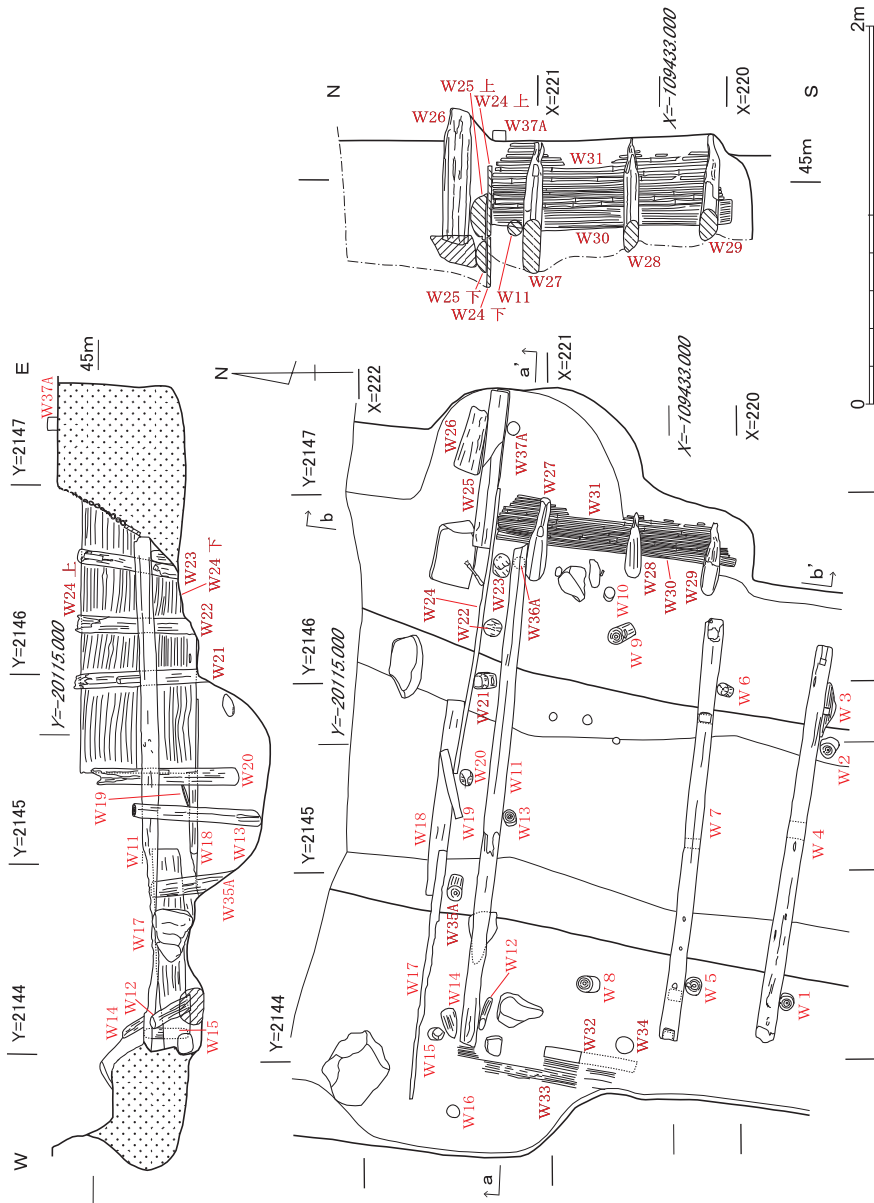


図85 S X 2における材の使用状況 (赤字が材の報告番号) 縮尺1/80

表5 樹種同定結果一覧

試料	時期	遺構・層位	部材・品目	同定結果	報告番号	登録番号	備考
1-1	近世	SX2	杭	スギ	W1		
1-2	近世	SX2	杭	スギ	W2		
1-3	近世	SX2	角材	スギ	W3		
1-4	近世	SX2	丸太	スギ	W4		
1-5	近世	SX2	杭	スギ	W5		
1-6	近世	SX2	杭	ヒノキ	W6		* 1
1-7	近世	SX2	丸太	スギ	W7		
1-8	近世	SX2	杭	スギ	W8		
1-9	近世	SX2	杭	スギ	W9		
1-10	近世	SX2	杭	スギ	W10		
1-11	近世	SX2	丸太	スギ	W11		
1-12	近世	SX2	杭	スギ	W12		* 2
1-13	近世	SX2	杭	スギ	W13		
1-14	近世	SX2	杭	スギ	W14		* 2
1-15	近世	SX2	杭	スギ	W15		* 2
1-16	近世	SX2	杭	スギ	W16		* 2
1-17	近世	SX2	丸太	スギ	W17		
1-18	近世	SX2	丸太	スギ	W18		
1-19	近世	SX2	板	スギ	W19		
1-20	近世	SX2	杭	スギ	W20		
1-21	近世	SX2	杭	スギ	W21		
1-22	近世	SX2	杭	スギ	W22		
1-23	近世	SX2	杭	スギ	W23		
1-24	近世	SX2	板	ニヨウマツ類	W24上		
1-25	近世	SX2	板	ニヨウマツ類	W24下		
1-26	近世	SX2	板	スギ	W25上		
1-27	近世	SX2	板	スギ	W25下		
1-28	近世	SX2	板	スギ	W26		
1-29	近世	SX2	杭	スギ	W27		
1-30	近世	SX2	杭	スギ	W28		
1-31	近世	SX2	杭	スギ	W29		
1-32	近世	SX2	板	ニヨウマツ類	W30		
1-33	近世	SX2	壁体素材	タケ亜科	W31		
1-34	近世	SX2	壁体素材	タケ亜科	W33		図83-7
1-35	近世	SX2	杭	ヒノキ科	W34		* 3
1-36	近世	SX2	杭	スギ	W35		* 2
1-37	近世	SX2	杭	ヒノキ	W36		
1-38	近世	SX2	杭	スギ	W37		
1-39	近世	SX2	板	スギ	W38		
1-40	近世	SX1	半割杭	スギ	北 1		
1-41	近世	SX1	半割杭	スギ	北 2		
1-42	近世	SX1	半割杭	スギ	北 3		
1-43	近世	SX1	半割杭	ヒノキ	北 4		
1-44	近世	SX1	板	ニヨウマツ類	(中)		図81-3
1-45	近世	SX1	板	スギ	(中) 4 以南		
1-46	近世	SX1	板	スギ	(下)		
1-47	近世	SX1	板	スギ	(下) 4 以南		

出土木製品の樹種同定結果

表6 樹種同定結果一覧（つづき）

試料	時期	遺構・層位	部材・品目	同定結果	報告番号	登録番号	備考
1-48	近世	SE1	井戸枠	ニヨウマツ類			
1-49	弥/古	暗灰色シルト	板状加工品	アカガシ亜属	I 1264	W1001	第5節参照
1-50	平後	SK1-1	井桁E	ヒノキ科		W2058	* 3
1-51	平後	SK1-1	井桁S	不明		W2057	
1-52	平後	SK1-1	井桁W	スギ		W2004	
1-53	平後	SK1-1	井桁N	スギ		W2005	
1-54	平後	SK1-1	西壁板	ヒノキ		W2056	* 4
1-55	平後	SE9水溜	曲物内側板	ツガ	I 988	W2001	
1-56	平後	SE9水溜	曲物外側板上	ツガ	I 988	W2001	墨書
1-57	平後	SE9水溜	曲物外側板下	ツガ	I 988	W2001	図82-4
1-58	平後	SE5水溜	曲物内側板	ヒノキ	I 987	W2002	
1-59	平後	SE5水溜	曲物外側板上	ヒノキ	I 987	W2002	
1-60	平後	SE5水溜	曲物外側板下	ヒノキ	I 987	W2002	
1-61	平後	SE5水溜	曲物木釘	ヒノキ	I 987		
1-62	平後	SE5井筒内	曲物底板	ヒノキ	I 989	W2003	
2-1	平後	SK1-2埋土	箸状棒製品	コウヤマキ	I 1025	W2006	
2-2	平後	SK1-2埋土	箸状棒製品	ヒノキ	I 1029	W2007	
2-3	平後	SK1-2埋土	角材	ヒノキ		W2013	
2-4	平後	SK1-2埋土	板材	スギ		W2014	
2-5	平後	SK1-2埋土	板材	スギ		W2015	
2-6	平後	SK1-2埋土	板材	スギ		W2016	
2-7	平後	SK1-2埋土	板材	スギ		W2017	
2-8	平後	SK1-2埋土	板材	スギ		W2018	
2-9	平後	SK1-2埋土	板材	ヒノキ		W2020	
2-10	平後	SK1-2埋土	楔状	ヒノキ	I 1033	W2022	
2-11	平後	SK1-2埋土	楔状	ヒノキ	I 1035	W2023	
2-12	平後	SK1-2埋土	楔状	スギ	I 1034	W2024	
2-13	平後	SK1-2埋土	楔状	スギ	I 1032	W2025	
2-14	平後	SK1-2埋土	栈木状	スギ	I 1049	W2026	
2-15	平後	SK1-2埋土	小型凹状加工	ヒノキ	I 1008	W2033	
2-16	平後	SK1-2埋土	卒塔婆状板材	スギ	I 996	W2036	
2-17	平後	SK1-2埋土	棒状材	スギ	I 991	W2038	
2-18	平後	SK1-2埋土	板材端切れ	スギ		W2042	
2-19	平後	SK1-2埋土	薄板	スギ	I 998	W2047	
2-20	平後	SK1西石22下杭南	栈木状	スギ	I 1048	W2050	
2-21	平後	SK1西石22下杭北	棒状	スギ	I 1047	W2051	
2-22	平後	SK1-1井桁W下	角材(厚板)	スギ		W2052	
2-23	平後	SK1-1井桁W下	小型板材	スギ	I 1037	W2053	
2-24	平後	SK1-1井桁W下	板材	スギ		W2055	
2-25	平後	SX15・16下層	矢板状板材	ヒノキ	I 992	W2060	
2-26	平後	SX8埋土下部	組物状加工材	スギ	図版11-4	W2061	
2-27	平後	SX8埋土下部	組物状加工材	スギ	図版11-4	W2062	
2-28	平後	SX8埋土下部	組物状加工材	スギ	図版11-4	W2063	
2-29	平後	SE13曲物	薄板	ヒノキ		W2064	
2-30	平後	SE5横栈西側上段	栈木	スギ		W2065	図81-1
2-31	平後	SE5横栈西側中段	栈木	スギ		W2066	
2-32	平後	SE5横栈南側中段	栈木	ヒノキ		W2067	図81-2

表7 樹種同定結果一覧(つづき)

試料	時期	遺構・層位	部材・品目	同定結果	報告番号	登録番号	備考
2-33	平後	SE5横棧東側中段	棧木	スギ		W2068	
2-34	平後	SE5横棧北側中段	棧木	スギ		W2069	
2-35	平後	SE5横棧西側下段	棧木	スギ		W2070	
2-36	平後	SE5横棧南側下段	棧木	ヒノキ		W2071	* 5
2-37	平後	SE5横棧東側下段	棧木	スギ		W2072	
2-38	平後	SE5横棧北側下段	棧木	スギ		W2073	
2-39	平後	SE5縦板1	薄板	スギ		W2074	
2-40	平後	SE5縦板2	薄板	スギ		W2075	
2-41	平後	SE5縦板3	薄板	スギ		W2076	
2-42	平後	SE5縦板3の裏1	薄板	スギ		W2077	
2-43	平後	SE5縦板3の裏2	板材	スギ		W2078	
2-44	平後	SE5縦板4	薄板	スギ		W2079	
2-45	平後	SE5縦板5	薄板	スギ		W2080	
2-46	平後	SE5縦板6	板材	スギ		W2081	
2-47	平後	SE5縦板7	板材	スギ		W2082	* 2
2-48	平後	SE5縦板8	薄板	スギ		W2083	* 2
2-49	平後	SE5縦板9	板材	スギ		W2084	
2-50	平後	SE5縦板10	薄板	スギ		W2085	
2-51	平後	SE5縦板10の裏	薄板	スギ		W2086	
2-52	平後	SE5縦板11	板材	スギ		W2087	
2-53	平後	SE5縦板12	角材	スギ		W2088	
2-54	平後	SE5縦板13	板材	スギ		W2089	
2-55	平後	SE5縦板14	板材	スギ		W2090	
2-56	平後	SE5縦板15	板材	スギ		W2091	
2-57	平後	SE5縦板16	薄板	スギ		W2092	
2-58	平後	SE5縦板16の裏	薄板	スギ		W2093	
2-59	平後	SE5縦板17	薄板	スギ		W2094	
2-60	平後	SE5縦板18	薄板	スギ		W2095	
2-61	平後	SE5縦板19	板材	スギ		W2096	
2-62	平後	SE5縦板20	柱材	スギ		W2097	
2-63	平後	SX42底面	板材	ヒノキ		W2098	
2-64	平後	SK1-2埋土	穿孔円板	スギ	I 993	W2011	
2-65	平後	SK1-2埋土	小型棒状	ヒノキ	I 1021	W2102	
2-66	平後	SK1-2埋土	薄板	ヒノキ	I 1007	W2107	
2-67	平後	SK1-2埋土	薄板	ヒノキ	I 1005	W2108	
2-68	平後	SK1-2埋土	薄板	ヒノキ	I 1004	W2109	
2-69	平後	SK1-2埋土	楔状	ヒノキ	I 1036	W2112	
2-70	平後	SK1-2埋土	楔状	スギ	I 1038	W2114	
2-71	平後	SK1-2埋土	薄板	ヒノキ	I 1020	W2117	
2-72	平後	SK1-2埋土	台形加工板	スギ	I 994	W2119	
2-73	平後	SK1-2埋土	細板	スギ	I 1016	W2122	
2-74	平後	SK1-2埋土	羽子板状	スギ	I 999	W2133	
2-75	平後	SK1-2埋土	二股状	スギ	I 1000	W2134	
2-76	平後	SK1-2埋土	挟り入細板	スギ		W2135	
2-77	平後	SK1-2埋土	小型棒状	スギ	I 1022	W2139	
2-78	平後	SK1-2埋土	半円状板	アカガシ亜属		W2142	
2-79	平後	SK1-2埋土	小型棒状	スギ	I 997	W2148	

出土木製品の樹種同定結果

表8 樹種同定結果一覧（つづき）

試料	時期	遺構・層位	部材・品目	同定結果	報告番号	登録番号	備考
2-80	平後	SK1-2埋土	箸状棒製品	ヒノキ	I 1024	W2149	
2-81	平後	SK1-2埋土	棒状	スギ	I 1019	W2157	
2-82	平後	SK1-2埋土	薄板	スギ	I 1015	W2161	
2-83	平後	SK1-2埋土	挟り入板	ヒノキ科		W2166	* 3
2-84	平後	SK1-2埋土	小型板状	ヒノキ	I 1042	W2170	
2-85	平後	SK1-2埋土	小型棒状	スギ	I 1041	W2175	
2-86	平後	SK1-2埋土	小型棒状	スギ	I 1009	W2187	
2-87	平後	SK1-2埋土	小型薄板	スギ	I 1002	W2197	
2-88	平後	SK1-2埋土	小型薄板	ヒノキ	I 1011	W2198	
2-89	平後	SK1-2埋土	箸状棒製品	ヒノキ	I 1023	W2203	
2-90	平後	SK1-2埋土	棒状火付具	ヒノキ	I 1031	W2204	
2-91	平後	SX42配石下黒褐	薄板断片	ヒノキ		W2210	
2-92	平後	SX42下層(北半)	小型板状	スギ	I 1044	W2218	
2-93	平後	SX42下層(南半)	薄板	ヒノキ	I 1013	W2219	
2-94	平後	SX42下層(南半)	楔状	スギ	I 1040	W2220	
2-95	平後	SX42西黒粘	棒状具	コウヤマキ	I 1017	W2223	図82-5
2-96	平後	SX42西黒粘	薄板	スギ	I 1003	W2224	
2-97	平後	SE5井筒内	薄板	ヒノキ	I 1001	W2229	
2-98	平後	SE5井筒	小型薄板	ヒノキ	I 1010	W2230	
2-99	平後	SE5裏込東	箸状棒製品	ヒノキ	I 1027	W2233	* 5
2-100	平後	SE5裏込東	箸状棒製品	ヒノキ	I 1026	W2236	
2-101	平後	SE5井筒内	小型薄板	スギ	I 1006	W2239	
2-102	平後	SE5井筒内	小型板状	ヒノキ	I 1045	W2240	
2-103	平後	SE5曲物内下半	曲物底板片	スギ	I 990	W2241	
2-104	平後	SE5曲物内上半	卒塔婆状板材	ヒノキ	I 995	W2242	
2-105	平後	SK1-2埋土	小型薄板	スギ	I 1012	W2244	
2-106	平後	SK1-2埋土	小型板状	スギ	I 1046	W2246	
2-107	平後	SK1-2埋土	小型薄板	スギ	I 1043	W2251	
2-108	平後	SK1-2埋土	楔状	ヒノキ	I 1039	W2253	
2-109	平後	SK1-2埋土	薄板	スギ	I 1014	W2256	
2-110	平後	SK1-2埋土	棒状具	スギ	I 1018	W2257	
2-111	平後	SX25南半	棒状火付具	ヒノキ	I 1028	W2262	
2-112	平後	SX25南半	曲線加工板材	ヒノキ	I 1030	W2263	
2-113	弥/古	暗灰色シルト	板材?	アカガシ亜属		W1002	図82-6①
2-114	弥/古	暗灰色シルト	棒状材?	アカガシ亜属		W1003	図82-6②
2-115	弥/古	暗灰色シルト	板材?	アカガシ亜属		W1004	図82-6③
2-116	弥/古	暗灰色シルト	棒状材?	ヒノキ		W1005	* 4

平後：平安時代後期 弥/古：弥生時代後期～古墳時代前期

- * 1 分野壁孔はヒノキ型であるが早晚材の移行は急。
- * 2 劣化大であるものの残存する分野壁孔と早晚材の移行からスギと判定。
- * 3 劣化が激しいが樹脂細胞が見られたためヒノキ科と判定。
- * 4 劣化大であるものの残存する分野壁孔と早晚材の移行からヒノキと判定。
- * 5 分野壁孔は明確なヒノキ型ではないが早晚材の移行は緩やかでヒノキと判定。

(西原・金井・田鶴・杉山)

7 京都市白河街区・延勝寺跡出土編組製品の素材植物

(1) はじめに

井戸S E 5出土編組製品(図63-I 1050)の素材植物種の同定を行った。製品の時期は、共伴遺物から12世紀後葉～13世紀前葉(平安時代末～鎌倉時代初期)頃とみられる。

(2) 試料と方法

編組製品を目視で観察したのち、タテ材とヨコ材各2点から素材同定用の試料(長さ1～5mm程度)を合計4点採取した。同定方法は、樹脂包埋切片による組織構造観察である。

樹脂包埋切片は以下の手順で作製した。試料をマイクロチューブ(容量2ml)に入れて、アセトンの上昇系列により脱水した。上昇系列は60%アセトン×1回から開始して、80%アセトン×1回、100%アセトン×5回で各液に1時間以上浸漬した。脱水後の試料のアセトンを徐々にエポキシ樹脂(Agar Scientific社, Low Viscosity Resin)に置換した後に包埋した。重合後の樹脂の硬さは、Agar Scientific社のマニュアルに従い「medium」に調整した。樹脂包埋試料から、回転式ミクロトーム(Microm社, HM350)に装着したディスプレイザブルナイフ(Kulzer社, Histoblade)を用いて切片(厚さ10～30 μ m)を作製した。切片を標本封入剤(ファルマ社, PARA mount-N)で封入して観察用プレパラートとした。プレパラートは、KYO-1～4の番号を付して東北大学植物園に保管されている。

(3) 結果および考察(図86, 表9)

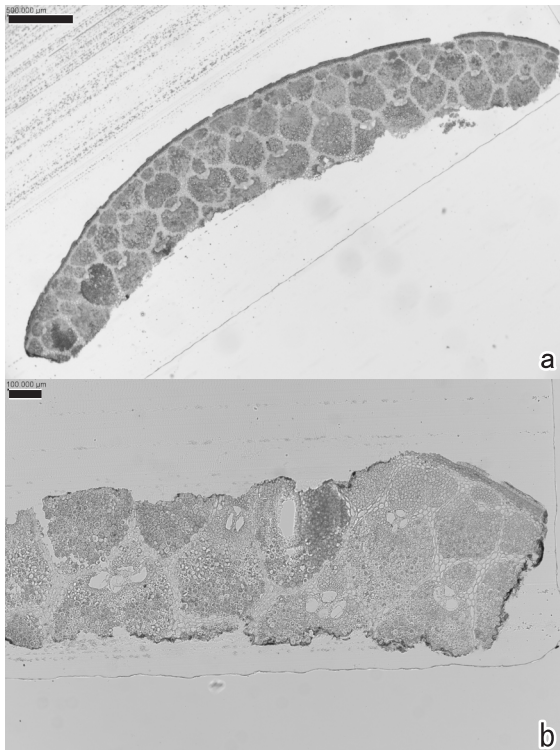
編組製品の素材植物 編組製品の素材は、タテ材・ヨコ材ともにタケ亜科(Bambusoideae, イネ科)の稈であった(図86)。表面に1細胞層の表皮、その内側に細胞壁の厚い下表皮が2～3細胞層あり、さらに内側には発達した繊維組織に囲まれた維管束が基本組織中に散在する。維管束には、稈の内側(髓腔側)に一カ所の原生木部、その両側外側に一對の丸くてやや大きい後生木部道管、さらに外側(表皮側)に一カ所の篩部があり、それら全体を細胞径が小さく厚壁の繊維細胞が取り囲んで維管束単位を構成している。これらの形質からタケ亜科の稈と同定した。タケ亜科には、マダケなどの竹類(比較的大径で、稈鞘が早期に脱落)と、アズマネザサなどの笹類(小径で稈鞘が長く宿存)がある。遺存状態が良いタテ材(KYO-1)の横断面から推定される稈の直径は7～8mmほどであることから、利用されたのは笹類の可能性が考えられる。

タテ材とヨコ材の調整方法については、横断面の形状からは、稈の割裂き材から髓腔側の組織を取り除いて厚さを調整するとともに、両縁の組織も取り除いて幅を調整したとみ

られる。ヨコ材に関しては表皮側の組織も一部取り除いていた可能性も考えられる。

編組製品の技法 底部と体部が観察されており、口縁は残存していないが、技法と形態からかごであったと推定される。出土状態の上面がかごの内側と推定される。編組製品の技法は、底部が2本1単位とする2本飛び網代で、一辺最低15cmあったと推定される。体部はタテ材・ヨコ材共に1本1単位で、2本飛びごさ目である。体部のタテ材は、1本おきに稈の表皮側と髓腔側を使い分けている。幅4.5～8.5（平均6.5）mm，厚さ0.86～0.92mmであった。ヨコ材は、かごの内側に稈の髓腔側が使われ，幅3.2～7.0（平均5.0）mm，厚さ0.49～0.71mmで，タテ・ヨコ材いずれも比較的幅広で厚く調整されていた。タテ材間隔は，体部上部の周辺で3.5～4.0mm。

（小林・佐々木・村上・能城・鈴木）



a：タテ材横断面（KYO-1）.
b：ヨコ材横断面（KYO-2）.
いずれもタケ亜科の稈の割裂き材.
スケールバー＝0.5mm（a），0.1mm（b）

図86 出土した編組製品の顕微鏡写真

表9 出土した編組製品の素材植物種

標本番号	植物種	利用部位	製品名	試料部位	素材幅(mm)	素材厚(mm)
KYO-1	タケ亜科	稈	編組製品	タテ材	5.0	0.92
KYO-2	タケ亜科	稈	編組製品	ヨコ材	3.2	0.71
KYO-3	タケ亜科	稈	編組製品	タテ材	7.2	0.86
KYO-4	タケ亜科	稈	編組製品	ヨコ材	4.7	0.49

8 出土桃核および木製品の年代測定

測定の経緯 今回の調査で遺存していた植物遺体のなかでは、桃核の多量出土が注意された。多いのは黒褐色土・黒色粘質土であるが、そこには平安時代後期の遺物のみならず、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物も多く混入している。そして、その段階の堆積である下部シルト層（図3－第7層）においても桃核は出土することから、出土する桃核が平安時代後期のものなのか、下部の古墳時代層に大量に存在したものが上層へ混入していると認定すべきか、決めがたい状況にあった。いずれの状況であるかは、大量出土する桃核の意味づけに大きく影響する。その手がかりを得るために、帰属する遺構や層準の明確な桃核そのものの放射性炭素年代を測定することとした。あわせて、下部シルト層出土の板状木器（第5節図78－I 1264）についても、素材の測定をおこない帰属時期の手がかりを得ることにした。作業は（株）加速器分析研究所にAMS測定を依頼した。暦年較正年代の計算にはIntCal13データベースを用い、OxCalv4.3較正プログラムが使用されている。以下同社より報告された測定結果を抜粋して示し（表10）、若干考察を加える。

測定結果と考察 試料1～3は古代末に比定される遺構からの出土桃核である。うち試料1は暦年較正年代（1 σ ）で1209～1255calADの若干新しい範囲が示され、試料2は1041～1154calAD、試料3が1034～1151calADの間にそれぞれ3つの範囲で示されている。試料1は、井戸SE5井筒を埋積させていた多数の遺物とともに出土したことを考慮すると、その廃絶～埋め立て時の年代を反映していると推測される。対して試料2・3は、2段階の造り替えがされるSK1の前半段階のSK1-2の埋積土からの出土と、後半段階の井桁Wに付着していたもの（図版4-3）であり、SK1が機能している年代を反映しているとみられる。したがって、試料1と時間差が生じていることは不自然ではなく、久安5年（1149）に近衛天皇の御願寺として造営され（『本朝世紀』）、承久元年（1219）火災により塔・金堂が焼失（『百練抄』）したのちには文献史料が見られなくなるという延勝寺の状況と、むしろ整合する年代値が得られている、とも言えよう。

試料4・5は、調査区北壁で、古代以降の資料を確実に含まない層から確保した桃核と木製品である。試料4は、調査区東部の黒色粘質土と暗灰色シルト層間に介在する白色細砂層（図4-7c層）から得られた。140～234calADの間に2つの範囲が示されており、弥生後期末～庄内式期が主体となる出土土器の内容と矛盾しない年代値と言えよう。一方、試料5の板状木器は23～74calADとやや古い年代値が示されている。弥生後期前半の資料

であった可能性もあろうし、素材の木の年代値であったとも言い得るだろう。なお、1～3世紀の暦年較正に関しては、較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なっているとの指摘があり、日本産樹木データによる暦年較正をした場合は、ここの報告年代値よりやや新しくなる可能性が示されている〔尾寄2009〕。

出土桃核の評価 以上より、桃核の帰属時期については、黒褐色土・黒色粘質土出土は平安時代後期、下部のシルト層出土は弥生後期末～古墳初頭頃として、出土層の時期に準じて比定して良いと判明した。弥生時代以降の出土桃核については多様な形態が知られ、金原正明は、古墳時代初頭に知られる先端が尖らない丸みを帯びたA類から、先端が尖る形態のB～F類を設定し、7～8世紀や平安期の多様化に言及している〔金原1994〕。今回の試料4も丸みを帯びた桃核で、先端の尖る試料1～3との形態差は年代の違いと矛盾しない。また、祭祀や呪術への利用が普及に大きく関連したとの指摘があり〔那須2014〕、今回の多量出土も、六勝寺という出土空間を考慮すると、食用や観賞用以外の利用である可能性もあろう。花粉等も含めた多側面での分析と検討を今後の課題としたい。



図87 年代測定試料とした桃核（試料1～4）と板状木器破片（試料5） 実大

表10 放射性炭素年代測定結果

試料	内容	出土遺構・層位	測定番号	14C年代 (yrBP)	暦年較正年代 (1 σ 暦年代範囲)
1	桃核	SE5井筒内	IAAA-182708	820 $\pm$ 20	1209calAD - 1255calAD (68.2%)
2	桃核	SK1-2埋土	IAAA-182709	930 $\pm$ 20	1041calAD - 1057calAD (12.3%) 1076calAD - 1108calAD (25.8%) 1117calAD - 1154calAD (30.0%)
3	桃核	SK1井桁W上面付着	IAAA-182710	940 $\pm$ 20	1034calAD - 1050calAD (14.5%) 1083calAD - 1126calAD (40.0%) 1136calAD - 1151calAD (13.7%)
4	桃核	北壁暗灰色シルト上面白色細砂 (図4-7c層)	IAAA-182711	1820 $\pm$ 20	140calAD - 197calAD (45.9%) 208calAD - 234calAD (22.3%)
5	木器 I 1264	北壁暗灰色シルト層 (図4-8層)	IAAA-182712	1950 $\pm$ 20	23calAD - 74calAD (68.2%)

〔IAA登録番号：#9508〕

9 小 結

(1) 白河街区跡・延勝寺跡の発掘調査成果について

調査地は、六勝寺のひとつ延勝寺の寺域内にあたるものと想定されてきた。今回は直接に延勝寺と関連付けられる資料はみられなかったが、平安時代後期の方形石敷土坑や多数の井戸・土器溜・瓦溜といった遺構と、土師器や瓦類を中心に整理箱200箱を越える多量の遺物を得ている。それぞれ重要な内容を含む成果であり、派生する問題をここに簡略にまとめておくこととする。

なお、1972年の六勝寺研究会による発掘調査では、調査区東半における大規模な瓦溜と下部における砂層と有機物を含む粘土層のひろがりから、池汀の存在とそれを埋めるための瓦溜、という推測が呈示されていた〔六勝寺研究会1972〕。今回の調査の結果、瓦溜はS X 14など東域で大規模なひろがり再び確認されたが、下部の堆積は古墳時代以前に形成された流路S R 1によるものと判明し、人為的な池汀は無いと結論づけられた。

方形土坑S K 1について 今回の検出遺構のうち最も重要と評価されるのが方形土坑S K 1である。土坑の底面に井桁状に角材を組み、その内側に石を敷くもので、東西に長い形態から縮小再構築されたことも判明している。類例を見ない遺構であり、遺構の機能や性格については完全に推測の域を出ないが、確認された状況から可能な範囲で試案を呈示して今後の検証に委ねたい（図88）。以下順を追って述べる。

①四辺の井桁状角材の上面に、板材を立ててめぐらす場合があった、と想定。

角材上面の中央部に穿たれている溝は板材を立てるためのもの、とする想定は、井桁Wが、ステップとして置かれた石（S K 1石1）に合わせた切り欠き部分に、板材を立てるためとみられる隙間と固定用の2孔を設けていることを根拠とする（図11参照）。

②四周に板材を立ててめぐらした場合は、滞水させたのでは、と想定。

上記のように板材を立てた場合、ステップとして置かれた石も隠されることになり、土坑内に降りるための足場として用を為さなくなる。したがって、このような造作をした理由は、土坑内を滞水させるためであったのではと想定する。板材を立てずに滞水した場合は、土坑壁面の崩落を招くことにもなってしまう。板材と土坑壁面との間には裏込めとして白色粗砂が充填される。調査時点では、壁面沿いに白色粗砂の厚い堆積が検出されている（図10、図版4-2参照）。もっとも、底面には漏水を防ぐ粘土などが貼られた痕跡は認められず、下部は弥生～古墳期の流路S R 1の埋積砂である。当時は湧水が著しく容易

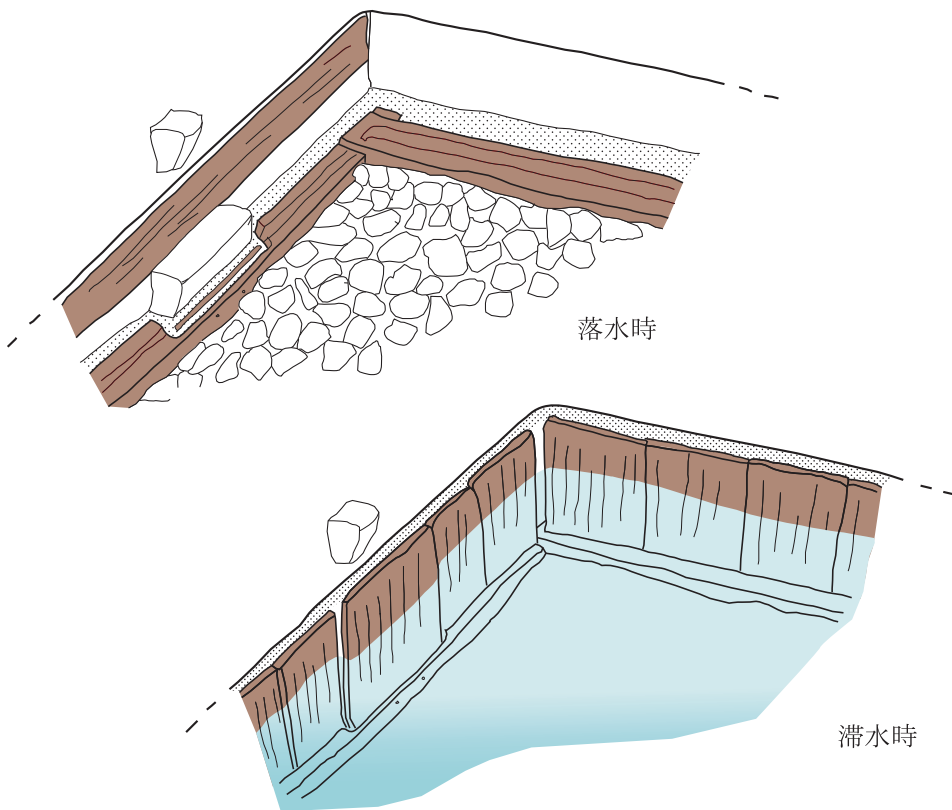


図88 SK 1使用状況の想定イメージ（西北部分を描写）

に滞水する条件であったり、底部を板敷きにするなどの工夫も想定するべきであろう。

③以上より、土坑SK 1は、

落水時：井桁角材上に板は立てず、内部床面の石敷き部分にも降りることが可能な状態で開口露出（図88上段）、

滞水時：四周に板を立てて水を張った状態で、開口露出（同下段）

といった2つの状態で使用される施設ではなかったか、と推測する。

④西側を意識した簡便な上屋が存在した可能性を想定。

SK 1の周囲には、特に東側に南北列の礎石が確認されるが、上屋を確実に復元できるような規則的な並びは今回の調査では把握できなかった。礎石などは、かつての調査で除去されている可能性も考慮して、京都市文化市民局文化財保護課が保管する1972年調査時の図面・写真類を借用閲覧し、作成されていた出土状況図を今回の遺構図と重ねて検証し

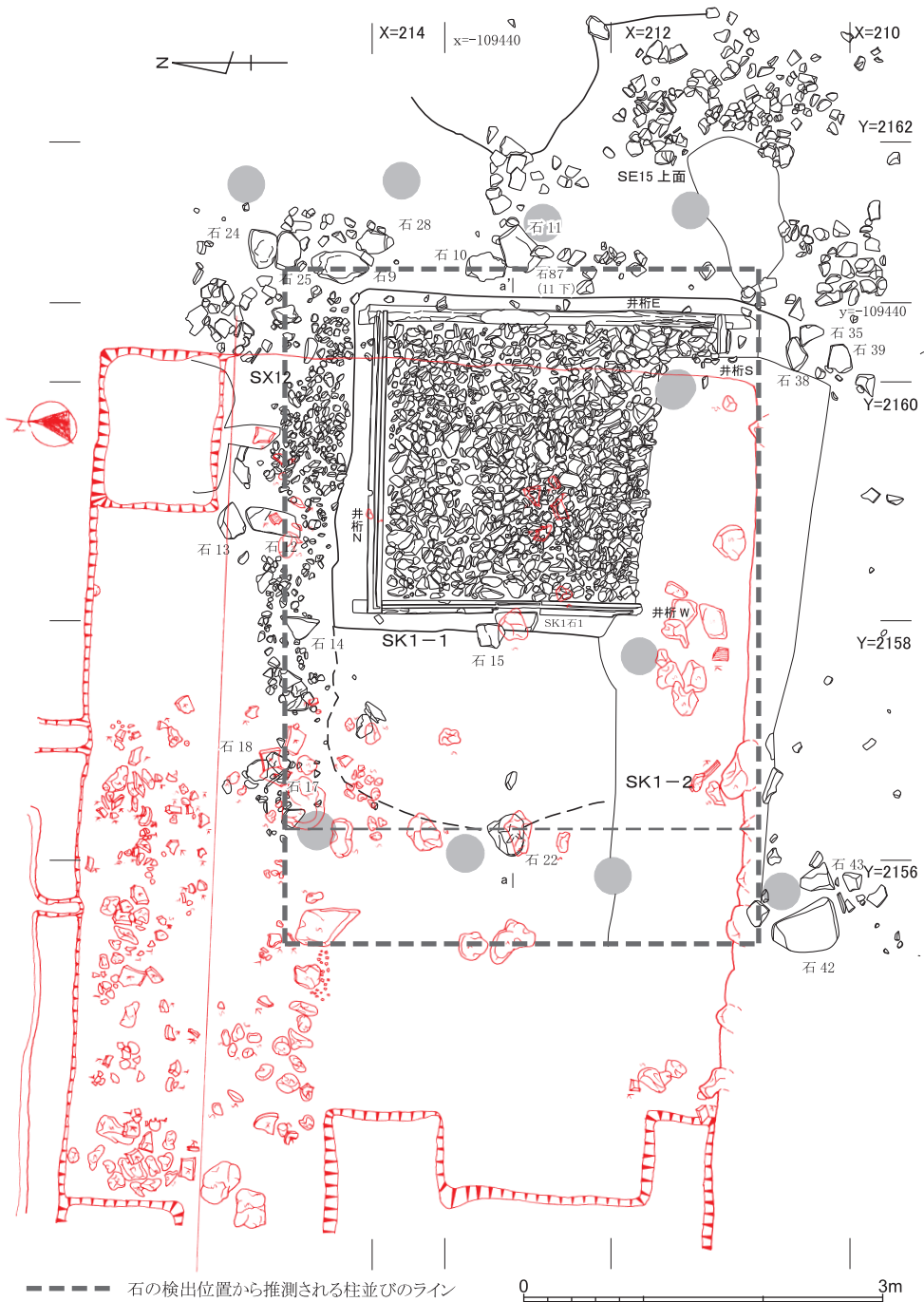


図89 SK1周辺1972年調査時平面図(赤線)との重ね合わせ 縮尺1/60

た（図89）。結果、南側については不明な部分が多いものの、西側には礎石とみなせる石の配置があったとも言え、図中の破線のように最大東西5.6m、南北4m程度の規模となる柱並びのラインを想定してみた。西から1m程度のところにもう1列南北の並びが確認されることから、縮小した造り替えに対応するものかもしれない。いずれにせよ、それぞれの石は小さくなく、地業をとまなうものではないことから、簡便な上屋にとどまるものであろう。そしてそれは、礎石分布の密度や土坑内のステップ状の石の配置からみても、西側からの出入りを意識したものであったと想定される。

⑤水に関連する寺院内の祭祀空間・祭祀施設か

以上のように、使われ方や外観を中心に推測を重ねてきた。結果、その性格は、水を用いた何らかの祭祀を執り行う施設であり、隣接して確認されている、曲物を設置した水溜施設S E 13・15や配石をとまなう土器溜S X 42等も関連して、一帯がそのための空間と認識されていたのではないかと、ここでは推断しておきたい。

仮に祭祀施設であるとして、それが、密教などで具体的にどのような祭祀に該当するのかを検討していくことが、今後の課題となる。同種の遺構が知られていない現況であるが、あくまで規模の類似で想起されるのが、東大寺二月堂の閼伽井屋である。現存の建物は鎌倉時代後半の再建になるもので、二基の井戸の覆い屋として桁行三間梁行二間（6.636m×3.656m）をはかる〔奈良県文化財保存事務所1964〕。修二会に際してお水取りの秘儀が執り行われる施設として知られている。こうした、小規模ではあるが重要な役割を担う施設であった可能性を考えておきたい。ただし、基壇や地業など大規模な建造物の存在を示唆する遺構は確認されない状況を考慮すると、寺院内の中枢空間ではなく、こうした小規模施設が集まる縁辺部に位置するものであったのではないかと想定される。

出土遺物について 今回調査の出土遺物の主体は、土器溜と瓦溜として大量出土している土師器皿類と瓦であり、それらに若干の木製遺物が加わる内容である。

土師器皿類は、退化した「て」字状口縁手法BⅣ類を少量含みながら、二段撫で手法C類が主体となり、口径9～10cmと14～15cmにまとまる遺構がほとんどであるが、井戸S E 5は、一段撫で手法で9cm未満の皿類が含まれる。平安京・中世京都の土師器編年〔平尾2019〕では、5B期を中心としながら、5A期に遡るものや6A期に下るものがわずかに含まれる様相に相当し、それらに比定された暦年代でみると、12世紀中葉ごろを中心としながら、前後にやや幅を持つ資料を含むものとなる。前節で触れたような延勝寺の履歴を考慮すると、中心はその造営時（1149年）ころの年代ということになり、矛盾のない内容

と言えよう。

瓦については、軒丸瓦・軒平瓦ともに非常に多数の型式が出土しているが、ほぼすべてが整地などにともない周辺から集められて集中的に遺棄されたものとみられ、延勝寺比定地としての特質をこれらの内容から導き出すことは難しい。それらの内容は、12世紀前葉の丹波産とされるM1・H1が型式別でみても最も多く、次いで播磨産、山城産の諸型式であった。丹波産の軒瓦M1・H1の組み合わせは、尊勝寺比定地においてかねてより報告されているもので〔奈文研1961〕、今回の多数出土は、調査地の尊勝寺寺域への近さを反映するものと言えよう。一方で、南側隣接地での調査においてまとまった点数が出土している備前・備中系の軒瓦は〔京都市埋文研2014〕、今回は確認されなかった。

木製品については、墨書「田マ□□」をもつ曲物が特筆されるほか、中～小型の祭祀具や各種の部材が確認された。湿潤な環境にある岡崎地区では、これまでも多くの木製遺物が確認されていると予想されるが、まとまった報告はみられない。寺院関連の器財や祭祀具など、六勝寺での宗教活動の復元をより具体的に裏付ける内容のものが含まれている可能性が高く、今後体系的な呈示と比較検討が望まれるといえよう。

延勝寺と白河街区について 今回の調査では、多様な内容を含みながらも、延勝寺の存在を直接示す資料や、寺域の手がかりとなるような遺構は、残念ながら確認されなかった。位置や寺域の比定は今後の課題として残されることとなる。もっとも、上述したSK1が仮に延勝寺内の施設であったとすると、西側を意識した作りであることを重視するならば、寺域の中心は西方にあった蓋然性が高いと言えることになり、調査地点は寺域でも東寄りに位置していたと評価できることになろう。

また、白河街区との関連で言えば、調査地は推定される二条大路に南接する位置にもあたっているが、それをうかがわせるような状況は、全く確認されてない。築地や側溝などがあるとすれば、さらに北側ということになる。そのなかで、段差を無視して長くはしる東西溝SD32・33や砂で埋積する南北溝SD34は、切り合い関係から調査区の平安後期遺構として最初期段階に築かれたと評価される遺構であり、延勝寺以前における地割や街区の設定を反映している可能性に注意しておきたい。

(2) 岡崎遺跡に関連する調査成果について

下層の岡崎遺跡関連については、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期初頭）を中心とする時期のまとまった土器資料と、木製農耕具の未製品（第5節・I1264）を得ることができた。土器は、調査区の東半で古代の遺物包含層に混在して多く出土するとともに、

小 結

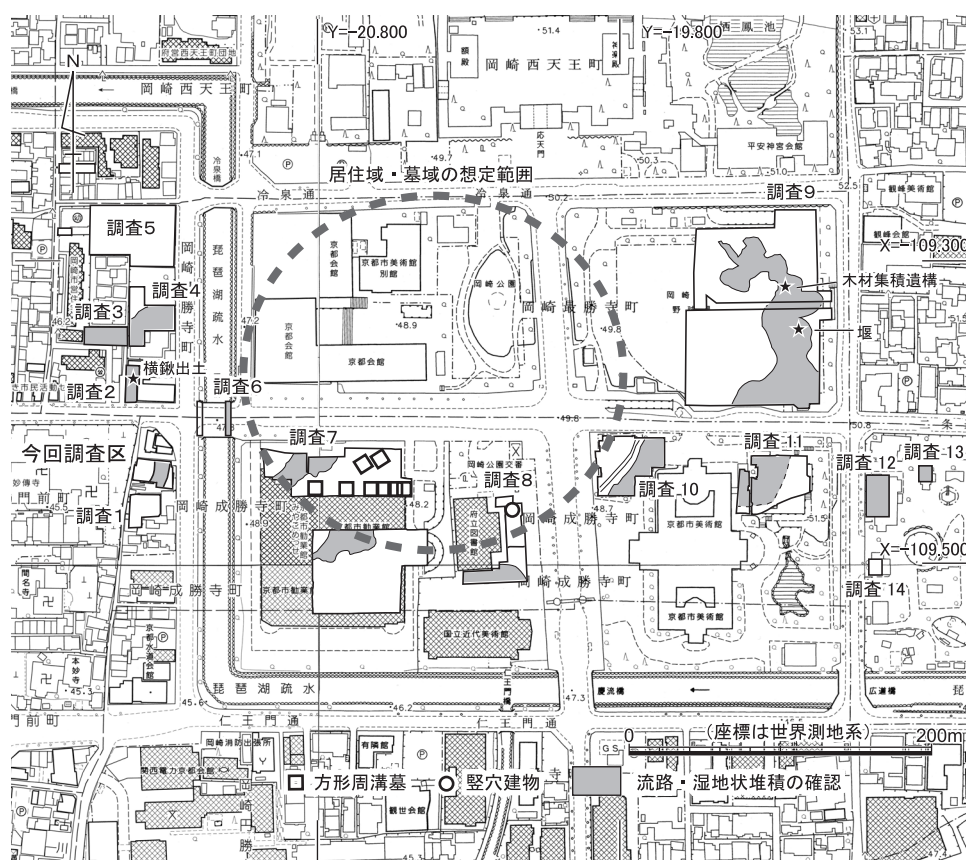


図90 岡崎遺跡の弥生後期末～古墳前期の主要遺構検出状況 縮尺1/5000

- 調査1：京都市埋蔵文化財研究所 2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』
 調査2：熊谷舞子 2016『Ⅵ尊勝寺跡・岡崎遺跡』『京都市内遺跡発掘調査報告平成27年度』
 調査3：梶川敏夫 1987『14尊勝寺跡』『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 調査4：上村和直・西大條哲 1994『29尊勝寺跡・岡崎遺跡1』
 『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 調査5：(株)イビソク 2015『白河街区跡・尊勝寺跡・岡崎遺跡』
 調査6：竜子正彦 1999『8岡崎遺跡・延勝寺跡』『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』
 調査7：網伸也・会下和宏・櫻井みどり 1995『16成勝寺跡』『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 会下和宏 1995『岡崎遺跡の方形周溝墓について』『研究紀要』1(京都市埋蔵文化財研究所)
 調査8：有井広幸 1999『2. 成勝寺跡・岡崎遺跡発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』86
 調査9：内田好昭・丸川義広・平方幸雄 1995『12最勝寺跡・岡崎遺跡』
 『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 調査10：京都市埋蔵文化財研究所 2015『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』
 調査11：円勝寺発掘調査団 1971『円勝寺の発掘調査』(上)『仏教芸術』82
 調査12：鈴木廣司・平方幸雄 1983『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』
 調査13：平方幸雄 1991『27法勝寺跡』『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 調査14：小森俊寛 1988『13白河街区3』『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』

東北部の一角では、流路遺構 S R 1 の上面や埋積砂中で残りの良い土器の一括出土 S X 31～34が確認された。一方、木製農耕具未製品は、有機物を多量に含む湿地状堆積の要素を呈する下部のシルト層中から得られている。こうした状況から、今回の調査地は、微高地を東～北方の至近に控えた谷状の低地部にあたり、その微高地上に居住域や墓域など集落が展開している可能性が高いと推測されるに至った。そこで、今回調査地の周辺における同時期の調査成果もあわせて検討し、まとめとしておきたい（図90）。

居住域・墓域の想定 今回調査地の約100m東方に位置する調査7で10基の方形周溝墓が、またその東側の調査8では竪穴建物1棟が確認されている。そして、さらに東の調査10においては、北東－南西方向に弧状にはしる溝とその東方に湿地のひろがり確認され、大量に土器が出土している。これら3地点の遺構検出面の標高は47.5～48m程度であり、今回調査地の S R 1 上面が45m弱であることから、2～3m程度の比高差をもった微高地のひろがり、そこでの居住域・墓域の展開が想定されることになる。調査10で検出された溝は、その報告でも指摘されるように、東限を画する遺構と推測される。また調査8南辺においても沼状地形のひろがり確認され、南限と想定できる。調査7の南調査区において顕著な遺構確認がみられないことも、その傍証となろう。

湿地帯のひろがり 一方、流路や湿地状堆積の確認は、上記3地点の東・西側をとりまくように各所で報告されている。西側についてみると、調査6の立会調査においては、庄内期の流路が確認されているほか、調査2～4においても、標高44～45m程度のレベルで有機物を多量に含む湿地状の堆積が下部に広がることが確認され、調査2では木製横鋤が出土している。これらは、今回の調査で確認されたシルト層や流路 S R 1 と状況が類似し、一連の堆積になるものとみられる。また南側の調査1でも、断面では同様な有機物層が標高44m付近で報告されているので、南へも続いている可能性が高い。南北方向に150m以上の範囲にわたり、土器や木製遺物なども含んだ湿地状の低地帯がひろがっていると想定される。こうした状況は、東側についてはより明瞭であり、調査9で南北100m以上にわたり検出されている蛇行流路では、木材集積遺構や堰が確認されているほか、延長にあたる調査10や調査11でも多数の土器や木製品の出土をみている。

北側の範囲については情報が乏しいが、調査5においては、東から西へ下る地形は確認されているものの、弥生後期末～古墳前期初頭の堆積は明確でなく、出土遺物も稀少となる傾向がうかがわれる。現況では、この調査5も含めた北方の一帯は、弥生中期の墓域形成がみられるのみで、その後の利用状況は不詳と言わざるを得ない。

集落像の想定 以上を総合すると、図90の破線で示すような、おおよそ径250m程度が微高地上の居住域・墓域の範囲としてあり、その両側に頻繁な利活用をとまなう湿地帯域が付属する、といったひとつの集落単位の姿が描かれてくる。なお、より東方の岡崎南御所町付近でも同時期の土器がまとまって採集されているほか〔飛野1983〕、京都市動物園内の調査12・調査13においても流路内からまとまった土器や木製品の出土が報告されていることから、流路を介在させながら東側にも別の集落単位が存在し、岡崎遺跡総体としてはより大規模なひろがりをもつものとなる可能性が高いと考える。また、ここで想定する集落単位内においても、調査7における方形周溝墓の群構成が示唆するように、複数の小規模なまとまりが存在しているものとみられる。調査成果の追加を待つてさらに検討すべき課題といえよう。

課 題 今回の調査では、下部のシルト層については、時間的制約から一部の断ち割り調査にとどまり、有機物遺存体層の全容を把握することはできなかった。自然堆積ではありながら、遺物の包含が確認され、人的な働きかけの対象となった可能性の高い湿地として、今後の調査機会が生じた際にはより計画的で精細な調査を実施する必要性を指摘しておきたい。

謝 辞

今回の発掘調査と遺物整理、報告の作成を通じて以下の諸機関・諸氏にご高配とご教示を賜りました。末尾ながら厚く御礼申し上げます（五十音順・敬称略）。

京都市文化市民局文化財保護課・（公財）京都市埋蔵文化財研究所・滋賀県立琵琶湖博物館・（公財）滋賀県文化財保護協会

石田志朗・上原真人・内田好昭・馬瀬智光・金原正明・國下多美樹・佐々木尚子・佐藤亜聖・里口保文・鈴木久男・関晃史・辻康男・富島義幸・中村健二・中村智孝・西山良平・新田和央・林竜馬・別所秀高・増田富士雄・吉江崇